

---

# ゼロの使い魔advance

赤石 ナイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロの使い魔 advance

### 【Nコード】

N4108Y

### 【作者名】

赤石 ナイ

### 【あらすじ】

戦いは終わらない。

いくら血を流そうが、涙を流そうが決して終わらない。  
していることも守護者と変わらないのかもしれない。

だが、それでも良かった。

守れるものがひとつでもあるのなら、戦い続けよう。

神堂元の新たな戦いが始まる。

## prologue (前書き)

本作品は作者による独自解釈が含まれており、またオリジナル要素も含まれているためお気を付けください。

また、前作である『魔法少女リリカルなのはadvance』のネタバレ要素が多分に含まれているため、お気を付けください。

## prologue

元「正義の味方」か…」

イシュタル「帰ってきて早々どうしたんですか？」

世界の外れのこの場所は時間も因果も全てがない。

男は調整を終えたその後、必ずこの場所に戻ってくる。

英霊でいうところの“座”である。

因果から外れ、この輪から逃れる術などはない。

あるとすれば、魂魄ごと全てを消滅されての存在の死のみである。

彼相手にそれが可能なのは、直死の魔眼をもつ彼女、破界と再世のみだ。

元「偽りの正義かと思っていたが、マギ・ステルマギも捨てたものではなかった。何より、収穫があった…」

イシュタル「収穫ですか？」

それがどんなものなのかは、元本人にしか解らない。

しかし、彼が調整を続けていくことに新たな活力となるものだったのは間違いない。

元「…それで、次はどこにいけばいいんだ？」

イシュタル「そうですね…え〜と、次は…あつ、また魔法の世界みたいですよ」

またか…。

まあ、それなら俺も動きやすい。  
だが、どんな世界だろうと神秘に対する隠匿は存在するだろう…。  
でなければ、危なっかしいしな。

イシュタル「いいえ、どうやら魔法が生活に馴染んでいる世界みたいですよ」

元「……それは、また難儀な世界だ」

イシュタル「難儀…ですか？」

魔法にまで至った俺が言うのもなんだが、神秘なんてものはあまり好ましいものとは思えない。

出来ないことがあるからこそ、人は一生懸命にもなれるし、生涯を費やそうとも思える。

魔術師なんかはそうだ。

根源、魔法に至るために一つの家系が数世代に渡って、神秘を探求する。

それこそ、自らの人生と命の全てをにかけてだ。

しかし、魔法が一般化してるとなると話は変わる。

魔術師ではなく、魔術使いとして魔法を使っているのだろう。

別段、神秘を手段として用いることがダメだというわけではない。

しかし、俺がこれからいく世界が魔法に依存しているのであれば、人が人らしく生きていくことへの障害にしかない。

元「…まあ、俺が気にしてもどうにもならんな。現物 セカイを見たわけでもないし、これからだな」

イシュタル「？」

管理者はよくわからないと首を可愛らしく傾げる。  
妹の容姿をしている分、何だか嫌だ。

元「…はあ、それで制限はどんなものなんだ？」

イシュタル「ナシです」

なし？

イシュタル「英霊も二人までなら、連れていっても良いそうですよ」  
さらには英霊を二人もだと？

元「ちょっと待て。 どういうことだ!？」

“魔法”も“魔術”の制限もない。  
宝具の制限もない。

加えて、英霊も連れていっていい…それも二人だと!？

イシュタル「どうやら、世界の…抑止の影響がかなり小さいみたいですよ。 あちらの管理者曰く、その世界は並行異世界ではなく、完全な異世界のようなので」

それなら理解できる。

起源が違うのならば、世界からの抑止も限りなくゼロに近い。  
だが、流石にアラヤは存在するようだ。  
でなければ、英霊など連れていけるわけもないか…。

元「話は変わるんだが…」

イシュタル「なんでしよう…」

????「クイ？」

こいつはなんだ…？

小さい竜だ。

薄い水色の体に白の腹部：30cm程度の体長に可愛らしく首を傾げるその姿は万人の心を盗むだろう。

この場所に戻ってきて最初に目に入ったのはイシュタルではなく、こいつだった。

しかし、管理者たるイシュタル以外は居ないはずである。

なんで、視界にいれないように頑張っていたが、限界だった。

元「こいつは何だ？」

イシュタル「気づいたら、居たんですよ…本当ですよ」

元「ふん…」

指でその小さな竜をつついてみる。

竜の割には皮膚は柔らかい。

なんだか、ぷにぷにしている。

????「な、なにをするの」

元・イシュタル「…はい？」

????「突つつくのをやめて欲しいの…」

元「喋った？」

イシユタル「喋りましたよね？」

????「竜が喋ったらいけないの？」

普通は喋りませんよ？

数百年を生きた神龍などは確かに喋っても可笑しくはないが…。

元「君：名前は？」

????「名前なの？ ミルっていうの」

元「性別は？」

ミル「女の子なの」

元「どうやって、ここに来たんだ？」

ミル「森を抜けると異世界だったの」

川端康成！？

なぜ、トンネルを抜けるとなんだ！？



元「それで、気づいたらここにいたんだな？」

ミル「そうなの、お姉ちゃんはどこなの？」

元「お姉ちゃん？」

ミル「そうなの…イルククウお姉ちゃんなの」

イシュタルはこの子竜がどこから来たのか先程から調べているようだ。

その間、俺は子守というわけだな…。確かに俺は傭兵として…というかなんでも屋として子守もしたことがある—（黒歴史）。

しかし、まさか竜の子守をするとは思わなかった。

元「今、あそこのお姉ちゃんが調べているから、もう少し待っててくれな？」

ミル「クイ…わかったの」

子供とはいえ、30歳だ。

流石に少しは聞き分けが良い。

しかし、本当にどこから来たんだろうか…。

イシュタル「元さん！ わかりましたよ！」

元「そうか…それでどこから来んだ？」

イシュタル「元さんがこれからいく世界から来たみたいですよ」

それは好都合…なのか？

なんだか、作威的なものを感じる。

イシュタル「まあ、問題も解決が見えましたし、景気良く英霊の皆さんを呼んでみましょう！」

元「…：良かったな、もう少しで家に帰れるぞ」

ミル「クイ〜！ ありがとうなの」

無駄にテンションの高いイシュタルを無視して、小さな竜に話しかける。

嬉しそうに喉を鳴らし？ ながら、喜ぶ子竜と俺に無視され、管理

者は既に涙目である。

鬱陶しいのでスルーだ。

元「さて、英霊を呼ぶとするか…イシュタル準備はいいな？」

イシュタル「うう…：酷いです…少しでも、元気にいこうかと…思ったのに」

元「はあ…：わかったから。早く、英霊を呼んでくれ」

イシュタル「…：ああああ！ もう、わかりましたよ！ それで誰を呼ぶんですか！？」

所謂、逆ギレというやつだ。

いや、俺が悪いのかもしれないが元はといえば、こいつがウザイのが原因だ。

少し落ち着けよ…ミルが怯えてるだろ。

子竜は俺の後ろに隠れるようにしてプルプルしながら怯えている。

元「それじゃあ、アルトリアとクー・フリーンを呼んでくれ」

イシュタル「了解です…それではいきすよ」

彼女が前に手を掲げると、そこは眩いまでの光に包まれた。

座へのアクセスは上手くいくだろうか…。

いくら向こうの世界の規制が緩いとはいえ、根源からの規制は変わることはない。

必要以上の負担をかければ、世界は拒否する。

特にギルガメッシュとヘラク罗斯を呼ぼうものなら、確実に座からシャットアウトされる。

イシュタル「来ました…」

ミル「（大いなる意思を感じるの！）」

眩いまでの光の中から現れた人影は二つ…。  
そのモノは…。

ランサー「サーヴァント・ランサー…召喚に従い参上した。

これより、我が身・我が槍は御身が下に在り。

我が名と我が誇りに懸けてここに誓約する」

アーチャー「アー「ダウト」なに！？」

現れたのはクー・フリーンとエミヤだった。  
なんでかなあ…。

元「イシュタル…何でアルトリアじゃなくて、エミヤがいるんだ？」

イシュタル「ま、間違えちゃいました…テへ」

無性に殺意が湧いてきた…。

アーチャー「待て！ セイバーと間違えたとはどういう意味だ！？」

元「ああ…そのままの意味だよエミヤ。 この馬鹿が間違えたんだ」

イシュタル「ご、ごめんなさ〜い！」

俺に頭をなんども小突かれ、既に涙目だ。

痛いのか？

痛いだろうさ…小突くとはいえ、結構本気だからな…。

ランサー「なあ…俺はこれでよかったのか？」

元「ああ、クー…君は間違いない。よく来てくれた」

アーチャー「クツ！ 間違いで召喚される身にも…！」

元「いや、本当に悪かった。原因は全部、このバカだから」

イシュタル「うう…」

あまりに小突かれすぎて、彼女の頭は大仏顔負けの状態になっている。

タンコブで頭が倍近くの大きさになっているのは気のせいだとしてしよう。

イシュタル「うう…本当にすみませんでした…。直ぐに座に「いや、もういい」「ふえ？」

元「このメンツで行こう…バランスは悪くない」

ランサー「いいのか？ ここに来る途中、セイバーに会ったんだが…今にも斬りかかりそうな形相でこつちを睨んでいたんだがよ…」

アーチャー「私など、黒化の勢いで睨まれたんだが…」

…死んだかも。

前といい、その前といい、そして今回といい…あれ？ 詰んだか？

元「ま、まあ…あれだ、なんとかするさ」

ランサー「出来るのか？ 女の嫉妬つてのは、キツイぜ？」

アーチャー「私が言うのもアレだが、セイバーが怒ると…食費3ヵ月分が飛ぶぞ？」

財布で済むのなら…安いもんだ。

いや、財布で済むのか？

元が頭を抱えている足下ではミルが口を半開きで、英霊二人を見ている。

ミル「（精霊様なの！ 凄いの！）」

二人から視線をずらし、元を見る。  
顔色が悪い。

ミル「（なんなの？ この人を見てると何だかポカポカするの…）」

なんでだろうか。

ない頭を絞って、考えてみた。

ミル「（まあいいか）」

諦めた。

なんだか、大切な事な気もしたが疲れるからやめた。

ランサー「それで、俺たちはいつ向こうに送られるんだ？」

元「む…そういうば、どうなんだイシユタル？」

イシユタル「向こうの準備が出来たら、合図があるみたいですよ？」

アーチャー「合図が…ところで、その竜はなんなのだ？」

ランサー「俺も気になっていたんだがよ…なんだか随分とお前に懐いてるじゃねえか」

ミルは再び、俺の頭の上に垂れかかるように乗っかっている。

元「この場所に迷い込んで来たらしい。それで、これから向かう先の世界がこいつの故郷なんだそうだ」

ランサー「へえ…そいつは良かったじゃねえか」

クーは俺の頭の上にいるミルの頭をガシガシと乱暴に撫ぜている。それにミルは気持ちよさそうに喉を鳴らしている。頭の上にいるため、表情は見えなかったが恐らく目を細めて気持ちよさそうにしているのだろう。

ミル「あ、あの初めましてなの。 精霊様にお会い出来なんて嬉しいの」

アーチャー「ん？ 君には私たちが何なのかわかるのか？」

ミル「なんとなくだけどわかるの」

アーチャー「ほお…」

それは驚きだ。

英霊は確かに精霊に分類される。

それが一目で解るのか…。

感慨に耽っていると、目の前に銀の鏡のような2m程度のものが現れた。

元「もしかして、次の世界はハルキゲニアか？」

イシユタル「あれ？ 言ってますでしたっけ？」

言ってるねえよ。

ハルキゲニアか…向こうは何年くらいたっているのだろうか。

ランサー「あん？ お前は行ったことがあるのか？」

元「昔にな…向こうが何年経っているかわからんが、これで二度目だな」

アーチャー「ふむ…それならば、ある程度の知識はあるか」

元「まあ、詳しい話は向こうに着いてからでいいだろう…。クー、



エミヤ…それに触れてみる」

言われるがままに、素直に銀の鏡のようなものに触れる二人。あれは使い魔召喚の一種のゲートだ。

ランサー「お、おい元！」

アーチャー「ぬ！？ 抜けん！」

指先で触れたただけなのだが、強烈に引き込まれているようでズブズブと奥に引き込まれていく。

元「まあ…そうなるよな」

ランサー「クソッ！ どうなってやがる！」

アーチャー「これは…召喚か！？」

元「正解だ…結構強引だがな。それじゃあ逝くぞ」

元は二人の背中を押し込めるように奥に叩き込む。

元「それじゃあ、イシュタル…行ってくるぞ。ミルも準備はいいか？」

ミル「クイー！」

イシュタル「はい、行ってらっしゃい元さん」

元もまたゲートに歩を進めていく。

だが、何かを思い出したように彼女に伝言を告げる。

元「アルトリアに言い訳しておいてくれ…」

イシュタル「私に死ねと!？」

そんな彼女の悲鳴にも似た非難は彼に届くことはなかった。

## 主人公設定 & a m p ・サーヴァント

名前：神堂 シンドウ 元 ハジメ

肉体年齢：26歳

身長：195cm

体重：78kg

イメージカラー：黒

特技：空手、柔術、八極拳、システム、合気道を組み合わせた我流の体術 剣術 槍術 弓術

趣味：読書 歴史、神話の独学 鍛練

魔術回路：メイン120 サブ70

魔眼：流動の魔眼

人間の可能性を信じていることが出来たため、本当の力を取り戻した真の調整者。

調整者とは根源：根源の渦のアカシックレコードに記されているイレギュラーによる破滅の結果を正すものこと。

その力は、管理者群に帰属されており、彼らの要求の下行動する。

かつて、あらゆる魔法にも属さない異端の魔法をもって根源に至った存在を管理者が掬い取り調整の役を授けた。

しかし、その力はガイアやアラヤ、抑止力、英霊といった神秘に比べあまりに脆弱であり人間の域をでることがでない。

戦闘スタイルは剣による白兵戦がメインであり彼が用いる五大元素や様々な魔術はあくまで補助にすぎない。

義手に隠されているナイフ、アンカーや圧倒的な戦術幅、剣、槍、弓、体術を効果的に用いて身体的スペックの勝る英霊とも対等に渡り合うことが出来る。

神堂元が英霊達と同等の戦闘を演じられるのは、彼が生前に養ってきた圧倒的なまでの戦術幅と魔眼の力によるものが大きい。

魔術師の腕は超一流であり、最高の才をもち、彼が唯一の超一流となれる分野でもある。

また、世界から外れたことにより彼には起源は存在せず、「」である。

## 身体スペック

筋力 B    耐久 B    敏捷 B    魔力 A +    幸運 C    宝具 E    A ++

## 所持スキル一覧

流動の魔眼：あらゆるモノの流れを読むことが出来る魔眼。それは  
当人によってオン・オフが可能であり、視ようとすれば世界の流れ  
：未来視も可能である。

しかし、それには脳に多大な負担がかかり、廃人になる可能性も高  
い。

これを用いて、彼は対人・対神秘に対する戦闘を優位に進めること  
が出来る。

創造：彼の魔法であり、第1～6までも属されない異端の魔法。調  
整者にまで昇華された最大の要因。

創造の名の通り、対象を理解さえすれば対象と全く変わらないレベ  
ルのモノを創れる。これによって本来ランクの下がる投影を彼はラ  
ンクを下げることなく、完全な状態で造り出すことが出来る。

また、元は根源に至ったため魔力さえあれば新たな命もあまつさえ  
世界すら創りだす事ができる。

心眼（真）：Bランク

修練・経験の積み重ねによって得られる物。得られた情報と戦闘経  
験に基づき冷静な状況判断によって活路を見出すことができる。

カリスマ：Cランク

軍団の指揮能力、カリスマ性の高さを示す能力であり、Cランクは  
軍を十二分に率いることができる。

騎乗：Bランク

乗り物を乗りこなす能力であり、魔獣・聖獣ランク以外を乗りこな  
すことができるが竜種は範囲外である。

軍略：Bランク

多人数戦闘における戦術的直感能力。

圏境：Bランク

気を用いて周囲の状況を感知し、自らの存在を隠蔽する技法。極めれば天地と合一し、姿を自然に透け込ませることができる。

陣地作成：Aランク

魔術師固有のスキル。

戦闘続行：Bランク

決定的な致命傷を受けない限り生き延び、瀕死の傷を負ってなお戦闘可能とする。曰く、泥水啜っても生き延びる。

対魔力：Cランク

第二節以下の詠唱による魔術を無効化し、大魔術・儀礼呪法など大がかりな魔術は防げない。これは彼自身にあるモノではなく、彼の羽織っている黒のコートに施されている。

魔眼：A＋ランク

流動の魔眼

魔術：A＋＋ランク

魔術を修得していることを表し、A＋＋ランクは魔法使いのレベル。

以上上記のスキルは全て、サーヴァントに与えられるものだが、彼もまた似て非なる存在のため、該当するスキルを記す。

しかし、この該当する殆どのものは生前の彼の行いから来るものである。

煉獄刀・紅蓮レンゴクトウ：ケレン - - ランク（Bランク相当）

再世者である付喪海から受け取った異界における鬼神の一振り。  
真紅の刀身が指し示すは圧倒的な破壊である。  
血肉を吸えば吸うほど、その切れ味は鋭くなり刀身は赤く染まっていく。  
本刀剣は再世者から受け取ったものであり、世界からの制限は元にかからないため、彼の固有武装となっている。

名前：クー・フリーン

肉体年齢：25歳

身長：185cm

体重：70kg

イメージカラー：青

特技：魚釣り 素潜り 山登り

好きなもの：気の強い女 無茶な約束

属性：秩序・中庸

槍兵の英霊。高い瞬発力と白兵戦の能力を備え、紅い魔槍を持つ。根は実直で、口は悪いが己の信念と忠義を重んじる英霊らしい英霊と言える。

元との最初の出会いは戦いを目撃した一般人として聖杯戦争の掟に基づき士郎を殺そうとした際に出会った。

当時は一般人であった元を舐めてかかり、撃退されたことから彼に興味を持った。(それでも、彼は本来の実力の数分の一も出していない)

元が知りうる限り、最速最高の槍使いである。

また彼は、元のことを友達タチだと思っている。

真名はクー・フリーン：ケルト神話最大の英雄である。

生前は父である太陽神ルーと母であるコノア王の妹デヒテラの子供として生まれる。

少年時代(七才程)の時に鍛冶屋クランの獯猛で有名な番犬に襲われたところ、たった一人で番犬を絞め殺してしまった。

その際に、愛犬の死に嘆くクランに次の番犬が見つかるまで、自分が貴方の番犬となりましようと思し出た所、王からクー・フリーンの名を授かる。(意味はクランの猛犬)

また、その際に犬の肉を食べないという禁忌 ゲツシュ を立てた。

青年期は領主フォーガルの娘エマーに求婚するが断られたため(立派な戦士になってから向かいに来て：の意味で)、影の国を訪れ女王スカアハの下で修行を行う。

スカアハの下で武術と魔術を習った。彼女の下には彼以外にも修行を行う仲間がいたが、その中でただ一人ゲイボルグを授かることになった。その後、帰国したクー・フリーンだが、フォーガルはエマーとの結婚を許さなかったので、フォルガルを打倒してエメルを



娶った。

コノートの女王メイヴとの戦いで、修業時代の親友フェルディアを  
ゲイボルグで殺してしまった。また、彼を訪ねてきた息子コンラを  
それと知らずにゲイボルグで殺してしまう。

彼の最期はゲツシュを破り、半身が痺れたところを敵に奪われたゲ  
イボルグに刺し貫かれて命を落とす形となったが、その際にこぼれ  
落ちた内臓を水で洗って腹におさめ、立ったまま死のうと巨石に体  
を縛りつけ息絶えた。

身体スペック

言峰綺礼	：筋力 B	魔力 C	耐久 C	幸運 C	敏捷 A	宝具 B
神堂元	：筋力 B	魔力 B	耐久 B	幸運 C	敏捷 A	宝具 B

所有スキル

対魔力：C

第二節以下の魔術は無効化する。大魔術や儀式呪法などを防ぐこと  
はできない。

戦闘続行：A

往生際が悪く、瀕死の状態でも戦闘を続行するスキル。  
伝説に謳われたクー・フリーンの戦い方が由来から来る。

仕切り直し：C

戦闘から離脱する能力。

ルーン：B

北欧の魔術刻印・ルーンを保有。

ルーン文字は北欧神話の主神オーディンが、自身の命を囿に巨人から盗んだものである。

矢よけの加護：B

視界内からの飛び道具の攻撃への対処能力。

ただし、超遠距離や広範囲攻撃には無効。

彼の射的武器への耐性は“風切り音と敵の殺気”から軌道を読む。

神性：B

神霊適性の高さ。高ければ高いほど、神との交わりが深いことをしめしている。

神の子。

## 宝具

刺し穿つ死棘の槍ゲイボルグ：Bランク

必中必殺の呪いの槍を使用して因果を逆転し“敵の心臓に命中している”という結果を作った後に原因を放つ対人宝具。

対人戦の際には絶対的に有利なモノとなる。

なお、発動したと同時に「心臓を貫いたという結果」が成立しているため、仮に放った直後でランサーが死んだとしても、槍はひとりで動いて相手の心臓を貫く。

つまりは、余程の幸運の持ち主で無い限り使われたら負けとなる正に必殺の一撃である。

突き穿つ死翔の槍ゲイホルク：B＋ランク

渾身の魔力と力を持って投擲して放つ、前者が命中を重視したものでならば、こちらは威力を重視している。

一撃で一軍を吹き飛ばす威力がある。

因果を歪ませる呪い及び必中効果は健在であるものの概念的な特性や運命干渉などは無く、あくまで単純威力系宝具に分類される。

それでも“放てば穿つ”という呪いの効果により、何度かわされようと標的を捕捉し続け、防御しようとも槍の神秘を上回らないかぎり、槍は進み続ける。

名前：エミヤ シロウ

年齢：27歳

身長：187cm

体重：78kg

イメージカラー：赤

特技：ガラクタいじり、家事全般

好きなもの：家事全般（本人は否定）

属性：中立・中庸

聖杯戦争時に、凜と契約した弓兵の英霊。キザで皮肉屋で現実主義者だが、根底の部分ではお人好し。

弓兵のクラスでありながら、二本一対の陰陽の夫婦剣“干将・莫耶”による白兵戦を好む。

彼は干将・莫耶の究極技ともいえる“鶴翼三連”の発動呪文も発動可能であり、弓兵として、剣を变化の魔術で加工し、“偽・螺旋剣《カラドボルグ?》”をなどを扱う。

さらには、ランサーとの戦闘の際に、ギリシャ神話のトロイア戦争にてアイアスが使用した盾で、投擲に対しては無敵とされる“熾天覆う七つの円環”なども使用するなど、規格外かつ正体不明な英霊であった。

真名はエミヤ。

とある未来の世界で死すべき百人を救うために世界と契約した衛宮士郎その人であり、全てを救うという理想を追い求め続け、世界と契約を交わし、その百人を救った。

だが、現実には“霊長の守護者”：アラヤの劣兵という残酷な現実であった。

理想を追い続けたその生涯は最後まで報われることなく、彼は自分が助けた相手からの裏切りによって命を落とす。

それでもなお、誰一人恨むことはなく、笑顔で死んでいった。

英霊となった彼に与えられた役割は霊長の守護者として、拒絶不可能な虐殺に身を投じることだった。（全てを救うことなく、9のため1を切り捨てる）

その過程で人の暗黒面をまざまざと見せ付けられ、理想への絶望を見た。

後悔の先に見たものは、過去の自分を殺して輪から逃れるという限りなく0に近い奇跡に思いを託すことだけだった。

その後、聖杯戦争においてサーヴァントとして召喚された彼は様々な謀略を張り巡らせて、衛宮士郎を殺そうとしたが、結局は彼もエミヤであり彼の正義の味方への思いを認めてしまうという結果に終わった。

その後、魔法に目覚めかけた元の手により、消滅を免れ聖杯戦争の影を共に戦い抜いた。

元とは皮肉を言い合える仲という、数少ない男友達という仲である。

### 身体スペック

遠坂凜：筋力D 魔力B 耐久E 幸運C 敏捷C 宝具  
神堂元：筋力C 魔力B+ 耐久C 幸運C 敏捷B 宝具

### 所有スキル

対魔力：D

一工程による魔術を無効化する。

効果としては魔除けの護符程度である。

単独行動：B

マスターからの魔力供給が無くなったとしても現界していられる能力。ランクBは二日程度活動可能。

千里眼：C

純粋な視力の良さ。遠距離視や動体視力の向上。  
高いランクの同技能は透視・未来視すら可能にするという。

魔術：C

オーソドックスな魔術を取得している。

心眼（真）：B

修行・鍛錬において養われた戦闘を有利に進めるための洞察力。  
わずかな勝率が存在すればそれを生かすための機会を手繰り寄せる  
事ができる。

宝具

アンリミテッドレイドックス

無限の剣製：E A++

リアリティ・マープル。

空想具現化の亜種であり、術者の心象風景で現実世界を塗りつぶし、  
内部の世界そのものを変えてしまう結界のことを言う。

本来は悪魔が持つ異界常識であるが、長い時間を掛けて“固有結界”  
を形成する魔術が確立され、一部の人間が使用可能となっている。  
魔法に最も近い魔術とされ、魔術協会では禁呪のカテゴリーに入り、  
魔術師たちにとっては最大級の奥義であり、魔術の到達点のひとつ  
とも言われている。

エミヤの固有結界はオリジナルを目視するだけで、その剣を解析・  
複製し結界内に貯蔵するというもの。

この固有結界による複製品はオリジナルと比べてランクが一段階下

がっつてしまっが、宝具すら複製可能で使い手の経験や技術も武器の記憶として投影されており、その記憶を元にある程度使いこなすことや“真名解放”すらも使用可能となるなど規格外の性能をもつ。

しかし、彼の属性は剣なため、良くも悪くも剣に特化しており、剣以外を投影するとなると、ランクはさらに下がり魔力の消費量も数倍となる。

さらには、固有結界の暴走の際には、体中から剣が内部から貫き術者本人の命を奪いかねないなど、デメリットを見るとかなり危険なものである。

だが、これによりエミヤは相手によって有利な様々な宝具を使い戦闘を有利に進めることができる。（不死のものには不死殺しの剣を用いるなど…）

## 第1話 使い魔と騎士

本日何度目の爆発だろうか？

目の前にいる桃色がかったブロンドの長髪と鳶色の瞳を持つ少女がその発生源だ。

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール…実際に長つたらしい名前だと思うが、私も人のことは言えないのでそれは置いておこう。

今日行なっているのは使い魔を呼び出す“春の召喚の儀”で、ここはトリスティン魔法学校である。

この儀式は1年生が2年生に進級するために必要な、とても重要なものである。

進級を覗いても、呼び出された使い魔の種族や特徴などにより、そのメイジがどの系統のメイジかを確定させるという意味でも、とても重要な儀式だ。

例えば、私から離れた（と言っても、それほど離れていない）位置にいる“香水”の二つ名を持つモンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシはカエルを呼び出した。このことから彼女は水系統のメイジということが確定されたと言っている。

そして、私の隣で本を読んでいる親友で無口な少女タバサは風竜を呼び出した。

その事から、彼女は風系統に特化したメイジということが解る。だけど、まさか竜を呼び出すなんて思わなかった。

確かに彼女は15歳という年齢でトリアングルメイジという優秀なメイジではあるが、竜を呼び出したことから彼女の才能の高さが窺える。



親友として、私も鼻が高いわ。

ついでに、というか私はサラマンダーを呼び出した。

タバサの使い魔に負けず劣らずの最高の使い魔だと親馬鹿？ながらに思っている。

まあ、そんな感じで私は火系統のメイジということが解る。

そして、名前はフレイムって名前にしたの。

この鮮やかで大きい炎の尻尾持つてる火トカゲなんか、絶対に火竜山脈から来に違いないわ。

だって、こんなに美しいんだもの！

……、取り乱してしまっただわね。

話を戻すと、未だに爆発を起こしているルイズは召喚が上手くいっていないのだ。

ルイズは所謂、落ちこぼれと呼ばれている。

その理由は魔法が一切使えないからだ。

魔法を使おうとすると、全てが爆発という形で起こってしまうからだ。

火、水、風、土の4系統全てが爆発になってしまうのだ。

彼女の家は、トリステイン屈指の名門貴族であるヴァリエール公爵家であり、その始祖はトリスタン王家の庶子である。

そして、彼女の両親はトライアングルとスクウェアという、魔法の才能が引き継がれなくては可笑しいくらいの最高の血筋なのだ。

流石に可哀想だと思う。

彼女が家名を前に出すだけの人間なら、大して可哀想だと思いきもないのだが、そうではなのだ。

彼女の努力量は間違いない、学園一である。

勉強も人の2倍も3倍もしているし、結果として実践魔法を除いた

座学ではほぼ学年トップの成績を収めている。

そんなこともあるから、周りの人間からは“ゼロのルイズ”（魔法の成功率0）などという不名誉な二つ名まで付けられている。

かくいう、私もそういう風に言っ、彼女をからかっているのだが…。

私の実家であるツエルプストー家とルイズの実家であるヴァリエール家とは国境を挟んだ隣通しであり、トリステインとゲルマニア両国の戦争ではしばしば杖を交えた間柄であるため、所謂仇敵という言葉である。

だからと言っ、私がそれを意識して、彼女をからかっている訳ではない。

確かに、あの無駄に高いプライドは好ましくはないが、彼女の努力に対する姿勢は嫌いじゃない。

なら何でからかうのっか？

反応が面白いからよ。

あの子は私のことを、友達だとは思っていないかもしれないけど、私はそれなりに大切な友達だと思っている。

だから、そろそろ報われてもいいんじゃないの？

そんなことを思っていると、ふと幼い頃の思い出が頭に駆け巡った。昔、お父様が『神は救いを与えはしない…与えるものは乗り越えられる試練のみだ』なんて言っただけど、これがルイズにとっての試練だというの？

だとしたら、余りに可哀想すぎる。

ねえ、神様…そろそろ報われてもいいんじゃないの？

憂鬱な感情が沸き上がり、思わずため息が出てきた。

なんで上手くいかないのよ！

ルイズは焦っていた。

いや…もはや情けなくて悔しくて、怒りすら生まれていた。

私は魔法の発動が成功したことがない。

だから、周りにはゼロのルイズなんて馬鹿にされてきた。

そのたびに、ヴァリエールの名前をだされて、お父様やお母様、姉様達にどれだけ恥をかけてきたかわからない。

勉強は人の何倍もしてきた自負はある。  
だから、座学の成績はほぼトップだった。  
なのに…知識はあるのに、魔法の実践となると必ず失敗する。  
必ず、爆発が起きるのだ。

今だって、盛大に爆発している。  
ここまで盛大だと馬鹿にされているようで、余計にイライラしてくる。

周りでは、クラスの皆が声に出さないように小さく笑っていたり、馬鹿にするような目で見ている。

コルベール「ミス・ヴァリエール、今日はこの辺にしてはどうですか？」

この儀式の監督官である、ミスタ・コルベールは諦めるように促してくる。

諦める？

冗談じゃない。

こんな所で諦めたら、それこそ進級出来なくなる。

そんなことになったら、家になんて言っただいのか解らないし、周りからはさらに家のことを馬鹿にされる…私一人のせいだ。

ふと、視線をずらすとキュルケがため息をついていた。

…負けたくない。

誰かに負けるのも、自分に負けるのも嫌だ。

だけど、ツエルプストーの女に負けるのは死んでも嫌だ！

ルイズ「ミスタ・コルベール、お願いです、もう一度だけ召喚させてください！」

そんな風に思っていたせいか、今まで出たことがないくらいに鬼気迫るものが出てしまった。

それに押されてか、ミスタ・コルベールはたじろぎながらも後一回だけだと了承してくれた。

周りの生徒たちは、成功するはずがないだろなんて罵声を浴びせてくるが無視して、サモン・サーヴァントの呪文を詠唱する。

ルイズ「宇宙の果てのどこかにいる、私の下僕よ！

強く、美しく、そして生命力に溢れた使い魔よ！

私は心より求め、訴えるわ。我が導きに応えなさい！」

お願い、私の召喚に応えて！

呪文を詠唱しながらも、今まで以上に強く心の中で祈る。

しかし、起きたのは爆発であつた。

ただ、その規模は今まで以上に大きなものだった。

コルベールや周りの生徒たちは爆発の規模に驚きながらも、また失敗かと思つたのだが、当の彼女は違和感を感じていた。

ルイズ「…あれ？　なんだろう…この感じ」

何かとは言えない。

だけど、今まで以上に大きく起きた爆発の中から現れたのは3人の人間だった。

???「爆発と落下はお前の専売特許のはずだったんだがな…」

???「誰が好き好んで、そんな召喚を望むか」

???「まあ…別にいいんだがよ。　なんつう強引な召喚だよ…」

青の騎士と赤の騎士、そして…黒の戦士がそこにはいた。

ランサー「それにしてもよ、いつまで続くんだ？」

アーチャー「いくら、異世界へ渡る為とはいえ…ここまで強引な召喚など聞いたことがない」

二人の愚痴を聞きながら、俺は黙って前に進む。

どっちが上で下かも解らない、道のない中をただ前に進む。  
光はない。

かといって、暗闇でもない。

なんとも不思議な空間ではあるが、俺はこれが3度目だ。  
クーとエミヤには2度目など言ったが、正確には3度目なのだ。  
とは言っても、1度目は数日間しか居なかったため、ある意味2度  
というのは正しいと思う。

元「先に言っておくが、お前らは受肉している」

アーチャー「やはりな…どこか違和感があると思っていたが、受肉  
していたか」

ランサー「これはお前がやったのか？」

元「いや、向こうの管理者がやったんだろう…とはいえ、お前らは  
英霊だ。並のルーンではお前ら縛ることは出来ない」

英霊とは過去、その偉業によって多くの人々の想いを受け世界に招  
聘された存在だ。

故に並の魔術師程度では彼らを御することなど叶わない。

元「そこでだ、向こうの管理者が用意したシステムに従って、令呪  
を受けることになるだろう」

ランサー「なんでだ？ そんなもん、お前のサーヴァントになれば  
良いだけの話だろ？」

魔術師ではなく、魔法使い兼調整者の俺ならば英霊も御することは  
可能だ。

勿論、令呪に頼らずだ。

しかし、ここで一つの問題が発生する。

アーチャー「ランサーよ…それは叶うまい」

ランサー「どういうことだ？」

アーチャー「我らを召喚したのは元ではなく、向こうの人間なのだ…そうだろ？」元

元「そういう事だ。それに向こうの召喚には一つの大きな意味がある」

ランサー「大きな意味だ？」

世界の命運と比べれば、さしたる問題ではない。しかし、それでは向こうの召喚主が流石に可哀相である。

ふと、彼らから前に視線をずらすとそこには光が見えた。

元「ゴールか…この話は向こうでする」

????『宇宙の果てのどこかにいる、私の下僕よ！

強く、美しく、そして生命力に溢れた使い魔よ！

私は心より求め、訴えるわ。我が導きに応えなさい！』

耳に聞こえるのは恐らく向こうの召喚主の詠唱だろう。

その声はなんとも気の強い少女のものと思える。

ハルキゲニアの気の強い少女といえば、彼女を思い出す。

思わず、苦笑いをしてしまった。

彼女は元気だろうか？

なんて思ったが、下手をしたら何百年も経ている可能性があるため、生きていない可能性がある。



こんな空虚にも似た感覚も既に慣れている。  
調整になってから、既に何度も経験している…。

ランサー「なんだ？ こいつは」

アーチャー「詠唱も何も無いな…酷く傲慢で神性の欠片も感じない。  
だというのに、この強制力は…」

元「（何だ…この感覚は。 前とは違う…いや、この感覚を俺は知っている？）」

各々に感じる感覚を残したまま、俺達は爆発に巻き込まれた。  
…これは、アーチャーの領分だろ！！

爆発の影響で閉じてしまった目を開けると、そこは先程までの空間  
ではなく、俺の知る学園の広場だった。  
ふと、出てしまった言葉は各々に不満いっぱい愚痴だった。

元「爆発と落下はお前の専売特許のはずだったんだがな…」

アーチャー「誰が好き好んで、そんな召喚を望むか」

ランサー「まあ…別にいいんだがよ。 なんつう強引な召喚だよ…」

目の前には多くの学園の生徒たちと桃色がかった長髪の少女だった。

????「あんた達…誰!？」

謝罪がくるとは思っていなかったが、浴びせられたのは避難にも似た言葉だった。

三人「はあ…」

思わず、ため息がでたのは仕方のない事だろう。  
それにしても、彼女に似ている…。

ルイズ「あんた達…誰!？」

目の前の少女は不機嫌そうにそう言った。

回りの少年たちと同じ年と考えると、年はおそらく15、6歳ほど  
であろうが年齢よりもずいぶんと見た目が幼いように見える。

そんな彼女は黒いマントの下に、白いブラウス、グレーのプリーツ

スカート、髪は桃色がかったブロンド、そして透き通るくらいの白い肌、そして鳶色の目が踊っている。  
その容姿は美少女といっても謙遜ではない。

元「俺たちか？ 君に召喚された者のはずなのだがな…」

ルイズ「召喚された者って…まあいいわ。それで、どこの平民」

平民か…。

あいも変わらず、鬱陶しい差別だ。

なんと答えようか考えているうちに、クーが口を開いた。

ランサー「なあ、平民ってなんだ？」

元「…ん？ ああ、ハルキゲニアでは貴族が平民を統制する所謂、貴族政治で成り立っているのさ」

ランサー「貴族政治ね…随分と古めかしいことをやってんだな」

アーチャー「クツ…それを君が言うのかね？ ランサー」

ルイズ「ちよっと！ 私の質問に答えなさいよ！」

俺たちだけで会話していたのが気に入らなかったのか、桃色髪の少女は癩癩を起こしたかのように怒鳴っている。

元「…そうだな、取り敢えず質問に答えてもいいのだが…その前にそこにいる教師に杖を下げるように言ってもらえるかな？ あと、水色髪の少女にもだ」

コルベール・タバサ「!？」

ルイズ「え？」

まさか、気づかれると思わなかったのか彼女と彼は驚いた顔をしている。

教師は汗を流しながらも、大人しく杖を下げたが、少女は改めて杖を構える。

タバサ「……」

キュルケ「ちょ、ちょっとタバサ!？」

隣にいる彼女の友人であろう褐色の肌の少女が慌てる中、当の彼女は極めて冷静になんの感情もないように見える。

コルベール「ミズ・タバサ……」

タバサ「……」

教師からの言葉でようやく、杖を下げた彼女に俺はため息を漏らした。

ランサーは面白いものが見れたとニヤニヤ笑っており、アーチャーは渋い顔をしている。

緊迫した空気の中、召喚主の少女は一体何があったのか解らないといった顔をしており、自分の解らないことがあるためか余計に不機嫌な雰囲気を出す。

しかし、周りの生徒たちはそんな空気を感じ取ることができなかったのか、少女を嘲笑うかのように罵声を浴びせる。

生徒A「ルイズ、“サモン・サーヴァント”で平民を召喚してどうするのさ？」

ルイズ「ちよつと間違えただけよ！」

生徒B「間違いつて、ルイズのそれはいつもの事だしなあ」

生徒C「さすがは“ゼロのルイズ”。平民を使い魔にするなんて聞いたことないよ！」

ふむ…生徒たちの言葉から推測しよう。

このルイズと呼ばれた少女は使い魔を召喚しようとして、私たちを呼び出すゲートの触媒に使用された…といったところか。

つまりこれは彼女にとっては完全な事故だろう。

我が身は守護者だ。

調整たる元によって守護者本来の役目ではなく英霊としての私が正義の味方という夢を叶えることに従事できることは今まで幾度かあった。

そして、今回もその一つである。

それは、まだ悲劇が起こっていない世界に召喚されたということ。

つまりは一つのチャンスではないか？

私が“正義の味方”を目指すことができるのではないのか？

そう思うと、目の前にいる少女が罵倒されているのは気分が悪い。どのような形であれ私に一つのチャンスを与えた形になった彼女を放って置くわけにはいかない。

だが、元は未だに水色の髪をした少女と教師であろう男から目を逸らしていない。

しかたない…私になんとかするか。

アーチャー「君達」おい…「テムエ等」ふむ…」

どうやら、私の役目はないようだ。

ランサー「仮にとはいえ、俺を召喚したマスターを侮辱したんだ…  
覚悟はできているんだろうな？」

ランサー…「クー・フリーンは私などとは違い実に英霊らしい英霊と  
言える。」

普段の飄々とした彼からは想像しできないが、彼は私などとは比べ  
物にならないような誇り高い“英雄”なのだ。

そんな彼としては、自らのマスターになる少女が侮辱されている…  
ということは自分の誇りが侮辱されているということと同意義なの  
だ。

生徒B「な、なんだ！ 平民風情が貴族にたてつくのか！」

明らかに、ランサーの雰囲気呑まれている。

10代半ばの少年少女などでは、彼の威圧に勝てるはずもない。  
現に少年の声は震え、存在は空気の抜けた風船の如く萎んでいる。

だが、貴族か…なるほど。

ふと脳裏に浮かんだのはロンドンで出会った少女と独りの少女だっ  
た。

彼女は優雅さと気品…そして、高いプライドの中でも感じる優しさ  
を感じるものだった。

そして、私が衛宮士郎として召喚した少女は独りだった。

今でこそ元がいるからいいが、あの時の彼女は独りだった。

それでも、誰よりも誇り高い騎士で誰よりも優しい王で、誰よりも  
独りだった。

だが、目の前にいる彼ら彼女らは何だ？  
これが貴族か？

いや、違う。

認めたくなどない。

生徒C「なんて、生意気な！」

アーチャー「ふむ…敵意を向けるといふことは、その覚悟があると  
見ていいのだな？」

ルイズ「え？ あ、あんた…」

ランサー「アーチャー…、 テメエ…」

アーチャー「何、気にするな。 私としても、マスターがこうまで  
罵声を浴びるのは忍びない…。 それだけだ」

こんなモノが貴族など、認めてはいけない。  
そんなことをしたら、ルヴィアにもセイバーにも顔を合わせられな  
い。

生徒一同「…!?!？」

元「チツ！」

コルベール「な…!?!？」

ルイズ「うつ…」

余りに濃厚な殺意に目の前の生徒たちは顔色を悪くしている。  
それもそうだろう…。

かの者たちは英雄だ。

勝ち目のない戦い？ 命の危機？ 守られなかった者？ 救えなかつた者？ 戦争？

そんなモノは彼らにとっての日常だったのだ。

そんな中で生きてきた彼らの意思の塊に高々十数年しか生きていないガキに耐えられるものではない。

後ろにいるルイズにかからないように殺意を向けようとその余波ですら、ルイズ、も気持ち悪そうにしている。

元「……」

ランサー「…なんの真似だ」

元「その殺気をしまえ…クー、エミヤ」

ランサー「人のマスターを侮辱したのは…悪いのはそこにいるガキ共だろうが」

アーチャー「流石に今回はランサーの意見に賛成だ。 私としても、あのような愚劣な存在を貴族などと認める訳にもいかん」

元「言いたいことはわからんでもない…しかし、当のマスターにまで殺気を浴びせてどうするんだ？」

ランサー・アーチャー「…！」



彼らはルイズに視線をずらとようやく気づいたのか、少しづつ殺気を押さえ込んでいった。

元「それに、まだ使い魔の契約も終わらせていない…少し落ち着け」

鋭い眼光が彼を捉える。

それであろうやく彼らも落ち着きを見せた。

とはいえ、ランサーはかなり渋っていたように見える。

ランサーはせめて、自らのマスターを侮辱した生徒たちへ睨みでもきかせようとその方向に視線をずらしたが、そこでは恐らく教師であるう男が一部を覗いて罵声を浴びせていた生徒たちを叱りつける姿が見えた。

コルベール「あなた達も誇り高い貴族ならば、つまらない事で他人を貶めるような言動は慎みなさい！」

生徒一同「……」

先程の殺気を浴びていたせいもあるのか、教師の男の説教も相まって彼らの顔色は悪い。

いい気味だ…そう思うくらいはいいだろう。

元「ルイズとやら…気分は大丈夫か？」

ルイズ「え、ええ…大丈夫よ」

先程までよりもずっと血色は良い。

まったく、来て早々問題を起こすのはやめて欲しいものだ。

しかし、当の本人であるランサーは全く悪びれる様子もない。

アーチャー「マスター、すまないな」

ルイズ「あなた達、本当に平民？」

元「うん？」

ルイズは疑問に思った。

只の平民にここまで濃密な殺気が出せるものなのかと…。

今の今まで殺気というものを受けたことの無い彼女ですら理解できた  
明確な殺気を…。

私が呼び出したのは本当に平民なのか…。  
もしかして、どこかの国の騎士様を呼び出してしまったのではないか？

よく見れば、青のボディースーツは鎧だし、赤の外套の下にあるのは黒色の鎧ではないか…。

もう一人の男もあの殺気の中でなんともないように動けることから、彼も平民ではないように思える。

だけど、返ってきた返答はそんな私の疑問を全て吹き飛ばすくらい簡単なものだった。

元「平民だよ…君たちの概念からしたらな」

本当にそうなんだろうか…。

だけど、残りの二人も貴族ではないと答える。

私の思い過ごしだったのかな…。

元「さて…中断してしまったようだが、契約の続きといかないか？」

ルイズ「…！ わ、解っているわよ！ 平民のくせに偉そうにしないでよ！」

元「はいはい…」

自分から言っただけだが、使い魔の契約の契は少し憂鬱になる。

その内容もそうだが、その結果俺に対しては何もないのだ。

しかし、それに待ったをかける人物がいた。

コルベール「少し待っていただいても宜しいですか？」

元「失礼…貴方は？」

コルベール「失礼しました。私はここトリスティン魔法学園で教師をしております、ジャン・コルベールといたします。随分と落ち着いていられるようですが、貴方「元だ」…ハジメ様は本儀式を理解しておられるのですか？」

元「それなら問題はない。昔、同じように召喚されたことがあるのでな」

コルベール「そうですか…って、貴方は既に使い魔として契約されているのですか!？」

ルイズ「ええ!？」

そう言えば、言ってなかったな。

後ろのクーとエミヤも初めて聞いたというような顔をしている。仕方ないだろ？

説明の途中で召喚されたんだからな。

元「その点は、問題ない…。俺は体質の問題で使い魔として契約できない。だから、誰かの使い魔というわけではない」

コルベール「契約できない？　ということは、ハジメ様は使い魔にはなれないということですか？」

元「すまないがな…まあ、俺が契約できなくとも後ろの二人が代わりに契約してくれるだろ」

今になって理解した。

何故、制限も無い状態でカニバルもいないというのに英霊二人をつ

れていったのか…。

俺は使い魔にはなれない…ということは目の前にいる少女は進級出来ないということだ。

つまりはそのために英霊を一人、そして予備に一人…ということなのだろう。

コルベール「しかし、よろしいので？ 見たところ、御二方は高名な騎士様とお見受けしますが…」

元「先も言ったが、今は只の平民だ…何の問題もない。 というか、そうしなければ彼女が進級できないだろう？」

アーチャー「元、進級とはどういうことだ？」

元「ここトリスティン学園では1年から2年へ進級する一つの条件として、使い魔の召喚が義務付けられている。そして、その呼び出した使い魔によって本人の魔法の系統が決まる…ということだ」

アーチャー「…ふむ」

ランサー「魔術の系統ねえ…」

ルイズ「あんだ、平民の癖に随分と詳しいのね」

元「ここの学園長とは知り合いでな…」

ルイズ「オールド・オスマンと？」

元「そう…あのエロ爺とな」

元気にしてるんだらうな…あの妖怪。  
何故だか知らんが絶対に生きてるだろう。  
殺しても死なないようなジジイだ。

元「まあ、そんな訳だ。俺は君の使い魔になれんが、その二人  
が君の使い魔になってくれる」

ルイズ「平民を使い魔にしたって、なんの自慢にもならないわよ…」

ランサー「まあ、そう言うな嬢ちゃん。少なくともそこらへんに  
いる生モノに比べりゃ、役に立つぜ？」

アーチャー「…まさか、幻想種に出会えるとは思わなかったが、少  
なくともここにいる奴らに比べればマシだと思うがね」

ルイズ「平民の癖に偉そうなのよ！」

自分たちの使い魔を馬鹿にされ流石にいい気はしないのが、周りの  
生徒たちは青筋を額に浮かべている。  
しかし、ここでまた騒ぎ出せば面倒になると理解したのか、騒ぎ立  
てることはしなかった。

元「二人ともそこまですておけ、これ以上問題を起こすようなら  
ば、俺もそろそろキレルぞ？」

ランサー「…！ チツ、わあっ たよ」

アーチャー「う、うむ…了解した」

元「はあ…ルイズとやら、待たせたな。それでは頼む、ミスタも

それでいいかな？」

コルベール「…わかりました。 ミズ・ヴァリエール…」

ルイズ「わかりました」

いまいち納得出来ないような少女にコルベールは契約をするように促す。

先ほどまで、騒がしかった広場は一瞬で静かさを取り戻した。そして、その中心にいたのは一人の少女と二人の騎士だった。

ランサー「サーヴァント・ランサー、召喚に応じ参上した。

これより我が身、我が槍は御身が下にある。

我が名、我が誇りに懸けてここに誓約する」

アーチャー「アーチャーのサーヴァント、召喚の呼びかけに応じ参上した。

これより我が身、我が弓、我が武具全ては君が下にある。

我が名に懸けてここに誓約する」

少女の前で片膝を付くその姿は、ハルケギニアの人間から見ても、あくまで無謬、どこまでも優美な“騎士”の礼だった。

騎士達は今や一片の疑いも無く、艶と勇ましさのある声で、朗々と誓約を謳いあげた。

その姿が予想外に立派で、優雅であり、従順な騎士の仕儀にルイズは赤面してしまった。

いくら公爵家の娘とはいえ、このように騎士から忠誠を誓われることなどこれまでの人生で無かったのだ。

どうしたらいいのか…。

そんな思いが頭の中で駆け巡り、ショート寸前だった。

そして、どうしていいかわからなくなってしまう、コルベールに助けを求めてしまった。

ルイズ「ミ、ミスタ！ こ、こここの場合どうしたら!？」

しかし、助けを求められたコルベールも驚いていた。

今の今までこれほど優雅な所作を目にしたことはなかったからだ。そして、その優雅さのなかにも隠しきれない勇ましさが出ている。これほどまでの騎士だとは思わなかったのだ。

只の平民ではない…それは確信していた。

それ故に、これ程までに…驚いてしまった。

コルベール「契約しなさい。君が呼び出し、彼等も答えると言ってるんだ」

現に彼女に忠を誓うと言っている。

樂觀視しているのかもしれないが、危険は無いと見ていいだろう…。

いや、もはや確信だ。

少なくとも彼女に危険はない。

それを感じさせるほどまでに、彼等の礼は従順だった。

ルイズ「でも…」

ルイズは反論しようとするが、うまく言葉にできなかった。

いくら使い魔として呼び出したからって、こんなにも立派な礼ができる騎士を自分の使い魔にしているのか。

周りは静寂で満ちている。

先程まで私を馬鹿にしてきた生徒たちも、その騎士の所作に目を奪われているようだ…。



そして、目の前で膝を付いたままの彼らは私の言葉を待っている。

ルイズ「（でも、召喚をやり直す魔力も無いし、とりあえず強そうだし、それにいつまでも跪かせておけないし…しょうがないわよね！）」

自分の中で取り敢えず正当化させた少女は彼等の下に近づくと、コントラクト・サーヴァントを唱えた。

ルイズ「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

5つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我が使い魔となせ」

詠唱を終え、未だに騎士の礼を取り続ける男の顔を持ち上げて口づけをする。

本来ならば、この後に使い魔のルーンが彼らに刻まれるのだが…。

ルイズ「い、痛い！！」

それは彼らだけではなく、少女にも現れた。

彼女には歪な刺繍のようなものが両手の甲に現れ、彼らには左手に一つのルーンが現れた。

ルイズ「っな、なんで!?!」

コルベール「これは…」

元「詳しくは後で説明してやる…。しかし、今はまだ契約の途中だ…」

契約の途中？

この男は何を言っているのだろうか…。

というか、なんで私にルーンが刻まれてるのよ！

私に使い魔になれっての！？

しかし、彼女の苦悶に満ちた顔とは別に騎士達は契約の言葉を唱える。

彼女が行なったものはあくまで使い魔としての終わりである。

しかし、騎士との契約はまだ終わってはいないのだ。

ランサー「ここに契約は完了した。

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール…。

我が名、我が誇りに懸けてここに誓約する。

これから先、我が身、我が槍は御身が下にある」

アーチャー「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ、我がエミヤの名において誓う。

我が剣、我が弓、我が武具の全ては君と共にあり、君の運命は私と共にある。

ここに契約は完了した」

再び目を奪われた。

そうだった。

これは只の使い魔の契約ではないのだ。

これは…私（主）と使い魔（騎士）との主従の契約なのだ。

ルイズ「…初めまして、私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ。改めて、宜しくお願いね」

なんでか解らないけど、自然に自分の名前を口にしていた。  
今さっき、自分の名前を言ったばかりなのに、どうしてだろう…。  
だけど、答えは直ぐに見つかった。  
さっきのはあくまで契約としての呪文でしかなく、今はルイズと  
しての自己紹介なのだ。

騎士二人は呆けた顔をして、お互いに顔を向け合わせたが直ぐにそ  
れは笑に変わる。

アーチャー「私はエミヤという。これからよろしく頼むマスター<sup>ルイズ</sup>」

ランサー「俺はクー・フリーンつうんだ。よろしく頼むぜ嬢ちゃん<sup>ルイズ</sup>」

自分の名前が呼ばれてこんなに嬉しかったことはなかったのではな  
いか。

心躍るといふのはこういうことなんだろうか。

使い魔と自分だけの騎士を手に入れたことにより、喜びで顔を綻ば  
させている彼女をよそに、アーチャーは一人の男の姿を探していた。

アーチャー「(元はどこにいった?)」

元の姿はその場にはなかった。

## 第2話 現状確認

「オスマン…、少し老けたな」

「ホッホッホ…。30年も経ったので、じゃが…お主は変わらんのぉ。羨ましいわい」

目の前に座っている男こそが、このトリステイン魔法学院の学園長である。

周りからはオールド・オスマンの愛称で親しまれて？いる。

しかし、30年か…。

となれば、俺の知る人間も幾らか死んでしまっているだろう。

「安心しろ。今回はここで骨を埋める予定だ…、問題が無ければだがな…。こいつがな」

「そうかの。なら、今回は一緒に歳をとっていくとするかの」

「フツ…」

さて、懐かしみの再会の挨拶もこれくらいでいいだろう。

この30年間で起きたハルキゲニアの変化を聞かなくてはならない。

「それで聞きたいことがあるんだが…」

「ふむ…、本題といったところかの。それで、何が聞きたいんじや？」

一つ目は、トリステインの内状についてだ。

30年も経てば、流石に王が変わっている可能性がある。

「フィリップ三世はご健勝か？」

「実はの…フィリップ三世は崩御されたんじゃ。今は孫に当たるアンリエッタ王女が国の政務をしとる形になっておる」

「マリアンヌとその夫はどうした…」

「前国王…マリアンヌ太后のじゃが…。数年前に崩御された際に喪に服しておつての」

「マリアンヌの馬鹿は一体何を考えているんだ…、それでその王女はちゃんと王女を出来ているのか？」

問題はそこだ。

あの時出会ったマリアンヌはまだ十代半ばの生意気なガキだった。それから、30年…つまりはアンリエッタという王女もまだ少女だろう。

「アンリエッタ王女はまだ17歳の若さでの…、とても政務には…。そのせいで街の人間にはこんな小唄まで流行っておる始末じゃ」

「小唄？」

トリステインの王家には美貌はあっても脳が無い。  
脳があるのは枢機卿。

灰色帽子の鳥の骨

「何ともまあ…、情けない話だな。それにしても鳥の骨というの

は？」

「マザリーニという宰相で、先王崩御以来の政務の多くを担っている人物じゃ。元はロマニアの枢機卿での、そのため周囲からは枢機卿と呼ばれておる」

「ほお…、あのマザリーニがな」

「知っておるのか？」

30年前に会った事がある。

あの時の少年の目を今でも覚えている。

いい目をしていると思っただが、ロマリアの枢機卿にまでなり、更にはトリステインの宰相にまでなっているとはな…。

「いやはや…、30年という歳月の重みを改めて実感するよ。それで、サンドリオンとカーリヌは元気にしているか？ あれ程の才能だ…、随分と素晴らしいメイジになっているだろうさ」

「サンドリオ殿は…」

そうか…。

これも30年の重みというやつか。

「しかし、お主を呼び出したミス・ヴァリエールの母上はカーリヌ殿じゃ」

「やはりな…。顔つき、髪の色、体型、プライドが高く負けず嫌いで臆病な性格とカーリヌにそっくりだ…というか、似すぎだろ」

良いところから悪いところまで似ている。

というか、悪いところばかり似ている気がする。

…クローンか？

しかし、カリィヌとヴァリエールが結婚したか…。

あいつ絶対に尻に敷かれてるな。

ルイズとカリィヌの余りにも酷似した容姿、性格に内心驚きを感じているところにドアがノックされる音が鳴った。

「オールド・オスマン…、ミス・ヴァリエールとアーチャー殿、ラ  
ンサー殿をお連れしました」

「ほ？ 僕は呼んどらんぞ？」

「いや、俺が使い魔の儀式が終わったら連れてくるように頼んだん  
だ…。調整関係でな」

「…相分かった。 ミスタ・コルベール…」

「分かりました…。 失礼しました」

コルベール殿はオスマンの目を見て、退室した。

やはり、あの男も優秀な人間だな。

「エミヤ、クー…契約のほうはどうだった？」

「それがよお…、嬢ちゃんの手に令呪が刻まれたのは良かったんだ  
が…」

「私たちの手にも何か刻まれたんだが。 …これはルーンか？」

正解だ…。  
ブリミルの馬鹿が残した一つの呪いだな…。

「ルイズで良かったな？」

「そうよ…ってどうか、あなたの名前はなんていうのよ」

「っと、失礼した」

元は今まで座っていた椅子から立ち上がり、一つの礼をして自己紹介をする。



それにしても、俺としたことが…。  
人として関わりをもつための一番大切なモノを忘れるとはな、こいつがさ。

「俺の名前は神堂元…。ハルキゲニア流に言つと、ハジメ・シンドウという。君の母と父とは、昔それなりに付き合いがあった」

「お父様とお母様に…?」

「ああ…、君は母親似だな。目元、体型、性格…その他諸々、あいつの生き写しだ」

「そんなに似てるの?」

気持ち悪いくらい似ているよ。

「それで、君には他に聞きたいことがあるのではないか?」

元の言葉に、ハツとした顔をして俺に両手の甲を見せてくる。しかし、身長差が40センチ以上あるルイズと俺では明らかに高さが足りない。

つま先立ちで、こちらに精一杯主張する少女の姿が可愛いと思ってしまったのは仕方のないことだろう。

彼女の後ろでは声を殺して笑いをこらえているエミヤとクーが見える。

…笑ってやるなよ。

「これは何のよ…!」

「これは令呪といってな、エミヤとクーを縛り付ける為に必要なものなんだ」

「令呪？」

「令呪のお…。 なら、彼らはセイバー殿と同じなのかな？」

「うん？ 貴方はセイバーを知っているのかな？」

「っていつか…誰だよ？」

「それは失礼したの。 俺はこのトリステイン魔法学院で学園長を勤めておるオスマンじゃ。 お会いできて光栄の極みじゃ…英霊殿」

「英霊…？」

エミヤとクーは俺の顔を見ってくる。

恐らくは、何故アルトリアを知っているのか、何故英霊と知っているのかという所だろう。

「どういう事だ…元？」

「かつて、俺がこの世界に来たことがあるとは言ったな？ その時、アルトリアも一緒にいた…つまりはそういうことだ」

魔法が一般となっている、更には異世界だ。

そんな状況で、よっぽどの事でなければ神秘の隠匿など必要もないだろう。

「ちょっと、勝手に話を進めないでよー！」

「失礼した。　だが、今ちゃんと教えてやる」

そう言つて、俺は念力で椅子を三つ動かして彼女達の前に動かす。

「今の念力？　でも、杖を使わないで…」

この世界の魔法使いは魔法の行使の媒体として杖を使っている。

そのサイズは等身大のものから、10 سانت程度のもので多岐にわたる。

そして、この世界において杖なしの魔法の行使とはある意味を持っている。

「まあ、座れ。　少し話が長くなる」

ルイズはオスマンの顔を見る。

その顔は少し不安そうではあるが、オスマンは優しい笑顔でルイズに座るように促した。

ルイズは渋々、椅子に座る。

「さて、何から話そうか…。　まずは俺たちについて話そうか」

「まず、最初に俺達はこの世界の人間ではない。　　というか、人間ですらない」

それを聞いて、ルイズは「何言ってるんだこいつ」といった顔をして俺を見る。

その目は痛い人を見る目だった。

おい、ちよつと待て。

何でオスマンまでそんな目をするんだ。

「ノリじゃよ」

死ねばいいのに。

「ミス・ヴァリエール…、彼の言っていることは本当じゃよ。　　儂は現に30年前に彼に会っておる」

「さ、30年前!？　　嘘、だって、こいつ…こんなに…」

「若く見えるか？　　だとしたら、君の目は正常だ。　　俺の肉体年齢は現在26歳になっているからな…まあ、ここから歳をとっていく

わけだから30年後は56の爺だな」

「どづいうこと?」

「俺のことを説明するのは、結構面倒だからな。その機会はまたの今度にしておこう。今は君の手に刻まれた令呪について説明するとしよう」

俺のことを置いておかれたことに少し不満そうだが、今自分の身に起こった

ことが気になるのか、渋々ながら納得してくれた。

「そうよ、その令呪ってのはなんなのよ?」

「令呪は俺の世界で行われた魔術儀式のシステムの一部で英霊を使い魔として縛り付けるために必要なものだ」

「魔術儀式? 英霊?」

その魔術儀式の名前は聖杯戦争。

あらゆる願いを叶えるという聖杯を手に入れる為に、聖杯に選ばれた七組の魔術師マスターと英霊サーヴァントがその技を競い合い、殺し合う。

そして、英霊。

生前偉大な功績を上げた英雄が死後に信仰の対象となったもので分類としては精霊に近い。

このハルキゲニアで言うならば、イーヴァルディがそれに当たるだろう。

「そして、君の使い魔となったクーとエミヤがその英霊だ」

「せ、精霊様なの!？」

それを聞いて、エミヤとクーは苦笑している。

「精霊と言っても、やっていることは殺し合いの道具に過ぎないな」

「それに本来の御三家の目的は聖杯そのものではない」

「どづいつこと?」

本来の目的は、サーヴァントとして召喚した英霊の魂が座に戻る際に生じる孔を固定してそこから外へ出る事なので、本当は殺し合いなどする必要は無いのだ。

ただ、その本来の目的を隠す必要がある、更にはマスターとなる魔術師を呼び出す餌として表向きの聖杯戦争があったのだ。

それを聞いて、ルイズは憤慨していた。

死んだ人の霊に殺し合わせてもう一度死なせた上、その霊を利用して自分の願いを叶えるなんて、誇り高いメイジのやることか。

気に入らなかった。

「まあ、それが聖杯戦争と英霊だ。次は令呪の説明だな。先も言った通り、英霊というのは一人の人間が御することなど不可能な存在だ。何故なら、かつての英雄そのものなのだからな」

「って、ことは…。 エミヤとクーって幽霊なの?」

「幽霊って…それは随分じゃねえか?」

「うむ…。先ほど元が言っていた通り、私たちはどちらかと言うと精霊に近い存在だ。そのような霊格の低い存在と一緒にしないで欲しい」

「フフ…。まあそういうことだ。簡単に言うと、高々人間ごときが精霊を御することなど不可能ということだ。それ故に、聖杯戦争の御三家の一角は令呪というシステムを作った」

「だから、令呪ってなんなのよ」

「マスター…。令呪とは絶対命令権をもってサーヴァントを従わせる事を可能とするものであり、マスターとしての証だ」

「本来の令呪であれば、それこそ魔法地味な命令も可能なんだが、現在は不可能だ」

理由はただ単にこの世界に聖杯がないためである。本来の令呪ならば、その三角ある印の一角一角に膨大な魔力があるのだが、今回はあくまで形だけを持ってきたのだ。最低限の使い魔として、命令をきく程度の…。それ故にある意味、令呪とは言えないのかもしれない。

「何となくは分かったわ」

「僕は全然わからん」

ルイズは優秀のようだ。

しかし、オスマンよ…。貴様には30年前も同じことを言っているはずだが？

あれか、痴呆でも始まったか？

「それでだ…、本来彼等英霊は霊体なのだが、ここでは受肉しているため君の負担になりはしない」

「どういこと？」

「私たち英霊は本来、その存在を維持するためにマスターの魔力が必要となる。しかし、今回はどういう訳か（元のせいで）受肉しているため、君にかかる負担はゼロだと思ってくれて構わない」

「ラッキーだな嬢ちゃん。俺たちが受肉してなかったら、契約した途端パタツと死んでも可笑しくないんだぜ？」

それを聞いて、私は血の気が引いたのが解った。でも、考えてみたらソレは当たり前のことだろう。仮りに、この二人は精霊様なのだ。

そんな二人を私だけの魔力で維持なんか出来ない。

「まあ、そんな訳だ。魔法の行使も気にする必要はない、安心して」

それを聞いて、一瞬安心したが、心えぐられた。

このハジメという男には悪意は全くないのだろう。

というか、異世界から来たと言っている男が私がゼロと呼ばれていることを知っているはずがない。

「……」

「…？」



一体どうしたというのだ？

俺の疑問の原因を知っているのか、オスマンはその答えを知っているのか、悲しそうな顔をしている。

「そういえばよ、なんで俺たちにも令呪みてえのが刻まれてるんだ？」

そんな俺の心中をよそに、クーは左手に刻まれているルーンをポリポリと搔いている。

だが、その疑問はエミヤも同じのようであらうで左手のルーンを気にしているようだ。

「それは使い魔のルーンじゃよ」

「使い魔のルーンとは？」

「サモン・サーヴァントで呼び出された使い魔に刻まれるものだ。そのルーンによって、使い魔に特殊能力が与えられることもある」

「特殊能力…？」

「例えば、猫や鳥が喋るとか…そういうことだ。　そういえば、お前らの腕にはどんなルーンが刻まれたんだ？」

「それがよ、気に食わねえことに…いっと同じなんだ」

「それは私も同感だ」

そんな彼等のやり取りに苦笑してしまう。

仲が良いのか、悪いのか…。  
そんな中、二人にルーンを見せてもらった。

「…!?!?」

「どうしたのよ?」

このルーンは…。

顔を強ばらした俺に、疑問の言葉を投げかけるルイズの顔を見る。  
まさか…、この少女は…。

「本当にどうしたのよ」

だが、ならば彼女は俺とも契約を結べるかもしれん。

「いや、何でもない…。あまり見たことのない形だったのでな」

「ふん…」

先とは一転して、俺の疑問がどうでもいいように鼻をならした。  
もし、彼女が本当にアイツと同じならば、ガリアやロマリア、アル  
ビオンにも…。  
なるほど、調整者が呼ばれるに相応しいといったところか。

「さて、シンドウよ…話は終わったかの?」

「…っ」と

だが、まだ確証はない。

俺の思い違いの可能性もある。

今は下手に話す必要はないか…。

「ああ、俺の方は大丈夫だ。ルイズはもう聞きたいことは無いかな？」

「うん…。何となく引つかかるけど、取り敢えず今は大丈夫よ」

「もし、気になることがあればその時は聞いてくれ」

「分かったわ」

かなりデカイ疑問が残ったが、今は保留しかないが、いずれ遠くない先に解るだろう。

「エミヤ殿とクー殿は大丈夫かの？」

「私は問題ない」

「ああ俺もだ」

「なら、次は部屋の話でもするかの」

部屋の話？

「どういうことですか？ オールド・オスマン」

「実は今、部屋の空きがないんじゃない？」

「「「「はっ？」「」「」

「じゃから、暫くはミス・ヴァリエールの部屋で暮らして欲しいんじゃない。直ぐに部屋を調達する…、じゃから、少しの間我慢して欲しいんじゃない」

「…仕方ないわよね」

「まあ、仕方ねえな」

「ふむ…年頃の少女の部屋に押しかける形になるのは心もとないのだが」

「オスマン…、学院で働いている人間も空いてないのか？」

「いや、そこは空いてるんじゃないが…。そこも一部屋しか空いてないんじゃない。それも、余り広い部屋じゃないんじゃないよ」

「なら、俺はそこで構わない。エミヤとクーは使い魔なのだから、マスターから離れる訳にもいかんだろうさ」

「じゃが…「オスマン」なんじゃ？」

貴様は一つ忘れてるぞ。

「俺が平民とか貴族とかを気にするような人間だったか？」

「…！ そっじゃったの。なら、お願いできるかの？」

ハジメは気にするなど、言って椅子から立ち上がった。

つまりは、そこで話は終了ということだ。

それを見て、エミヤとクーも椅子から立ち上がり、ドアに向かった。

ルイズは慌てて、椅子から立ち上がり、オスマンに一礼して同じくドアに向かった。

「それではな、失礼した」

「またの…」

元達は背にその言葉を聞きながら、部屋を出た。

ルイズはというと、最後まで彼等に振り回される形であった。

一人学園長室に残されたオスマンは眉間にシワを寄せ、小さく呟いた。

「調整者…。 また、ひと悶着ありそうなのだ…」

小さく軋みを上げていた運命の歯車が今噛み合い、回り始めた。

### 第3話 朝の一幕…涙

学園長室を後にした後、ルイズ達は教室に向かい、俺は自分の部屋を確保する為の行動にでた。

「…さて、ルイズが授業をしている間にやっておくか」

ここトリスティン魔法学院で働いている人間は教師を除けば、殆ど全員平民である。

その理由は簡単である。

この世界では平民は貴族に仕えるべき存在としてのみ存在していると言ってもいい扱いを受けている。

領主である貴族は領民である平民から税を搾取し、彼らをモノのように扱う。

非合法ではあるが、奴隷館なども存在し、一部の貴族はそれを商業の一部としているくらいである。

例えば、道を歩いていたら拐われる…なんてことも極論ではあるが現実として起こっている。

そして、平民はそれをした貴族に逆らってはいけない…逆らえないのだ。

逆らったら最期であるからだ。

反吐が出る…。

ここで働いているメイド長の人間を探しているのだが、如何せん顔が解らない。

先ほどから視界にはいる平民の人たちに、その人物の居場所まで案内してもらえれば良いのだが、彼女達は働いているのだ。

無闇に声をかけるのは申し訳ない。

「もし…貴族様？」

歩いていると、一人の少女に声をかけられた。

フラフラと歩いていた性で不審者に思われたのかと思ったが、そうではないらしい。

貴族と呼ばれたため、俺が何か困っているのかと思ったのだろう。

「君は…、ここで働いている者だね？」

「はい。メイドをさせてもらってますシエスタといいます。貴族様にお声をおかけするのは失礼かと思いましたが、何やらお困りのようでしたので…」

「そうか、俺はハジメ・シンドウという」

どうやら、彼女は俺のことを貴族だと思っているのだろう。

勿論、制服を着ていないし、そんな年齢でもないため来訪者の一人だと思ったのか、彼女は必要以上の敬語を使ってきた。

「すまないが、私は貴族ではないんだ」

「そうなんですか？ …もしかして、ミズ・ヴァリエールの使い魔様であられますか？」

「必要以上の敬語は必要ないよ…。それにしても、もう噂が広がってるのか？」

「いえ、まだそれ程広まっている訳ではありませんが、貴族の方々が噂をしているのを耳にしまして…」

ふむ…、当日でこの有様か。

この分だと、明日には学園中に広まっているな。

「そうか…、それで間違いはない。間違いなく俺は彼女に召喚された者だ」

使い魔ではないがな…。

だが、もし彼女がアイツと同じ系統ならば、契約可能かもしれんな。

「そうですね、それは大変でしたね」

シエスタという少女は手を口に当てて、小さく微笑んだ。

その姿は正に美少女に相応しいものだった。

彼女の容姿はルイズのような…所謂可憐なものではないが、日本人の女性のような大和撫子のような美しさをもっていた。

髪は黒髪のやや長めのポブカット、肌は日本人のような肌色に黒色の瞳である。

「実は、少し困っているんだ」

「どうなさったんですか？」

「ルイズに召喚されたはいいんだが…、如何せん一部屋に4人が住めるほどの広さはない。それ故に、俺は君たちが使っている部屋の空きで暫く過ごすことになったんだが…。そこの責任者を探してるんだ、今どこにいるか分かるか？」



俺の言葉に彼女は少し驚いているようだ。  
ソレは俺が平民の部屋に住むこともそうだが、ルイズと呼び捨てにしていることも驚きの原因であろう。

もし、平民がそのような口を貴族に使おうものなら、その場で殺されても文句は言えないのだ。

「そうですか…。わかりました、私が今案内しますね」

「良いのか？ 仕事中だろう？ 場所さえ、教えて貰えば自分で行けるんだが…」

「丁度時間が空いたところなんです…。ですから大丈夫ですよ」

実に有難いことだ。

平民ゆえに貴族から受けている仕打ちを知っている。

だから、他人には優しくできることもある。

だが、恐らくこれは彼女が最初からもっているモノなのだろう…。

俺は彼女の申し出を有り難く受け、責任者の下に案内してもらおうことにした。

歩いている途中はなんてことのない他愛の無い話をしていた。

彼女の故郷の村の事、俺の故郷のことなど…。

話をしているうちに、妙齡の女性の下に案内された。

どうやら、彼女がメイド長なのだろう。

「初めまして、暫くお世話になります。 ハジメ・シンドウです」

俺は一礼して、自己紹介をする。

それを見て、メイド長と思われる女性は優しい笑顔で一礼してくれた。

そして、シエスタとは別れ、部屋に案内されたのだが、実に身分の格差を感じられる部屋であった。

まだ、生徒の部屋を見たことはないが、恐らくは此処などより遥かに豪華に造られているのだろう。

この部屋には、ベッドと小さな棚位しかない。

実に質素と言えるだろう。

だが、寝食をするには十分だ。

雨風を防いでくれれば、そこは楽園である。

「それでは私は仕事がありますので、ここで失礼します」

「いえ、わざわざ案内していただき有難うございます」

「何か困った事がありましたら、お気にせずお声をかけてください」

そう言っつて、彼女は一礼して仕事に戻っていった。

俺は部屋にあるベッドに腰を下ろし、外套を脱ぎ一息つくことにした。

創造でタバコを創り、魔術で火を付け口に運ぶ。

首の骨を鳴らし、ベッドに横たわる。

「ふう……」

さて、これからどうするか…。

まずは、ここトリストイン魔法学院を中心に活動することは決定だ。下手に動き回るよりは、情報が定期的に入って来る此処にいるほう

が良いだろう。

恐らくは彼女…ルイズがこの世界の中心となることは決定だろう。その理由は、エミヤとクーに刻まれたルーンと俺たちが彼女に召喚された事という事実である。

恐らく、あのルーンは“ガンダールヴ”だ。

あの馬鹿の使い魔だった彼女も同じルーンをしていたはずだ。

そして、俺が呼び出されたことを当てはめると他にも担い手が存在するはずだ。

「“虚無”か…」

ハッキリ言っつて、あれは反則だ。

俺たち魔術師にとつての魔法を全部集めたようなモノだ。

下手をすれば、“魔法”などよりずっとタチが悪い。

「もし、ルイズが虚無の担い手だとすれば…」

思考に耽っている中で、俺の記憶は途切れた。

「……寝てしまったか」

気が付けば、朝だった。

体を起こし、軽く体を伸ばし、部屋を出ることにした。

ドアを開ける際に噛み合わせが悪いのか、ドアが軋みを上げていた。ふと視線をずらすと、足元にはお盆に乗せられていたパンとシチューが乗せられていた。

シチューの冷め具合を見るに、恐らくは夜飯として用意してくれたんだろう。

だが、俺が寝てしまっていたためメイドがドアの前に置いといてくれた…。

そんな事だろう。

冷めているとは言え、折角用意してくれたものだ。

夜飯を食べないで眠ってしまったせいか、小腹が空いている。

お盆を持って、部屋に戻りパンとシチューに口をつける。

「…パンはあれだが、シチューは美味しいな」

冷めても美味しかった。

余程腕の良いコックがいるのだろう。

それを思うと、温かい状態のシチューはどれ程美味しいのか気になっ

た。  
少し、自己嫌悪だ…。

朝食と言っているのか解らないが、朝食を済ませお盆を返しに厨房に向かうことにした。

だが、朝の日差しを浴びるために一度外に出ることにした。

恐らくはまだ早朝なのだろうが、メイドの人たちは忙しそうに働いている。

彼女たちに労働基準法を説いてみようか。

などと下らないことを考えながら歩いていると、昨日出会ったシエスタが洗濯をしていた。

昨日のお礼と朝の挨拶をするため、彼女に声をかけた。

「シエスタ、おはよう」

「え…あ、おはようございます。 ゆっくり眠れましたか？」

「ああ、もしかしてコレは君が持ってきてくれたのか？」

「はい。 お眠りになられてたみたいだったので、部屋の前に置いておいたんですが…」

「有難う…。 美味しかったよ」

「ふふふ…、それはマルトーさんに言われたほうが喜びますよ」

「マルトー…これを作ったコックか？」

「はい。貴族の方々に出す料理のまかないですが」

お盆と食器を返すついでに、お礼を言った方がよさそうだな…。

「…で、お前たちは何をしてるんだ？」

視線を下にずらすとそこでは英霊二人が、洗濯をしていた。  
英霊が洗濯って…。

「嬢ちゃんが洗っとけてよ…」

「そうか…。まあ、エミヤは良いとして「どういう意味だ！」うん？ 貴様は家政婦だろう？」

「バトラーと呼べ」

そのこだわりは未だにあるのか…。

だが、クーは兎も角エミヤは似合いすぎではないか？  
やはり、家政婦だろうと思ってしまうたのは内緒である。

「まあ良い…。俺はこれから、コイツを返しに厨房に行くがお前たちはこの後、どうするんだ？」

「私たちはこの後、マスターを起こしてからだが…」

「忘れていたかもしれんが、お前らは今肉体があるんだぞ？ 飯はどうするんだ？」

「「あ…」」

「どうやら、忘れていたらしい。」

「シエスタは俺が何を言っているのか解らないようので、首を傾げている。」

「ふむ、可愛らしいじゃないか…。」

「ルイズがその辺に気が回るとは思わんし、オスマンも恐らく忘れてるだろう…、ついでに厨房で交渉してくる」

「すまねえな」

「私たちも礼も後で行く」

「了解した…。それじゃあ、こいつ等をよろしく頼む。また後でなシエスタ」

「あ、はい」

シエスタに声をかけ、俺は厨房に向かった。

厨房では料理人の方々が忙しなく動き回っている。  
どこかの誰かが、厨房は戦場だ…みたいなことを言っていた気がしたが、納得だ。

「スイマセン」

厨房にいる人に声をかけると、立派な帽子をかぶった中年の男性が近づいてきた。

その帽子を見るに、彼がコック長だと思われる。

昨日のことと、自分のことを簡単に説明すると、最初の畏まった態度が一転して気さくに話しかけてくれた。

「昨晩はわざわざ自分の分の料理まで用意していただき、有難うございました」

「良いつてことよ」

「とても美味しかったです」

「それは何よりだ」

「それでなんです…」



「どうしたんだ？」

「忙しい中、申し訳ないんですが自分の分ともう2人分の朝食も用意していただけませんか？」

「それまたどうして？」

俺の他にも召喚された人間が2人いることをマルトー氏に説明した。それを聞いたマルトー氏の反応を見るに、やはり聞かされてなかったようだ。

言っておいて、正解だな。

「それは構わねえよ」

「有難うございます。後でその2人と再びお礼に参りますので」

「気にすんな。同じ平民同士、仲良くしようじゃねえか」

気持ちの良いくらいに豪快に笑って承諾してくれた。

昨日のメイド長といい、マルトー氏といい、シエスタといい…いい人たちが集まっているな。

そこはオスマンが平民と貴族を区別するような人間ではなかったためである。

「有難うございます。それではまた後ほど…」

そうして、俺は厨房を後にしてルイズの部屋に向かった。

場所は偶々歩いていた女性の教員と思われる人に道を聞いた。

昨日の出来事を知っていたようで、俺の姿を見るや納得してくれたみたいだ。

とても、この近くで見るとような服装では無いからな。

教えて貰ったルイズの部屋に向かうため、女子寮に入らなくてはいけないのだが、少し緊張する。

道行く、女生徒に怪訝な目で見られながら、ルイズの部屋に向かって歩いている。

歩いていると、部屋の前にクーとエミヤが立っていた。

「何をしてるんだ？」

「ああ…、元か。今中でマスターが着替えてるんだよ」

「それは、アレだな…」

「まあな…。そういや、朝飯の件はどうなった？」

「問題ないそうだが…。だが、やはり聞かされてなかったようではあつたがな」

それを聞いて、エミヤとクーは深くため息を漏らした。使い魔の食事を用意するのも主の勤めなんだがな…。

「それは後で礼を言いに行かなくてはな」

「そうしとけ…。俺も後で行くつもりだからな」

そんなことを話していると隣から一人の生徒が出てきた。

「あら？ あなた達はルイズに召喚された人達ね？」

褐色の肌の彼女はルイズなどとは比べ物にならない程の女だった。どういう意味かって？ そのまんまの意味だ。

「失礼、君は？ 俺の名前はハジメ・シンドウという」

「私はエミヤ……。ルイズに召喚された者だ」

「同じく、俺はクー・フリーンってんだ。宜しく頼むぜ姉ちゃん」

「私は「待たせたわね……ってゲツ！」おはようルイズ。それにしても朝の挨拶がゲツはひどくない？」

「そつだぞマスター。朝の挨拶は一日を始めるのに重要なモノだ。それに……」

ルイズのゲツにエミヤは母親のように朝の挨拶の大切さを説いていく。

それを聞いてルイズは辟易している。

確かに朝一番にエミヤの皮肉たっぷり説教は堪えるだろう。だが、褐色の肌の女生徒はその光景を見て微笑んでいる。

「そこまでしておけエミヤ」

「ぬ……しかし」

「ルイズを見る」

そう言って、俺はルイズの小さな頭を体の前に引っ張りだす。

その顔は何とも言えない渋いものだった。  
それを見て、エミヤは言い詰まったような顔をした。

「それで、君はルイズの友人で良いんだな？」

「そうね「そんな訳ないじゃない！」あらあら……」

どうやら、意見の食い違いがあるようだ。

彼女の足元では使い魔のサラマンダーが下をチュルチュルと出しながら、その光景を見ている。

「どうということだ？」

ルイズは拳を握り締め、ズカズカと一人で食堂に歩いていった。

どうでも良いが、ルイズよ……。

女性ががに股で歩くのはどうかと思うぞ？

「行ってしまったか……」

「はあ……」

彼女はルイズの後ろ姿を見つめながら、深くため息を吐いた。

全くもって、同感だ。

俺たちも同じく、深いため息が出ってしまった。

「まあ、ルイズのことは置いていて、自己紹介の続きとはいかがか」

「そうね。私の名前はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォ

ン・アンハルツ・ツエルプストーよ。呼ぶときはキュルケでいい

わ。よろしくね騎士様方」

どうやら、彼女は昨日の広場にいたようだ。  
ということは、彼女もルイズと同じ学年ということか…。  
流石に同じ歳ということはないだろうが…。

「よろしく頼むぜ、キュルケ…。それにしても、うちのマスターと違って随分と女っぽいんだな」

「…ランサー。それはマスターの前では言うなよ。マスターも気にしてるらしく、昨日も一人で静かに豊胸マッサージをしてたくらいだ」

「……」「……」「……」

その姿を4人で思い浮かべてしまった。  
思わず、涙が出てしまった。

「そうね…。言わないほうがいいわね」

「だな……」

「豊胸マッサージなど、意味が無いというのにな……」

「あら、そうなの?」

実はそうなのだ。

よく揉めば大きくなると言われているが、実際は逆効果なのだ。

「胸は脂肪だから…。むしろ揉むという行為は脂肪を燃焼する運動になり、逆に小さくなる可能性がある。そして、胸の形を維

持する筋肉も切れて将来、胸の形が崩れる危険性もある。上がるのは感度だけだ」

「……」

全員が黙った。

どうしたというのだろうか？

「オメエ…、何でそんな詳しいんだ？」

「（コクコク）」

どうやら、そういうことらしい。

つまりは、男がそんなことを知っているのは気持ちが悪いのだろう。だが、理由がある。

「キュルケは知らないと思うが、俺の知り合いに胸を気にする女性が2人いてな。その2人も必死にマツサージを隠れてしてたんだが、まるつきり効果が無かったんだ」

「元…、その2人というのはまさか…」

エミヤの思っているとおり、凜とアルトリアだ。

凜は桜の胸に嫉妬し、アルトリアはメドゥーサの胸に嫉妬していた。しかし、凜の想いは解る。

だが、アルトリアよ…お前は英霊なのだから、幾ら頑張ろうと減りも増えもしないのだぞ。

俺がその光景を目にしたときは、一人隠れて涙を流したものだ。

「まあ、そんな訳で多少は胸を大きくする方法を知っている訳だ」

「その方法をルイズに教えてあげたら？」

「考えておこう…」。

「というか、教えてあげよう。」

「しかし、カリィヌの娘だしな…」。

「まあいいや。取り敢えず、食堂にいかねえか？ 流石に腹が減ってきた」

「っと、そうだな」

「マスターもお冠だろう…」

「そうね、せつかくの料理が冷えたら勿体無いしね」

「全くだ…」

そうして、涙を少し流すというある意味衝撃的な朝を迎えた俺達は食堂に向かった。

だが、やはりルイズも女性だということなのだな。

「それはもういい」

「エミヤに突っ込みを受けてしまった。」

「憂鬱だ…」。





### 第3話 朝の一幕…涙（後書き）

いい感じに元が俗世にまみれてますかね？

でも、少し軟派にしてしまった気がする…。  
反省はしないがな！

## 第4話 ゼロとルイズ

食堂についた。

トリステイン魔法学院の食堂は、学院の敷地内で一番背の高い本塔にある。

食堂の中は、やたらと長いテーブルが三つ並んでおり、一つには軽く百人は座れるだろう。

今年で二年生になったルイズたちのテーブルは、真ん中である。

食堂の正面に向かって左隣のテーブルに並んだ、メイジたちは皆紫色のマントを、そして反対の右隣のテーブルのメイジたちは茶色のマントを身につけている。

マントの色で学年を分けており、識別できるのだ。

エミヤとクローは食堂の広さに驚いている。

それもそうだろう…、この食堂では学院の生徒が一同に会し食事を  
する場所なのだ。

それにしても、無駄に広い。

「学院が教えるのは、魔法だけじゃないのよ」

そついう人は、ルイズの隣人であるキュルケである。

聞けば、ルイズより二つ年上であるとのことだが、それにしても…。  
ルイズが可哀想に見えてくる。

「メイジはほぼ全員が貴族なの。“貴族は魔法をもってしてその精神となす”をモットーに貴族たるべき教育を、存分に受けるのよ。

だから食堂も、貴族の食卓にふさわしいものでなければならぬよ」

そういう彼女はとて不機嫌そうな顔をしているルイズだ。その理由は俺達がキュルケと話をしているからだろう。何故、こんなにもルイズは彼女を嫌うのか？

とはいえ、見当は付いている。

全く、家の問題を子供たちに押しつけないで欲しい。

「マスター」

「何？」

「私たちの食事は？」

「あつ…」

「やはり、忘れてたか…」

どうやら、エミヤがルイズを弄っている。

全く、彼女が忘れていたのはとうに知っているだろうに…。

「な何よ、もも勿論忘れてるわけじゃない」

「ふむ…、では私たちはどうすればいいのだろうか…マスター？」

「ククククク…」

ルイズは慌てすぎて、もはや口調が噛み噛みである。

そんな所まで、カーリー又に似なくてもいいだろうに…。

だが、相対してエミヤはルイズを弄るのにとても楽しそうな顔をしている。

凜の代わりでも見つけたか？

クーよ…必死に笑いをこらえようとしているみたいだが、声が漏れてるぞ。

「そこまでしておけ、エミヤ。あまり、ルイズを苛めてやるな」

「クツ」

「ハア―ハツハハ―！」

「な、何よ…！」

「ルイズ、俺達は厨房に頼んで料理を用意してもらっている」

それを聞いて、ルイズはようやく自分が弄られていたことに気づいたのか、顔を赤くしてプルプルと震え出した。

あー…、あれはまずい。

あれはカーリーヌが切れ出す直前の合図と同じだ。

エミヤも気づいたのだろう。

恐らくは、あいつも凜を弄りすぎて同じものを見たのだろう。

ルイズの周りにいた生徒たちも冷や汗を流しながら、少しずつ後ろを去りしていく。

しかし、クーだけはそれに気づかず未だに馬鹿笑いをしている。

あゝ…死んだな。

「ヒィーヒツヒヒ…、あゝ腹が「こ…」…ってあれ？」

「こっこ、この、バカ犬ううう…！」

「ぎゃあああああ!!」

巨大な爆発が食堂の一部分のみを襲った。

負傷者0名。

死亡者1名。

という、形で惨劇は終わった。

「いや、死んでねえから!」

「このバカ犬うう!!」

「犬って言うな! ってぎゃあああ!!」

さて、食事も終わり俺達は今、ルイズと共に教室に向かっているわけだが。

勿論、厨房のコックの方々にはお礼を言った。

それにしてもエミヤがとても褒めていた。

曰く、雑に作られてはいるが、それでも食べるものへの心遣いが感じられたらしい。

料理のことはそれ程詳しくはないが、それには同感だ。

「クー、まだ痛むか？」

「まったく、あの嬢ちゃんの魔法はどうかしてるぜ。俺の対魔力がきかねえってどういうことだよ」

「ふむ…、それは私も気になっていた。オド、マナに限らず魔術ならば私たちサーヴァントの対魔力ならば大抵の魔術は無効化されるはずなのだが…」

やはり、彼女は担い手か…。

確定するのは、早いかもしれんが…。

いや、でなければエミヤ達にあのルーンが現れることもないし、サーヴァントの対魔力を無効化出来るはずもない。

だが、今は置いておこう…。

教室に入ると教室にいた生徒達は私たちを見る途端にざわめきだした。

ルイズの話によると私はずいぶん噂になっているらしいのだ。

使い魔が人間というのもあるが、俺が思うに先程の爆発事件もその要因であろう。

教室を見渡すとキュルケがいた。  
魅力的な容姿をもつ彼女のことだ。  
それなりに遊んでいるのだろう…、彼女の周りは男子が取り囲んで  
いる。

「それにしても、幻想種が随分といやがる」

クーの言うとおり、この教室には普通の世界では見ることができな  
いような生物が大量にいる。

その全てがメイジの使い魔なわけだ。

キュルケのサラマンダーもそうなのだが、この世界は幻想種に対し  
ての扱いがあまりにも軽い。

それも異世界故なのだが、エミヤは未だに渋い顔をしている。

俺たちの世界では、存在を確認できただけでも大騒ぎになるとい  
う代物があるわけだから、それも当然と言えば当然だ。

俺も調整をしていく上で、これ程までに幻想種の扱いが軽い世界と  
いうのを見たことはない。

最初、この世界に来たときは俺もかなり驚いた記憶がある。

ルイズは席に座り、俺達は教室の後ろに控える。

その光景はまるで、生徒たちを監視するソレに似ている。

大の大人が3人も子供たちに混じっているのだ。

その光景は実に滑稽だろう。

暫くすると、先生らしき婦人が現れた。

あの女性はルイズの部屋を教えてくれた人だった。

「しぎげんよう、皆さん。春の使い魔召喚は成功したようですね。

このシュヴルーズ、春の新学期に皆さんの使い魔を見るのが楽しみなんですよ」

彼女はシュヴールズ女史というらしい。

視線が合ったため、今朝の件も合わせて軽く会釈した。

すると、向こうも会釈で返してくれた。

それには、驚いた。

無視されると思ったからだ。

メイジの大半が平民を見下す傾向にあるというのに、彼女はそこまで酷くは無かった。

これもオスマンの人柄故かな…。

「ミセス・ヴァリエールは随分と珍しい使い魔を召喚したようですね」

彼女に嫌味は無いのだろうか…、

「ゼロのルイズ、召喚できなかったからって平民連れてきちゃダメだろ…！」

「違うわ！ちゃんと召喚したのにコイツ等が来ちゃっただけよ！」

「嘘つくな。“サモン・サーヴァント”ができなくて、その平民に来てもらったただけだろう？」

ほら見たことか…。

馬鹿なガキというのは、常に自分より弱い存在を探している。

この世界においては、平民とルイズが当たるのだろう。



周りの生徒たちの間では、大きなお笑いが起きている。  
キュルケは子供を見るような目で周りの男子たちを見ている。  
その隣の水色髪のショートヘアの少女は静かに本を呼んでいる。  
まるで、我関せずである。

エミヤはやれやれと言った感じで呆れており、クーは自分のマスタ  
ーを侮辱されたことで、かなり苛立っているようだ。

俺が視線で抑えるように訴えかけ形でようやく収まっていると言っ  
た感じである。

「ミセス・シュヴルーズ！ かぜっぴきのマリコルヌが私を侮辱し  
ました！」

「かぜっぴきだと！ 僕は風上のマリコルヌだ！」

「アンタのそのガラガラ声は風邪でも引いてるみたいなのよ！」

なるほど…、確かにこの豚の声は風邪でも引いているように見事な  
ガラガラ声だ。

風上よりもかぜっぴきの方がピッタリだろう。

ルイズはネーミングセンスがいいようだ。

つい笑ってしまふ。

それを聞いて、エミヤとクーも笑っているようだ。

すると、それに気づいた豚少年がこちらを睨んだ。

「おい、平民！！ お前今笑っただろ！ 平民の分際でよくも僕を  
笑っただな！」

その声で今まで笑っていた生徒たちは一気に静まり返った。  
やれやれ…。

「ルイズよ、君のネーミングセンスは最高だな…。よく相手の特徴を捉えてある」

「そ、そう?」

「全くだ、俺じゃあその渾名はでねえ」

「フツ…、俺なら豚足と渾名を付けてしまいそうだが…。安易に見た目からではなく、声を取り上げる辺りのセンスの良さに脱帽だ」  
ルイズは自分のネーミングセンスを褒められて、嬉しそうにデヘデヘ笑いをしている。

…女の子として、その笑い方はどうかと思うぞ。

そんな思いとは別に、俺達は豚少年の言葉を無視して罵倒を続ける。

「おい！無視するな！！」

「はあ…、全くなんだというのだ？ かぜっぴき君?」

「風上だ！」

「いや、君にその二つ名は合わない。かぜっぴきの方が似合うのではないかね?」

「全くだ。それでどうした、かぜっぴき? 俺達はお前と話なんかしたくはねえんだが」

あくまで俺たちがすることは相手を馬鹿にすることだけ。  
ルイズをバカにした相手だ…、というか典型的なダメな貴族相手に

遠慮など要らないだろう？

とは言え、先ほど褒められたルイズはほうけている。

ここまで、貴族が馬鹿にされているのを見たことが無いからだろう。

「かぜつぴき、かぜつぴきと…お前たち、貴族をバカにしてるだろ！ 平民がそんな態度とつていいと思ってるのか！？」

「ふむ…そもそも私たちは君などのことを貴族と認めた訳ではないのだが…」

「いやいや、エミヤよ。いくらこの少年が人間よりも豚に近いからと言って、それは無いだろう。仮にも立派な貴族様なんだからな」

「そうだ…つて、誰が豚だ！」

「あん？ そんなのテメエに決まってるだろ？ 分かりきったことを耳が腐るような声で聞くな…」

「ちよ、ちよつと…」

「き、貴様ら…！」

ルイズがアタフタしながら、こちらを諫めるようにしているが、そんな事では止まらんぞ？

「フツ…。まあ俺も初めて、コイツ等のような貴族を目にした瞬間、我が目を疑ったんだがな」

「確かにな…。俺の知っている貴族は相手の立場を貶め、あざ笑

うような奴はいなかったな…。そんなのはあの金ぴか野郎で十分だ」

「ランサーよ、君が言うと言説力があるな」

「全くだな…。中には貴族らしい人間もいるようだが、この教室の大半が貴様と似たような人間だとはな…。時が経とうと変わらん」

俺は一部のマトモな生徒達を見ながら、吐き捨てるように言葉を投げかけた。

それを聞いて、大半の生徒は俺たちの発言に憤っているようだ。中には自分のした行動を恥じている者もいるようだ。

まだ、救いようがあるな…。

ルイズはというと、まるで終わったというような顔をしている。それはキュルケも同じだ。

だが、その隣に座っている少女は先ほどから本のページをめくる以外の動作をしていない。

ここまでマイペースだと、感心しかできない。

「き、貴様等！　そこまで言うのなら…！」

「おやめなさい…！」

豚がなにか言おうとしたが、シユヴルーズ女史がそれを止める。

豚はまだ何か言いたそうにしていたが、黙って席に着いた。

しかし、ルイズは未だに体が固まったように椅子に座っている…というか動いていない。

よほど、シヨックな光景だったのだろうか？

「ミスタ・マリコルヌ、確かに今のあなたは貴族らしくありません。彼が言ったことを反省しなさい」

豚はこちらを苛立ちと憎しみをこめた目で睨みつけたが、そよ風にすら劣る。

シユヴルーズはこちらに向き合い、謝罪の言葉を並べた。

「私の生徒が、失礼を致しました」

素直に謝られてはこちらも応じない訳にはいかない。

「私としてもマスターの侮辱を見過ごせなかったとは言え、こちらも大人気なかった」

「ミセス・シユヴルーズ…、授業を中断するようなマネをして申し訳なかった」

「まあ、俺はただムカついただけなんだけどな」

「「「「」」」」」

「フンッ！」

「ぎゃっ！ー！」

元は何処からか（創造で創った）取り出した小石をランサーの頭に向けて、投げつけた。

短い悲鳴を上げ、その場に倒れ込むランサーを他所に原因である元は話を続ける。

「身内の恥を晒すな…。失礼したミセス・シュヴルーズ、中断させた俺が言うのも何だが、授業を始めて欲しい」

それを聞いて、彼女は笑顔？で授業を始めた。

「では授業を始めます」

ようやく授業が始まる。

エミヤは魔術師上がりの英霊のため、異世界の神秘の象徴たる魔法というものがどのようなモノか知ることができるため、この授業は楽しみなようだ。

「私の二つ名は“赤土”…。赤土のシュヴルーズです。これから一年間、皆さんには“土”系統の講義をします。ミスタ・マリコルヌ、魔法の四大系統はご存知ですよね？」

「はい。ミセス・シュヴルーズ。“火”“水”“土”“風”です」

シュヴルーズは正解だと笑顔で頷く。

なるほど四つの系統か…。

ルイズのゼロという二つ名である“ゼロ”はどの系統から由来しているのだろうか。

エミヤは納得しながら、ルイズの系統について考えていた。

「そうですね、今は失われた“虚無”を合わせ五つの系統があることは皆さんも知っての通りです。身贖いではないのですが、私はこの四つの系統の中で土は最も重要な位置にあると考えています。

土系統の魔法は万物の組成を司り、この魔法のおかげで私たちは

重要な金属を作り出し、加工できているのです」

それは、俺も同感だ。

人力だけでは、どうにも出来ないことがある。

例えば、建築物だ。

巨大なものになれば成程、建物の完成に時間がかかる。

その短縮に土系統の魔法は役に立つ。

さらには巨大な岩盤をそのまま削りだし、家の形にすることもできる。

「もし、土の魔法がなければ大きな石から建物を作り出すこともできませんし、農作物の収穫も今よりもっと手間のかかる仕事になっていたでしょう。このように土系統の魔法のおかげで今の生活を送ることができているわけです」

その考えはミセスも同様のようである。

エミヤはというと、自分の世界との差に改めて驚きを感じていた。

ふむ…、成程。

この世界では科学の代わりに魔法が使われているのか…。

そのために魔法が一般化され、魔法使いがいなければ今のような生活を送ることが出来ないから、魔法使いの中に必要以上に威張る者が出てきてしまう訳か。

正にここがメイジの厄介なところである。

そもそも、メイジ…貴族が生活出来ているのは彼らが平民と呼んでいる人々からの税でいけるのだ。

勘違いしてはいけない、彼等がいなければ貴族は貴族では無くなるということ…。

「今から皆さんには土系統の基本である、錬金の魔法を覚えてもらいます。一年生のときに覚えてしまった人もいると思いますが、基本は大事ですので…」

魔術の基本が錬金だと？

エミヤは驚いていた…。

だが、直ぐに理解した…これは魔術ではなく魔法なのだ。

恐らくは、アトラス院の錬金術の研究は、別物なのだろう…。

そして、現代錬金術のことを言っているのだろう…。

そして、ソレは正解であった。

シヴルーズが教卓の上にある石に向かって魔法を唱えると、石ころは光りだしピカピカ光る金属に変わっていた。

あれは…真鍮か？

あの長さの呪文で石を真鍮に変えられるのか。

エミヤはエミヤで驚いていたが、クーもまた驚いていた。

「なんつう、デタラメな魔術だ…」

知らず嘆息に近い声を漏らしていた。

オドのみを用いて、あんな短い詠唱で物質変換を行うなど、彼らの世界ではありえなかった。

魔術の常識を逸脱している。

四系統というのは、思ったより厄介な魔術形式なのかもしれない。

「（仮にも魔法を名乗るくらいはあったってことか…）」



彼もまた生前、師の下で魔術を習っていた時期がある。彼が使えるのはルーン魔術位なので、それ程魔術を十全に理解しているというわけではないが、それでもこの世界の魔術に驚きを感じていた。

「ゴ、ゴールドですか？ ミセス・シュヴルーズ」

キュルケが言葉を詰まらせながら言う。

彼女の系統は、確か“火”だったかな…。

彼女の使い魔であるサラマンダーを見ながら、エミヤはそんなことを考える。

解析はできないみたいだな。

どうやら、この世界の魔術は解析が無いのだろうか？

私たちの世界の魔術の基本は物質の構造を理解するということが第一にくる。

自身の魔術回路の状態を確認する時がそうだ。

どうやら、魔力を使っているという点を除けば、先程の詠唱もそうだが、形態が大分変わるようだ。

「違いますよ、コレはただの真鍮です。ゴールドを錬金できるのは“スクウエア”クラスのメイジだけです。私はただの“トライアングル”ですから」

これまでの話を聞いていて疑問に思ったことがある。

「元…聞きたいことがあるのだが」

元はめんどくさそうに答える。

何故、俺に聞くんだらうか…。

ルイズに聞けば良いのになんて思ったが、ルイズを見ると未だに固まったままである。

……。

「なんだ？」

「いや、“スクウェア”や“トライアングル”という言葉がわからなくてな。教えてほしいんだが」

「それは系統を足した数のことだ。それでメイジとしてのレベルが決まるんだ。例えば土系統の魔法はそれ単体でも使えるが、そこに水系統の魔法を足せばさらに強力なモノになる…、更に火系統の魔法も使用可能となる。そして、四つ足したものが“スクウェア”、三つ足したものが“トライアングル”、二つ足したものを“ライン”、一つの系統のみを“ドット”という」

「ちょっと、待ってくれねえか」

気になっていたのは、クーの同じのようだ。

「例えば、火と火みてえに同じ系統を足すことは出来るのか？」

「もちろん可能だ。クーが言うように火と火の二つを持つメイジもラインメイジという。そして、同じ系統を複数を持っていればより強力な魔法の行使が可能となる」

「なるほどねえ…。じゃあ、あそこで講義をしている女はそれなりに強力な魔法使ってわけか」

「そういう事だな…」

俺たちが話をしていると、シュヴルーズに咎められた。

「授業中の私語はお控え願いますか？」

「っと、申し訳ありませんミス」

「聞くところ、貴方は随分と魔法の知識があるようですね？」

仮にも魔法使いだからな。

「それくらい豊富な知識をもつ使い魔を召喚したミス・ヴァリエールにやって貰いましょうか」

「……」

どうやら、シュヴルーズ女史はそれなりに怒っているようだ。

先ほど騒ぎを起こし、今また私語をしているのだから、当然だろう。彼女は使い魔の責任は主の責任だと言っているのだ。

しかし、ルイズは未だに固まっているままである。

仕方ないので、俺はルイズのおデコに一発強力なデコピンを食らわす。

「…んうっうっうー!!」

まるで何かが爆発したような音がした。

その音を聞いて、今までマイペースを貫き通していた水色髪の少女もビクッと反応した。

「な、何があったの!？」

「ルイズ、君は気を失ってたんだ」

「え、どどうして!?!」

「授業中にいきなり、目を見開いたまま気を失ったんだ。理由はわからん。それで、ミセス・シュヴルーズに呼ばれているぞ?」

「……………(ひ…)」

「そうなの? なんか、授業が始まってからの記憶が無いんだけど…でも起こしてくれて有難う」

「どうやら、ルイズはあまりのショックで先程の騒ぎの記憶を消してしまっただけらしい。」

「いやいや、礼を受けるほどのことはしてない」

「……………(ヒドイ!)(ヒデエ!)」

「そうですよ、ミス・ヴァリエール。ここにある石をあなたが望む金属に変えてごらんなさい」

「……………(スルー!?!)」

シュヴルーズは元の酷い行動をスルーし、ルイズに錬金を行うように促した。

今の今まで目を開けながら気を失っていたため、何で名指しされたのか解らないルイズは突然のことに焦っているのか、立ち上がりずもジモジしている。

「ルイズ、どうした？ 先生からのご指名のようだぞ？」

「そうだけ、俺たちは今まで嬢ちゃんに魔法を使っている姿を見ていないからな」

「ミス・ヴァリエール、どうしたのですか？ はやくなさい」

エミヤとクー、シュヴルーズが促す。

それでルイズは動こうとしない。

恐らくは、使いたくても使えないのだろう…。

本当に彼女が虚無の担い手ならばな…。

そんなときにキュルケが困ったような怯えたような声で言う。

「先生…。その、やめといたほうがいいと思います」

「どうしてですか？」

「あのですね…。ルイズに魔法を使わせるのは危険です」

キュルケの声に教室にいた生徒たちが一斉に頷く。

恐らく、食堂のような爆発が起きるのだろう…。

しかし、シュヴルーズはそのことを知らないのか…。

「錬金することの何が危険のですか？ 彼女はとても努力家であると聞いていますよ。ミス・ヴァリエール、失敗を恐れては何事も始まりません。周りの人たちのことなんか気にせず、頑張ってみなさい」

「ルイズ、お願いだからやめて」

シュヴルーズ女史の言っていることは、教職者として実に立派ではある。

殆どの人間は何かを始める際、最初は必ずと言って良いほど失敗する。

女史の言うとおり、失敗しても何ら恥じることはないのだ。

失敗は成功の母と言う位なのだから、失敗を恐る必要はない。

しかし、キュルケは蒼白になりながらも言う。

その気持ちはわからなくはない。

食堂の爆発を見る限り、下手をすれば怪我では済まないものだからだ。

しかし、肝心のルイズはというとキュルケに言われて意地を張っているのだろうか、立ち上がり教壇に向かう。

その表情は緊張で強ばっているが、そんなルイズにシュヴルーズ女史は笑顔で語りかける。

「いいですか…ミス・ヴァリエール。　錬金したい金属を強く思い浮かべてくださいね」

ルイズは少し、苛立っていた。

魔法の実践の授業となると、いつもならヤジが飛んで来るのだが、先程のマリコルヌの一件で、みんな黙り込んでしまっている。

唯一キュルケがミセス・シュヴルーズに中止を求めていたくらいで終わった。

既に先生と使い魔、ハジメ以外の皆が机の下に隠れている。

キュルケの友達の…タバサだっけ？は無言で教室を出て行った。

馬鹿にするにも程がある！

ルイズは緊張と苛立ちを覚えながらも、シュヴルーズ素直に頷き呪文を唱え始める。

元は魔眼を発動し、彼女の周りを見る。

マナが彼女の体内に取り込まれ杖に集まっていく。

エミヤとクーモルイズに注目している。

シュヴルーズが魔法を使ったときも思ったが、魔術の形態が丸つきり変わっている訳では無いらしい。

基本的なことは変わらず、魔術回路が杖に変わったと考えればいいのか。

ただ、魔術よりも色々とデタラメなだけなのである。

エミヤは魔術師として半人前、クーは魔術を専門に学んだ訳ではない。

だからこそ、その程度で感覚で納得してしまった訳だが…。

元もまた神秘を目的としてではなく、手段として学んでいたのだが、仮にも世界に6人しかない魔法使いなのだ。

彼が最初、この世界に来たときはかなり頭を悩ませた。

そんな各々考えとは別に生徒たちは既に机の下に隠れている。

エミヤとクーは錬金の魔術とはそんなに警戒しなくてはいけないものか？と怪訝な表情をする。

何故なら、魔術にしても魔法にしても失敗すれば、使われた魔力は形を成さずに霧散化するだけだからだ。

だから、2人は何をするわけでもなく、ただ見ていた。

元？

何気なく、安全な場所に退避してましたよ。

ルイズは呪文を唱え終えたのか、杖を石に向けて振り下ろした。

「「な…！」」

瞬間

辺りは光に包まれた。

何故だか解らないがルイズの魔法は爆発を起こした。

それも使われた魔力に対してかなりの威力と規模の爆発である。

シュヴルーズは気絶し、教卓はボロボロ、壁の一部にはヒビが入っている。

エミヤとクーはかなり驚いているのか、口をパクパクしている。

そして、魔法を放った張本人のルイズは服の所々が焦げて、髪汚れている。

周りの人間はルイズの失態に罵詈雑言を投げかけているが…。

当の本人は、

「ちよっと…、失敗しちゃったみたいね」

などと言っており、それを聞いた生徒達は更にヒートアップしだした。

そして、教室にはルイズと2人の使い魔、そして元だけが残された。



## 第5話 契約もう一回

「さて…」

元は指をパチンと鳴らす。

すると、ひび割れた壁が壊れた机が教壇が時間を巻き戻したように修復されていく。

「……………」

まるでルイズは萎んだ風船のように黙り込んでいる。

元はどうやって、話を切り出せばいいのか考えていたが、この馬鹿がそんな悩みを台無しにした。

「ムシャクシャしたからって、何でもかんでも吹っ飛ばすってのはどうかと思うぜ？」

「そんな訳あるかあー!!」

「へぶう!!」

ルイズはランサーに見事なアッパーを顎にきめた。

しかし、身長差の関係からまるで昇拳のようになってしまった。

それを見て、エミヤと元は凜の功夫を思い出していた。

特にエミヤなど、良く食らっていただろう。

「私魔法が使えないの！ 何にも！ 全然！ だから“ゼロのルイズ”って呼ばれてるの!!」

ボケた事を言う使い魔に、当たり前散らしてしまい、ルイズは自己嫌悪で俯いてしまった。

もうダメだ…。

ただでさえ、魔法が使えないのを知られてしまった。

その上当たり散らすなんて…。

今度こそ愛想つかされた、マリコルヌの言う通りだ…。

彼女の脳内では、2人が私に忠誠を誓ってくれた時のあの光景が流れている。

今までゼロと馬鹿にされてきた自分に、自分だけの騎士が使い魔が出来たのに…。

「何を落ち込んでいるのだマスター？」

「ああ…、どこが失敗なんだ？」

ところが、2人は意味の解らないことを言い出した。

「…え？」

「もしや、君は魔法が失敗したとも思っているのか？ だとしたら、それは間違いだ。確かに君が臨んだ形として成さなかったのかもしれないが、間違いなく魔法は成功している」

「ど、どういうこと？」

エミヤはそんなルイズの疑問を俺に放り出してきた。

目でお前が説明しろと言っている。

魔法使いだからと言って、お前より少し知識がある程度なんだが…。

「ここは、神秘の専門家たる元に説明してもらったほうがいいだろう」

「自分で言い始めたなら、自分で最期まで通して欲しいん…」

ルイズは俺の目をジッと見てくる。

その目を見た瞬間、俺は言い淀んでしまった。

「はあ…。確かにエミヤの言うとおりだ。ルイズ…君の魔法は間違いなく成功している」

「どうして、確信できるの。いつも爆発しかないのに…」

それが答えなんだが…。

まあ良い、だがまだ彼女に虚無だと宣言するのは早い。

「そもそも、魔法を失敗した人間を君は見たことはあるか？」

その問いに彼女は素直に頷く。

「その全員が爆発を起こしているか？」

俺の言っていることが良くわからないのか、ルイズは首を傾げている。

だが、よくよく考えてみれば子供の頃から、魔法の失敗＝爆発だと思っていたせいで気付かなかったが、周りはそんなことは無かった。

「つまりは、本当に失敗してるなら爆発なんて起きるはずがないんだ」

「それは私が中途半端ってこと？」

「違う。そもそも、君達メイジは魔法の発動に必要なモノを精神力などと言っているが、実際は違う」

「どういうこと？」

「エミヤ、魔術の発動に必要なものは何だ？」

その問いにエミヤはオドとマナと短く答える。

「マナとは大気中に含まれている魔力素のことで魔法を起動するのに必要な物だ。その際これを肉体の魔術回路…ルイズ達なら杖に取りこむ。そして、オドとは魔術師が自らの体内で生成する魔力、生命力と言い換えても間違いはない。つまりはその杖という媒体でマナからオドに変換するわけだ。四系統の魔法はオドが効率よく形を変えた結果と言っている」

「え〜と…、つまり魔法はそのオドが形を変えた物ってこと？」

「正解だ、優秀だな」

ルイズは褒められたことに、やはりデヘデヘ笑いをする。確かに可愛らしいのだが、女の子として止めたほうがいいぞ。

「そして、魔法が失敗したときはこのオドは形を成さず、大気中で霧散する。だから、ルイズ以外のメイジは爆発など起きない」

「なら、何で私は爆発するのよ」

「だから、エミヤも言っていただろう？ 君の魔法は失敗ではない。爆発こそが君の魔法なんだ」

「で、でも…」

爆発が君の魔法と呼ばれても喜ぶ人間はいないだろう。とはいえ、まだ虚無を話す訳にもいかないから、こう言うしかないのだが。

「しゃねえ…、元。俺に魔術をぶつけてくれ」

「うん？」

「い、いきなり何言ってるのよ！」

いきなり、クーが変なことを言い出した。

俺もエミヤも彼の目的が読めず、考え込んでしまっ。

「まあ見てな、マスター…」

「何を考えているのか解らんが、いくぞ？」

灰は灰に、塵は

塵に

「ちょ、ちよつと！」

クーの言うとおり、俺は魔術をクーにぶつける。

彼の体を小さな爆発が襲ったが、彼は無傷だった。

「な、なんで…」

「俺たちが英霊だつてことは言つたよな？　そして、サーヴァントには大抵の魔術が効かねえんだ…勿論、人によるがな」

「うそ…」

「エミヤならば、ドット程度は効かんし、クーならば最低でもトライアングルクラスでなければ、傷一つ付けることも叶わんだろうさ…」

そこで、俺はようやくクーの目的が解つた。

「嬢ちゃん…、食堂での爆発を覚えているか？」

その問いに、ルイズは驚きながらも頷く。

あの時、ルイズはこいつに向かつて魔法を使い、確かにこいつに傷を付けた。

「つまりは、嬢ちゃんの魔法はそのトライアングルクラスでも傷つける事が難しい俺に、傷を付けたんだ。　もって、自分の魔法に誇りを持ちな！」

そう言つて、クーはルイズの頭をガシガシと強く大雑把に撫でた。

それを恥ずかしそうにしながらも甘んじて受け入れているルイズの顔を見て、苦笑した。

全く、こいつはこういう所が上手いんだよな…。

「もし、どうしても他の魔法が使いたってんなら、こいつが何とかしてくれるぞ」

そう言つて、ランサーは元を親指で指さす。  
それを聞いて、元は思いつきりため息を漏らした。

「ほ、本当に…?」

「まあ…、別にいいが」

条件がある。

「条件…つて、お金とるの!?!」

まさか、俺にとってはそれよりも価値あることになるかもしれん。

「君さえ、良ければだが…」

俺を使い魔にして欲しい

「使い魔ってどういうこと？ アンタって、使い魔になれないんじゃないの？」

「普通のメイジなら、俺は使い魔にはなれない…。しかし、君ならば俺を使い魔に出来るかもしれん」

「どういうことよ…」

まだ、言うわけにはいかない。

例え言ったとしても、キーが揃わなくては虚無は使えないんだ。だから、今言っても変に彼女を混乱させるだけで終わる。

「只の勘だ…。まあ、使い魔になれば生活費も浮くしな…」

「何よ、その理由は！ 神聖な儀式をなんだと思ってるのよ！」

特に何とも思っていない。

というか、あのブリミルの馬鹿に敬意を表する必要も無い。

「どうする？ 俺を君の使い魔にすると行ってくれるのなら、君に魔法を教える事も出来るんだが」

「うっ…」

ハッキリ言って、この申し出は喉から手が出るほどルイズにとって



は嬉しい誤算であった。

目の前の男が魔法に精通しているとすれば、私が何で魔法が上手く  
いかないかも解るかもしれないからだ。

「その、言葉…本当でしょうね」

「友に誓って」

自分の誇りとか言わない辺りが元らしい。

だが、エミヤとクーはため息を漏らしていた。

「（また、こいつの悪い癖がでたぜ？）」

「（全くだ…。もうやって相手が断れない状況に持っていく…交  
渉としては合格だが、もう少し穏やかに話を進めることも出来よう  
に…）」

「いいわ…。 使い魔にしてあげる」

その言葉を聞いて、元はルイズの頭の高さまで体勢を落としていく。

「我が名はルイズ。 五つの力を司るペンタゴン」

「（もしかしてよ、元の野郎…何かに気づいたんじゃないか？）」

「（と…どうと？）」

「（例えば、このマスターの系統とかによ）」

「（それは有り得るな…。 でなければ、そもそも自ら使い魔にし

てくれなどと言う男でもないだろう」

「（じゃあ、マスターの系統って何なんだ？ 爆発を見る限り火か？）」

「（いや、マスターはどんな魔法でも失敗すると言っていた。恐らくは火では無いだろう…）」

「（じゃあ、何だ？）」

「（解らん…、元に聞く他あるまい）」

「この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

静かに唇を合わせる2人、ルイズは少し頬を赤らめているが、元はあくまで無表情であった。

「…ふむ。 契約は確かに成功したようだ」

そう言つて、彼は左手の黒の手袋を脱ぎ捨て義手の甲に刻まれたルーンを見せる。

それを見たルイズは驚き、口をパクパクしている。

そう言えば、見せてなかったな。

「子供の頃に事故にあつてな…、左腕を失つたんだよ。 とは言え、まさか義手に直接刻まれるとは思わなんだ」

「ふむ…、私たちのルーンと同じものだな」

「3人男同士でお揃いかよ…、気持ちワル」

確かに、そう言われると気持ちが悪かった。

それにしても、まだ虚無の使い魔のルーンはあるだろうに…。  
などと、考えていたが、直ぐに可能性の一つにぶつかった。

「（もしや、既に他の虚無が使い魔を召喚したのか？）」

「ちよつと、聞いてる？」

だが、そんな思考に陥る時間などあるはずもなく、ルイズの声によつて現実に引き戻された。

「どうかしたか…ああ、この通りすっかりルーンが刻まれている。

問題は無い」

「そ、そうじゃ無くて…その…」

今ひとつ要領が得ないな。

モジモジしているルイズの目の前で少し思考する。

何か、忘れていることでも…。

「成程…つまりはこういうことか？」

「え…？」

俺は片膝を付き、右腰に備えていたグレンをルイズの前で構え、コイツ等のあの時と同じように言葉を紡いだ。

「今ここに契約は完了した。」

此処から我が身、我が武具、我が想いは君を守る剣となり、盾となる。

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール…。  
君を主と認めよう」

「……」

顔を上げるとルイズは赤い顔をしながら、プルプルと震えている。しかし、それは怒りから来るものではなく、恥ずかしさから来るものだった。

「如何かな…マスター？」

「…！」

すると、彼女は体を反転させこちらに背中を見せるようにし、腕を組んだ。

「わ、悪くないわ！ そそそそれじゃあね！」

そう言つて、ルイズは走つて教室から出ていった。

残された男3人はお互いに顔を見合わせ、深いため息を吐いた。そんなに、恥ずかしいんならな…。

「……やらせんなよ……」



第5話 契約もう一回（後書き）

## 第6話 平民だから何だ

午後からの授業は座学のようで、使い魔が出席する必要が無いようだ。

広場では、多くの使い魔達が日向ごっこをしていたりする。

そして、そこには召喚された時から余り目にしてこなかったミルもいた。

「クイ〜…」

「キユイ〜…」

そこには丁度ミルを大きくしたような風竜もいる。

その体長は大体6メートルくらいだろうか…、白いお腹を上にする形で寝そべり、お腹の上には同じような形でミルが寝ている。

恐らくは、あの風竜がミルが言っていた姉なのだろう。

ミルの姉である風竜がトリステイン魔法学院に使い魔として召喚された。

これは偶然か？

だが、俺が調整をしてきて感じたものは偶然など存在しない…ということだ。

人生は一度つきりであり、同じような状況は起こり得るが全く同じ状況は存在しない。

だから、良く人が言う「奇跡」、「偶々」、「偶然」はありえないのだ。

例えば、1/10000000の確立でしか成し得ない一つの試練があったでしょう。

そして、それは一度つきりしか試すチャンスしかない。

Aルートでは失敗。

Bルートでは失敗。

しかし、Cルートでは成し得たとしよう。

A、B、C全ては同一の存在であり、それぞれが並行世界のように同一のスタートを進んでいく。

成し得たCは、失敗したA、Bの存在を知らない。

しかし、Cは一度つきりのチャンスをモノにしている。

Cが1/1000000の確立と言われている試練を見事一度目で成し得たということは、即ち100%…必然になるのだ。

残るA、Bは既に一度きりのチャンスであるソレを失敗している。

つまり、彼等にとっては0%…必然となるのだ。

それ故に、俺は偶然など存在しなく、必然しか存在しないのだ。

話を戻そう。

つまり、ミルが世界の外れに現れたことは必然であり、姉である風竜の主と関わりを持つということだと思われる。

だから、この空いた時間を利用して話をしよう。

「ミル」

「クイ…?」

ミルはあの時、話をしていた。

つまりは、ミルの姉である風竜も風韻竜ということになる。

しかし、韻竜はハルケギニアにおいて既に絶滅したと認識されている。



「姉を見つけたのだな…」

「あ、ポカポカする人なの」

「神堂元だ。ポカポカとは一体何だ？」

「わからないの…あなたを見てるとお腹がポカポカするの」

「お腹がポカポカ…？」

「よく解らないが、まあ良い。」

「この場に他の人間がいれば、とても話かけるようなマネはしないが、今はこの場には俺一人である。」

元はミルともう一匹の風竜のお腹を撫でた。

「竜故にウロコで表面が硬いかと思ったが、実際は案外お腹はぷにぷにしている。」

「キユイ…」

「クイ…」

とても気持ちよさそうだ。

目を細め、今にも寝そうである…。

「春の日差しと心地よい風の中、こんな顔を見れば欠伸びが出るというものだ。」

「…少し寝るか」

草むらの仰向けの形で横になると、お腹の上にミルがトタトタと乗

っかってきた。

ミルも小さく欠伸をし、まぶたを閉じる。  
隣で仰向けになっていた風竜もうつ伏せになり、睡眠状態に移る。

「悪くはないな…」

こんなまったりとした一日もさ、こいつがな…。

使い魔を召喚した。

それは風韻竜だった。

名前はイルククウと言っていたが、私はシルフィードという風の妖精の名前を付けた。

呼び出したのは確かにシエフィールドだけだった。

だけど、いつの間にかもう一匹増えていた。

どうやら、あの子も風韻竜であり、シルフィードの妹なのだそう。妹が呼び出される前に何処かに行ってしまった、シルフィードは探している途中に召喚されたのだそう。

だから、あの子も話せる。

名前はミルと言つらしく、何故ここにいるのかと聞いたら、迷子になったところを連れてきてもらったらしいのだ。

その人物はゼロと呼ばれている彼女の使い魔だそう。

今でも覚えている。

召喚の儀の時に彼等から発せられた殺気の密度の異常さに。

でも、あれでも本気ではないんだろう。

なのに、私は怖いと思ってしまった。

お母さんが　　した時から、忘れてしまった感情が恐怖と言つ形で浮かび上がった。

そんな中で、何ともないように動いた黒の男は彼等同様に異常だという。

本当に彼等は平民なのだろうか。

3人とも歴戦の戦士に思える、メイジ殺しと呼ばれる位の…。

だけど、それは正しいようで間違いだと私の使い魔は言う。

彼等は人間ではない。

赤と青の二人は精霊だという。

人の形をした、人を越えた、人ならざる存在だという。

そんなことを言われても、最初は信じられなかった。

だけど、ミルも同じように言っていた。

韻竜は先住魔法を使えるのだそう。

先住魔法は精霊の力を借りて、力を行使しているから解るのだそう。

だから、信じることにした。

なら、もう一人の男は一体何？

シルフィードは大いなる意思の遣い、ミルはポカポカする人だとい  
う。

大いなる意思の遣いとはどういう意味だろうか、そしてポカポカも  
解らない。

だけど、言っている本人達もよく解らないと言う。

なら…、自分の目で見極める。

私の敵か味方が…。

「お！ 元は昼寝かあ？」

「そのようだな」

「随分と気持ちよさそうに寝てやがる。 それにしても…」

何時の間にか、寝ている彼の周りには多くの使い魔が集まっており、全てが寄り添うように気持ちよく寝ている。

何とも面白い絵面である…だが、こつこつを平和と言っただろう。

「ふむ…私たちはどうするか…。 まだ時間はあるが…」

「ならよお…」

そう言って、ランサーは自らの得物を取り出す。  
魔槍…ゲイ・ボルグ。

「一つ、やり合わねえか？」

「ふむ…」

そこで、アーチャーはこの行為のメリットを探す。  
今までの状態と今の状態の違いは…。

- ・ 受肉している
  - ・ 魔力の供給を自分で行う
  - ・ 上記故に肉体の衰えがある
- つまりは…。

「私と君は今、受肉している。 つまりは筋力、技術の衰えがある  
ということだ。 本格的な戦闘になる前に今の状態を把握する必要

があるだろう」

「相変わらず、面倒くせえ物言いだな…。やるのか？ やらねえのか？」

「クツ…。 投影開始」

手にするのは干将・獏耶。  
人が鍛えし最高峰の双剣。

「ハッ！ 行くぜえ！」

「ハアアア！」

金属と金属のぶつかり合う音が広場に響きわたる。

ヒュッ

ガッ

ガッ

キンッ

ガキッ

「（疾い！）流石はランサーだ」

「ハッ！ それじゃあ、弓兵風情でその槍をいなす貴様は何だ！」

槍は只突きよみの武器ではない。  
先は切り裂くことも出来るのだ。

「クッ！」

圧倒的な速度の突きをいなすが、遠心力を用いた槍で上方に切り上げる。

アーチャーはそれを真正面で双剣を十字の形で受け止め、宙に飛ばされる。

「以前の貴様は誇りが無かった！」

「フン！」

宙を舞う彼に追撃の手をランサーは止めない。

宙高くまで飛び上がり、槍を叩きつけつよ風にアーチャーに打ち付ける。

それを双剣で受け止めはしたが、地面に打ち付けられる。

「だが、今の貴様の剣からは…！」

「答えを得ただけだ！」

だが、それも見事に着地をし、追撃の突きを見事にいなす。アーチャーの剣は負けない剣だ。

城壁の如き堅固な守りを主体にした受けの剣である。

それに対し、ランサーは正に機関銃である。

神速の突きはあらゆる守りを打ち崩し、心臓を射貫く。

「ハアアア！！！」

「又ウウウ！！！」

天賦の才と凡庸の才がぶつかり合う。

ガッ

ガキッ

キン

ガキッ

天賦の才に奢ることなく、その身を鍛えたもの。  
凡庸の才故に、その身を極限まで鍛えたもの。

「…！」

「ハッ！！」

二つの異なる境地にたどり着いた男たち。  
とは言え、その境地は明確な違いがある。

「ぬう…！」

「俺の勝ちだ…！」

努力する凡人と努力する天才…。  
言わずもがな、勝るのは後者だろう。

「ああ…私の負けだ…」

アーチャーの双剣は砕かれ、槍は心臓の寸前で止められている。  
双剣は幻想である。  
もし、これが真作ならば違う結果もありえただろう…。

だが、彼は戦うものではなく…造る者だ。



勝敗の形こそ違えど、結果は変わらなかっただろう。

「全く、貴様らは何をしているんだ？」

声の主は元であった。

恐らくは彼らの熱気で目を覚ましたのだろう。

周りにいる使い魔たちも目を丸くして、2人をマジマジと見ている。

「暇だったからな…、アーチャーと手合わせしてただけだ」

「この身は受肉している…。鍛錬をしなければ衰える」

「成程…そういうことか。そう言えば…」

「風呂だ？」

元は風呂を創ると言い出したのだ。

「そんなモン、学院の中にあるだろうが」

「残念ながら、俺たちでは入れないんだよ…こいつがさ」

そういう元は明白にため息を漏らす。

2人は何故、入れないのかと疑問を抱き、元に問う。

「簡単な話だ。俺達は平民…平民は学院の風呂には入れん」

クーとエミヤはこの短時間で平民と貴族の格差の差をマジマジと見せつけられていたが、こんな所にまで差が出るのかと驚いている。彼らも今は受肉している。

つまりは、汗もかき体臭が出るということだ。

「だから、邪魔にならんとところに大きめの風呂を創ろうと思う」

「ここまで来ると、区別ではなく差別だな」

「ったく…。税を収める民がいてこそその貴族だろうが…」

クーの言うとおり、平民がいなくては貴族は存在し得ないのだ。だが、ハルキゲニアの人間はそれを理解してない。

「オスマンには事後承諾で了承させる。だから、風呂を創る」

何故か、元は風呂にこだわっている。

2人はそのこだわりように苦笑しているが、風呂を創ることに賛成のようだ。

そこに一人の教諭が立ち寄った。

「おや、どうなされました？」

その人間はジャン・コルベール。

ここトリステイン学院で教師をしている。

「いや何、この辺に風呂を創ろうかと話していたところだ」

「ミスタ・コルベール…。この場所に創ってもよろしいでしょうか？」

「この場所に造ることは構いませんが…。学園長に了承はとっておられますか？」

「勿論（自己承諾）とっています」

「でしたら、構いませんよ。ですが、3人では時間がかかるでしょう」

「いえ、一瞬で終わりますよ」

疑問符を顔に浮かべるコルベールを他所に元は不敵に笑う。

そして、指をパチンと鳴らすと、彼等の前には大浴場が現れた。

「な…!？」

「ふむ…。代表的な露天風呂形式か…」

「ジャスト直径4メートルだ」

「悪くねえな」

2人はさも当たり前のように言っているが、コルベールは驚いていた。

一瞬でこの規模のモノを造れる魔法など聞いたことはない。

「（魔法!？ いやだが…ここまで凄まじい錬金など…）」

「ミスタ…?」

思考のさなか、不意にかけられる声に必要な以上に反応をしてしまったコルベールに苦笑する元。

「ここは平民の方でも入られるモノにしたいと考えております。ですのでご了承を…」

「一体何故？ 貴方はメイジでしょう?」

それは一般的な感覚である。

メイジは平民を気にすることはない。

この学院ではオスマンのような価値観の人物もいるが、それは余りに異常な価値感である。

「何故？ 大した理由はありませんよ。 この学院の平民の方々に

は大変お世話になっております…そして、これからも暫くはお世話になるでしょうから」

一つの恩返しだと彼は言う。

それがコルベールには不思議に感じ、好ましく感じた。

「それは素晴らしいですね」

だから、自然にそんな風に言葉を発せた。

「そういう風に見える貴方も素晴らしい感性の持ち主だと思えますよ」

だから、元達もそう思えた。

## 第7話 こんな一日もいいかな

風呂の件をオスマンに自己承諾させた。

そんなオスマンは好好爺らしく、二つ返事で了承した。

オスマンは貴族の中でも稀な、平民と貴族を差別しない人間だ。

もちろん、区別はする。

だが、差別は必要ないと考え、平民がいるからこそ貴族が存在しているという考えを持っている。

そして、ソレを済ませた後の元達はルイズと共に広場にいる。

その理由は、彼女との約束を果たすためだ。

そんな中にはコルベル教諭もいる。

ルイズが魔法を使えないことを氣遣っていた数少ない人間であり、さらには先程、見たこともない魔法を使った元の魔法の指導に興味があるようだ。

「何で、アンタ達もいるのよ」

だが、何故かキュルケとタバサもいる。

「別に良いじゃない…。それに私は彼に興味があるのよ」

「…(コク)」

キュルケは元に興味があると言って、彼の腕に抱きつく。

タバサもまた彼に興味があるらしく、首を上下に機械的に動かす。ルイズは実に不満そうだ。

そんな姿を見て、元は辟易しながらまとわりつく彼女を振り払う。

「アン…もう、つれないわね」

「人の使い魔にちよっかい出すんじゃないわよ！　これだから、ツエルプストーの女は淫乱なのよ！」

「ちよっと、誰が淫乱よ！」

「そうじゃない。男と見れば、誰彼構わず誘惑して…ああ穢らわしい」

「そんなんだから誰もかまってくれないのよ」

そう言つて、自分の胸を強調するキュルケに顔を真っ赤にしながら口をパクパクさせているルイズ。

「ななな何さ、ででデカイだけの脂肪を吊り下げて！　頭にいく栄養全部胸に行つてるんじゃない！？」

「胸までゼロの貴方に言われたくはないわよ」

ああ…五月蠅い。

クーとエミヤは二人の迫力に押されている。

「少し、黙れ」

「…!!?」

元は二人にゲンコツを食らわし、罵声の浴びせ合いを止める。

そして、浴びせられた二人はと言うと、頭を抑えながら地面をゴロゴロと転がっている。

特にルイズを殴った左手は金属製の義手…皮膚という一種のクツシヨンが無いため、ダメージがダイレクトで伝わっている。

「何すんのよ!」

「時間の無駄だ…。ルイズよ、つまらん意地の張合いで貴様が魔法の練習をできる時間も減るということを自覚しろ」

「うっ…」

ゼロと呼ばれ、焦っている彼女にこの言葉は実に重い。

「あと、ミス・ツエルプスト…。その気もないのに男性にそういった行動をとるのは止めておいたほうが良い。幾ら、君がメイジとは言え腕力では男の方が上なのだ。いずれ、取り返しの無いことが起きてしまうぞ」

「そ、そうなの…?」

全く。

ツエルプストーの人間は男女関わらず、これだから困る。

恋愛の自由さはこのハルキゲニアにおいて、実に好ましい。だが、少し行きすぎなのが難点だ。

「君の容姿は実に魅力的だ。それ故に君によってくる男は数多く居るだろうし、これからも増えていくだろう…。その時に今のような態度を取っていれば勘違いするバカが出て来る。そうなれば、襲われても文句は言えんぞ?」



「き、気をつけるわ」

そこまでの考えが無かったのだろう。

俺の言葉に冷や汗を流している。

元は気を取り直して、ルイズに向き合う。

「さて、ルイズよ」

「何？」

先程のゲンコツを引きずっているのか、少し反抗的な声である。

「まず、魔法の師事の前に一つ約束して欲しい事がある」

「約束？」

「実に簡単な事だ。俺やクー、エミヤが居ないところでは魔法は使ってはいけない」

「な、何でよ…」

彼女の魔法は実に危険だ。

大した予備動作もなく、教室を半壊させるのだ。

コモン・マジック程度の魔力でトライアングルクラスの爆発を起こすのだ。

下手をすれば死人がでる。

「うっ…」

「だから、約束して欲しい」

両膝をつき、彼女の目をまっすぐ見る。

「わ、わかったわ」

「よし…それじゃあ早速、練習にはいるか」

「それで、何すればいいの？」

「基本となるのはイメージだ」

「イメージ？」

「ミスタ・シンドウ。イメージというのは？」

「単純なことです。今までの彼女は単純に力のコントロールが上手く出来てなかった。だから、コモン・マジックですら爆発という形になっていた。そもそも、ルイズの魔力は並のメイジとは桁違いに大きいのです。それ故に他のメイジ同様の力の注ぎ方では、ダメなのです」

「ふむ…。それ故にイメージか」

「ど、どうということなの？」

「マスターが思い描く1と他のメイジの思い描く1が違うということだ。そもそも魔力の質の高さが違うのだ」

ルイズの魔力の質はかなり高いと思う。

それはつまり、魔術行使の燃費が良いということだ。

「エミヤの言うとおりだ。だから、君は水の一雫を垂らすように魔法を使わなくてはいけない」

「なるほど…。その考えはありませんでした」

通常のメイジは、全身からオドを杖に集めて魔法を行使するが、ルイズの場合では大きくなり過ぎている。

だから、ルイズの場合は魔力の扱い方を変えて、体の一部から通常よりもほんの少量のオドを杖に集める事が出来れば失敗はしないだろう。

しかし、このやり方は使う魔法にあわせてオドを微細に調整するという、精密な作業が必要となり、直ぐに出来るようになるとは考えにくい。

「だが、君は座学での知識はあり、集中力もあり、努力家だ…。  
そうだろうか？ミス・ツエルプストー」

「そうね…。 ルイズが間違いなく学園一の努力家なのは認めるわ」  
「キュルケ…」

キュルケの思いもしなかった言葉に思わず、頬を緩めてしまったルイズではあるが、頬が緩んでいることに気づき気を引き締めなおす。そんな姿を見て、元は思わず溜息をもらす。

この二人ももう少し素直になれば、いい友人同士になれるだろうに…。

「それでは、最初の練習は念力になりますかね…」

「そうですね。これが一番簡単でしょうし…」

元はコルベールの言葉に頷き、創造で創った小石を足元に落とす。そして、地面に1メートル程度の直径をもつ円を書く。

「この石をこの円の中まで運ぶんだ」

「わ、わかったわ」

円の中に動かすことが出来れば、少しずつ円の大きさを小さくして

いく。

最終的には小石と同じ大きさのものにしていく。  
幾ら失敗しよう、小石は創造で創れる。

「それじゃいくわ……えいっ！」

おお…いい爆発だ。

爆発はピンポイントに小石を捉え、内側から爆ぜる様にして塵にな  
った。

もし、これが人間の頭ならば、何とも言えないスプラッターな光景  
が出来上がるだろう。

「まだ、力が大きいな」

「あ、案外難しいわね…」

「まあ、今までのやり方と違うんだ。諦めるには早いぞ？」

「わ、わかってるわ」

「マスターは全身からオドを集めてるから、ダメなんだよ。指先  
から力を送り込むイメージを創るんだ」

「ゆ、指先から!? そんなちょっとでいいの?」

クー曰く、爆発するよりはマシだろうとのこと。  
それに、恐らくはそれで成功するだろう。

「まず、イメージを創れ」

「や、やってるわよ」

「マスター…、イメージは完璧に創るんだ。少しも陰りの無い、明確かつ完全なイメージだ」

さすがは投影を極めたエミヤだ。言葉の重みが違う。

エミヤの言葉に静かに目を閉じ、脳内でイメージを創る。

「マスターがすべきことは、創ること…魔力を一雫杖に通し、小石を円の中に静かに動かし、成功する…。そして、完全なかつ完璧で陰りもない…」

「……」

「……」

そして、静かに目を開けてルイズは静かに杖を振るう。

その顔は先ほどまでの失敗に対する怯えなどは微塵も無かった。

「…あ」

「ねえ、今…」

「動きましたね…」

「動いた」

その石はコトリと音を立てて、地面から数センチ浮いたところで再

び墮落した。

「（マスターは天才か？）」

「（この成長スピードはそういつことだろう）」

「ルイズ…気を抜くのは早いぞ」

「わ、わかってるわよ…」

まだ数センチ宙に浮いただけなのだ。

喜ぶのは気が早い。

「（少し、流し込んだオドの量が足りなかったか）ルイズ、次は雫を清水のように少しずつ流し込むんだ」

「わ、わかったわ」

だが、その先は爆発と先ほどのように少し浮くだけを繰り返すだけであった。

元達が止めるが、ルイズは聞かず数時間も続けた為に倒れてしまった。

そして、今日はお開きとなった。

クーとエミヤに先に風呂に行ってくれと言い、俺はルイズを背負い部屋まで運んでいる。

しかし、無茶をするもんだ。

「よっぽど嬉しかったんでしょ？」

ルイズの部屋はキュルケの隣だ。

それ故に帰り道は一緒になるわけだ。

それにしても、あんなに嬉しそうな顔をするか…。

小石が宙を浮くたびに、ルイズは物凄く嬉しそうにしていた。

「爆発が起きても、その規模は今まで何かよりずっと小さかったわね」

「ああ…。こいつは天才だよ。本来なら数日してようやく今の地点になるはずなんだが…、まさか一日でここまで来るとはな…。」

「嬉しい誤算？」

「ああ…そうだな」

耳元で寝息を立てるルイズの頬を突きながら、キュルケも嬉しそうに聞いてくる。

そんな笑顔を向けられて、彼もつられたのか、静かに笑みを浮かべる。

「…！／／／」

そんな笑顔を見て、顔を赤くしたキュルケに気がつかず黙々と歩き続ける元は考え事をしていた。

ルイズとキュルケ…、2人ならば2家の関係の修復の糸口になるかも知れんな…。



「つと、着いたか…。 それではミス・ツェルプストー「キュルケ  
でいいわよ」…また明日会おう、キュルケ」

「ええ、それじゃあね「元でいい」ハジメ」

キュルケは嬉しそうに部屋の中に戻っていくルイズを背負った元の  
姿を最後まで見ていた。

部屋のベッドに少女の小さな姿を寝かせる。

すると、その小さな感覚で彼女は目を覚ました。

「ルイズ、目が覚めたか？」

「あ、あれ、ここは…」

「君の部屋だ、無茶しすぎて倒れたんだ」

「あ、そっか、私…」

「焦るのは解らなくないが、倒れるまでやっていたら身体のほづが  
持たない」

「…悪かったわよ、つい嬉しくて」

「…分かっているさ。 だが、落ちついて行こう…時間はまだある」

静かに頷くルイズの頭を優しく撫ぜる元の姿は1人の兄の姿だった。

「だが、ここまで来れば後は簡単だ。 直ぐに全てのコモン・マジ  
ックが出来るようになる」

「ほ、本当！？」

「勿論だ。 コモン・マジックは流し込む魔力の量とイメージさえ完全なら、系統に関わらず行使可能だ：系統に関わらずな」

虚無もその例外ではない。

「だから、ここまで来れば念力は流し込む魔力の量、他のコモン・マジックはイメージだけを気をつければいい」

「ほ、本当なのね！」

俺の言葉に一気に立ち上がったルイズではあるが、その場へたり込んでしまう。

まだ、魔力の回復が充分ではないのだ。

「ああ…、だから落ち着いていこう」

「う、うん」

素直で結構だ：カーリ又より幾分か賢いな。

「それじゃあ、今日はゆっくり休むんだ」

「わかったわ…」

横になっているルイズに毛布をかけ、頭を撫でてやる。

すると擦ったそうにするが、甘んじて受け入れているルイズに笑みが漏れる。

あの過剰な自意識は魔法がつかえない故の反動なのだろう…。  
魔法さえ、使えれば少しはまともになるだろうと踏んでいたが、此  
処まで素直になるとはな…。

扉に向かって歩き出し、ルイズに声をかける。

「お休み…ルイズ」

「おやすみなさい…」

ハジメ…、ありがとう

俺が創った風呂は学院の結構隅っこにある。  
それ故に歩いている途中で、多くの人間を目にする。  
しかし、その人間の多くはここで働いている平民の方々だ。  
太陽は半分近く沈んでおり、既に夕方だ。

学生は夕食の時間まで自室で過しているため、外では目に出来ない。  
すると、シエスタが視界に映った。

「シエスタ」

「あ、シンドウさん」

「今、何をしてるんだ？」

「今は何もしてないですよ。先ほどまでは忙しかったんですけどね」

そう言っつて、はにかむ彼女の笑顔は夕日も混じってとても眩しかった。

一瞬でも見とれてしまった自分が恥ずかしくなり、視線を下にずらすと水仕事で荒れたのであろう痛痛しい手が見えた。

「シエスタ…手は痛くないのか？」

「大丈夫ですよ…慣れましたから」

痛くないじゃなくて、慣れたか…。

シエスタの手を取り、魔術を使おうとする。

「あ、あの…」

シエスタはいきなりのこと戸惑っているが、俺は無視して魔術を使う。

すると、一瞬で彼女の手は一部裂けたり、皮が剥けていたところが綺麗に治った。

「魔法…」

「シエスタは女の子だから…。流石に先ほどの手は痛痛しい」

「シンドウさんはメイジなんですか…?」

「確かに俺は魔法が使えるよ…だが、貴族じゃない。気にするな」

そうやって元は懐から取り出すように創造で創ったハンドクリームをシエスタに渡す。

「あ、あのこれは?」

「これは手が荒れないようにする薬だ。これからも水仕事をしていくだろうから、使うといい」

「そんな貴重な秘薬なんて…も、もらえません」

「気にするな…。これは世話になっているお礼だ。もし、他にも手荒れで困っている人がいたら、俺の所に来るように言ってくれ。そうすれば、治すから」

それでも戸惑うシエスタの頭を優しく撫せてやり、この場を立ち去

る。

後ろでは、大きな声でお礼を言っている彼女の声が聞こえる。

「ああ、そうだ…。シエスタ！ 学園の隅に風呂を作ったから、働いている皆にいつでも入ってくれて構わないと言ってくれ！」

そう言っつて、その場を走り去った。

でなければ、ずっとお礼を言いそうに怖いしな。

「うん？ まだ、風呂に入ってたのかわかったのか？」

「お湯が入ってない！」

浴場の前では2人が立っており、お湯がないと主張する。そういえば、まだ入れてなかったな。

元はそんな2人に苦笑し、指を鳴らす。すると、湯船の中には大量の水が注がれた。

「後は、暖めるだけか…」

これだけの水量だ。

普通の熱量では温まらないだろう。

「創造開始」

創り出すは、レヴァンティン。

だが、その骨子は甘く本来の性能よりも数段低くできている。だが、それで充分だ。

そして、それを湯船に突きいれ、水を適温に温める。

「これでいい感じかな…」

温度計を創り出し、水温の温度を測る…40。いい位だ。

だが、それを見てエミヤとクーは呆れている。

「どうした？」

「余りに魔法を多用するのでは…」

「魔術師の夢をこんな事に使ってるって教会の連中が知ったら、面

白いことになりそうだな」

「使ってこそその魔法だろ？」

そう言つて、元はさらに三枚のタオルと一升瓶の日本酒にコップを創りだした。

「悪くないだろ？」

「クツ」

「違えねえな！」

俺は創る者だ。

ハルキゲニアでは手に入らない日本酒も簡単に創れる。とはいえ、今日は結構魔力を使つてしまったな…。

「」「ふう…」「」

男三人で声を洩らしながら、風呂に浸かる。

空は既に暗くなつており、今は2つの月と元が作り出した灯籠だけが照らす。

コップに日本酒を注ぎ、口に運ぶ。

「へえ…旨いな」

「元…こいつはまさか」



「ほお…分かるか？ こいつは新潟県八海醸造の八海山だ…。 日本酒の中でも最高クラスのモノだ」

創造の工程は投影と変わらない。

理解さえすれば、本物となんら変わらないものを創れるところが強みだ。

…勿論、有機物、無機物問わず創れる。

故に魔法とまで言われている。

「旨い酒、最高の風呂…後は旨い肴と女がいれば文句なしだな」

「ランサーよ…。 つまみの方は私が今度作るう…しかし、女は作れん。 私が作れるのは剣だけだ」

クーはエミヤの顔を見ながら、そんな事を言っており、エミヤは生真面目に答える。

やっぱり、お前は衛宮だよ…。

そんな姿に苦笑していると、後ろから声がかかる。

「あ、シンドウさんが言ったお風呂って、これのことだったんですね」

「シエスタか…。 待っていてくれ、もう少しで上がる」

シエスタの後ろには他にも何人かメイドがおり、その顔はお風呂を楽しみしているようだった。

「そういえば、彼女達の手は大丈夫なのか？」

「あ、そうでした。 実は皆さん、手荒れが酷くて…よろしいです

か？」

勿論だとも。

俺が言い出したことだしな。

だが、その人数は6人いる…1人では時間がかかるな。

「クー、エミヤ…治療の魔術は使えるか？」

「すまないが私には無理だ…」

「俺はいけるぜ。…なんだ、手荒れか？」

クーは湯船に浸かりながら、こちらに近づいてきてメイドの手を見る。

「ヒデエな、こいつは…割れてんじゃねえか」

「あ、あの…」

少し怯えるメイドにクーは笑顔で手を取り、魔術を使う。それを見て、俺も他のメイドの手を取り、魔術を使う。

「「あ、治った…！」」

「女の子なんだから、こういうことも気をつけねえとな」

何とも人懐っこい笑みを浮かべるクーに顔を赤らめるメイド達を見て、苦笑する。

治療のほうをクーに任せて、俺は湯船の近くに置いてある外套から取り出すように新たにハンドクリームを6つ創りだす。

「これを手に塗るといい。手荒れが防げる」

「「「あ、ありがとうございます!」「「「

元気がいい…。

さて…治療も終わったし汗も流せたし、そろそろ上がるか。

「エミヤ、クーそろそろ上がるぞ」

「ぬ…了解した」

「あん？ まだ酒が残ってるんだが…」

「部屋で飲めばいいだろう？ 流石に春とはいえ、夜はまだ寒い。女子を待たせて置くのはどうかと思うが？」

そう言つて、俺達は大きなシートで遮られた着替え場所に移り、着替えをする。

「そついえば…着替えがねえ」

「ぬ…抜かった」

「はあ…」

俺は創造で2人分の着替えを創りだす。

エミヤは上下黒のシンプルな造りのシャツとパンツ。

クーには標準的なデニムのパンツと薄い緑色のシャツを。

俺は先ほど創つた着替えに身を包む。

「これでいいか？」

「すまん」

「悪いな…それにしても、お前の魔法は本当に便利だな」

「否定はしないさ…。とはいえ、全てを理解しなくてはいけないからな…無条件で創れるわけじゃないさ」

フーンと分かったような分からないような曖昧な返事をしながら、着替える二人と俺。

「シエスタ、俺たちは行くから…お湯はそのままにしておいてくれて構わない」

「本当に良かったんですか？」

「ああ…しっかり、身体を休めてくれ」

「あ…、後でマルトーさん達も来るって言ってました」

「時間の調整はそちらに任せる。それじゃあ、お休み」

「はい…お休みなさい」

「「「「おやすみなさい！」「」「」」」

本当に元気がいいことだ。

エミヤとクーの二人はルイズの部屋に戻り、俺はあてがわれた平民の宿舎に戻り、眠りに入った。

## 第8話 覇気を感じる

清々しい朝を迎えた。

外に出て、朝一番の空気を肺に流し込み、タバコに火をつけて口に啜える。

朝早くだというのに、メイド達は忙しそうに動き回っている。

洗濯場に歩を進めると、昨日と変わらずエミヤとクーが洗濯をしている。

「おはよう…う。 って、何だか疲れてないか？」

エミヤとクーは朝だというのに疲れた顔をしている。  
どうしたというのだろうか。

「ああ…元か」

「清々しい朝だな…」

いや、顔は全く清々しいからはかけ離れているぞ？

「大したことではないさ…」

「嬢ちゃんの寝相が半端無くてな…夜中に何度も叩き起こされた」  
なるほど…。

受肉しているからこそ、睡眠不足が響くということか。

「悪いんだが、今夜は部屋…俺と交換してくれねえか？」

「別に構わないが…そんなに酷いのか？」

「本人に自覚がねえってのが性質悪い…」

「あそこまでの寝相は中々にあるまい」

そこまで言うか…。

沈みながら、洗濯をする二人の後姿に苦笑する元に声がかかった。

「シエスタか…、おはよう」

「おはようございます…って、どうしたんですか。お二人共なんだけ酷くお疲れのようですが」

「ルイズの寝相の悪さの被害者だそうだ」

それを聞いて、シエスタは苦笑する。

というか、苦笑するしかないだろ？

シエスタの仕事を手伝いながら、たわいも無い話をしているとエミヤとクーが洗濯を終わらしたようである。

「それじゃあ、俺たちは行く」

「お手伝いしてくださって、ありがとうございました」

「なに…気にするな」

「あ、あの…」

シエスタは何かを言いよどむようにしている。

何かあったのか？

「何で、シンドウさん達は魔法が使えるのに私達平民に優しくしてくれるんですか？」

なんだ、そんなことか。

しかし、ハルキゲニアに住む人間ならばその疑問も当然だろう。

メイジは貴族、平民に関わらず、魔法がつかえない平民を見下すものだ。

「可笑的いか？」

「い、いえ…その、あまりそういう方はいらっしやらなかったの…」

「シエスタよ…。私達は君たちに世話になっている…だから、その礼をする。ただ、それだけのことだ。なんら不思議に思う必要は無い」

エミヤはさも当たり前のように言うが、ここハルキゲニアではその考えは異常なのだ。

「で、ですけど…」

「はあ…、目には目を齒に齒を…恩には恩を返す。なんら可笑的いことは無いじゃねえか」

「クーとエミヤの言うとおりだ。君が不安に思うことは無い。それでも可笑しく感じるのなら、俺達が変人だと思えばいい」



そう言うとシエスタはポカーンとした顔をしたが、直ぐに笑みに変わった。

そうだ、君には笑顔が似合う。

だから、先ほどのような不安と怪訝に満ちた顔など必要ないんだよ。

3人でルイズの部屋に向かう。

部屋に入ると、未だに少女は眠っていた。

というか、涎だらだらだな。

表情も締まりゼロである。

「マスター、朝だ。起きたまえ」

「うにゅ〜、あと5時間」

「それでは、昼になってしまつぞ…」

何ともぼけたことを言う娘だ。

「クー、昨日もこんな感じなのか？」

「そうだけ…というか、今日はマシだ」

マシ…これですか？

「昨日は『明日起こして』だからな」

馬鹿な…。

どんなグータラ少女だ。

使い魔のいない状況ではどんな生活してたのか気になる。

「はあ…仕方ない」

溜息を洩らしながら、エミヤは耳元で何かをささやいている。聞き取れないが、ルイズは凄まじい勢いで体を起こした。

「ハッ！ あ、あれ…？」

「マスター、朝だ」

「なんつう締まりのねえ顔してやがる」

「……………」

ルイズは自分の胸元を寝ぼけながら、さすっている。  
なるほど、読めたぞ。

だが、俺の予想が正しければ…エミヤよ、少しかわいそうな起こし方ではないか？

部屋の外でルイズの着替えを待っていると、昨日と同じように隣の部屋からキュルケが出てきた。

「あら、おはようハジメ。それに御二方」

「ああ、いい朝だなキュルケ」

「………」

二人が俺達の挨拶に何とも言えないジト目で見てくる。  
キュルケよ、二人のこともちろんと名前で呼んでやれ。  
でなければ、俺の胃に穴が開くぞ。

「ルイズはまだ着替えているの？」

「どうやら、そのようだ…。それにしても、ルイズが今までどうやって起きていたのか気になるものだな」

「ああ…あの子、朝弱いものね。それで、貴方の疑問だけど私が起こしてたのよ」

どうやら、隣人の力を借りていたらしい。  
それでありながら、ルイズはキュルケに対する態度が冷たいように

思える。

いくらキュルケが仇敵の家の人間だからと言って、それは人としてどうなのだろうか？

「あの子…気づいてないんじゃないかしら？」

「どういう事だ？」

「だって、私部屋の外から扉を思いっきり叩く位しかしてないもの

なるほど、顔が分からないから知らないか。

どうやら、キュルケはルイズにとって顔も知らぬ目覚まし時計になっているのだろう。

「なんで、嬢ちゃんに言わないんだ？」

「嫌よ…だって、恩着せがましいじゃない」

なるほど、どうやら彼女はそういう人間なのだな。

普段はルイズを弄ってはいるが、本当は大切に思っているのだろう。3人で生温かい目でキュルケで見ると、彼女は慌てながら取り繕う。

「…いい子なんだな」「」

「やめてよ…。私はただ…あの子とは対等にいたいんだよ。それだけよ、本当よ！」

もはや、何を言っても逆効果である。

そんな、中やつと我等の主が着替えを終えて出てきた。

「ようやく出て来たか…」

「またキュルケがいるし…」

「おはようルイズ。 いい朝ね」

「アンタを目にした時点で、私のいい朝はないわよ…！」

全く、この少女は…。

どうでもいいが、食堂にいかないか？

「そうね…、キュルケに構ってる暇なんて無いわ」

「随分な言い草ね。 まあいいわ…それじゃあ行きましょ？」

「腕に纏わりつくな」

「もう、つれないわね…。 でも、そんな貴方も素敵よ？」

言ってる…。

だから、二人ともそんな目で見るな。

あと、ルイズ杖を構えるな。

「いいから、早く行こう…」

本当に…。

食堂では多くの生徒達が席についている。

「あら？ タバサじゃない、どうしたの？ 席にも着かないで」

「…待ってた」

そう言つて、タバサは俺を見上げる。

俺か？

何故、俺を待っていたんだ…大した共通点はないだろうに。

「おい、アーチャー。元の野郎のアレはどうなんだ？」

「知らん。あれは昔からだろう…だが、鈍感でないだけマシだ」

「全く、同じ男として羨ましい限りだ」

それは確かにそうだが、タバサの場合は違う。  
単純な興味ゆえだ。

「あなたが男に興味を持つなんて珍しいわね…あげないわよ？」

「興味があるだけ」

「ちよつと、人の使い魔に色目使わないでよ！」

はあ…朝から騒がしい。

「…俺達は厨房に行く」

「そうだな、ここでジツとしても飯は来ねえしな」

「それに給仕の邪魔になる」

俺達は厨房に向け、足を向けるがそこに一つの爆弾が投げ込まれた。

「私も行く」

「ちよちよつと、タバサ!？」

だから、君と俺の繋がりは何だ？

俺が君の使い魔の妹を連れてきただけだろう。

そして、まともに会話もしたことが無いというのに…。

「……行く」

真っ直ぐ俺の目を見てくる。  
だが、何だこの目は……。  
何も無い……深い闇……。  
これは桜のあの時と……。

「わかった」

「ありがとう」

「じゃあ、私も一緒にしようかしら」

それを聞いた途端、周りの男子生徒の視線が突き刺さった。  
ああ……、これはエミヤの仕事だろうに。

「ちょ……私も行くわ!」

ルイズ……これ以上、事態を面倒にするなよ。

なんだろうか、この心労具合、まるで機動六課に居た時みたいだ。

そろそろと厨房に向かって歩く俺達の姿は実に不思議なものだろう。  
エミヤはエミヤで俺の状況に声を殺し笑っているし、クーはクーで  
声を殺さず笑ってやがる。

オボエテイロヨ?

「マルトーさん」

「お、来たか……って、どうしてまた貴族様が此処にいるんだ?」

「申し訳ないんですが、彼女達も俺達と一緒に食事をしたいと……」



俺達は厨房の中に入り、小声で話す。

しかし、今までこんなことが無かったようでマルトー氏は何ともいえない顔をしている。

「そりやまたどうしてだ？」

「私に聞かれても……」

正直言つて、俺もよくわかっていない。

朝だからか、脳みそが上手く働いてないのだろう。そう思いたい……。

「まあ貴族様を無下に追い払うこともできねえし……別にかまわねえが」

「すみません、この飯は必ず」

「良いつてことよ。昨日は良い風呂と酒を貰ったしな！」

実は湯船の近くにコック向けに日本酒を一瓶置いておいたのだ。気づいてくれたか。

テーブルに運ばれてくる料理の香りが鼻孔を撥る。腹が減ってきた。

「お、お待たせしました」

「ありがとう……それじゃあ、食べるか」

テーブルを前に並べられた料理は俺だけでなく、この場にいる全員  
の胃を刺激したようである。

「偉大なる始祖ブリミルと女王陛下よ。今朝もささやかな糧  
を我に与えたもうたことを感謝致します」

「いただきます」

そして、料理に手をつけようとするがルイズから疑問が投げかけら  
れた。

「ちょっと、何よソレ」

「いただきます」か？

そう言えば、ハルキゲニアでの食事の挨拶は王とあの馬鹿に感謝を  
捧げるんだっけな。

「いただきます…“頂きます”とは“動植物の命を頂きます”とい  
う命の繋がりと、“多くの生き物を犠牲にして生きている”という  
事を再確認し、偉大な自然への感謝の気持ちを表すものだ」

「エミヤの言うとおり、神に感謝するのもいいが、俺達の糧に成っ  
てくれている動植物へ感謝の念を伝えることも重要だからな」

「いい言葉ね…それって貴方達の国の言葉？」

「俺の国にはそう言った言葉はねえが、こいつ等の国はそういう事  
を重要視するんだよ。ま、俺もこの頂きますは気に入ってるがな」

「ふうん…」

「……」

「話はいいが、料理が冷めてしまう。 サッサと頂くとしよう」

しかし、本当に美味しい。

何故、この連中は料理を残すのだろうか…。

まあ、確かに朝の食事にしては少し重たいし、カロリーが多そうだが…。

「ふむ…」

「どうした、アーチャー？ いらないんなら俺が貰うぜ？」

「そうではない…。 朝食にしては量が多いと思ってな」

「そうなのよね…確かに美味しいんだけど、量がちょっと気になるのよね」

「それに、栄養バランスも気になる。 どう見ても脂質と炭水化物に偏りが見られる」

エミヤが言うのならそうなんだろうな。

つと、ルイズ…野菜もシツカリ食べるよ？

「うつ…だって、この野菜苦いんだもん」

「野菜には美容に良い栄養素が多々含まれている。 今は若さで乗り切れるが、歳を取れば取るほど…」

「わ、わかったわよ。 わかったから、そんな怖いこと言わないでよ」

案外、馬鹿に出来ないのだぞ？

それにルイズは成長期真っ盛りだ。

栄養バランスをシツカリ考えて沢山食べるよ。

「ほら見る。 タバサの嬢ちゃんなんか好き嫌いしないで、ちゃんと食べているだろう？」

クーはそう言うが、食べすぎではないか？

特に野菜のサラダをお替りしまくっている。

アルトリアもそうだが、何故あの小さい身体にアレだけの量が入るのだろうか？

「あ、ルイズ。 何、タバサのお皿に野菜入ってるのよ」

「うう〜……」

「もう…そんなんだから胸もぺったんこななのよ？」

野菜の栄養素に胸が関係しているのか分らんが、間違いなくこれは唯の嫌味だ。

「……な、ななんですってええええ！」

「ハハハハハ！！ やっぱキュルケみてえに女はボンキュボンじゃねえとな！」

それを聞いたら凜とアルトリアは狂気乱舞である。  
ああ…はやてもありそうだな。

「…ど、どうせ…！ どうせ私はペッタッコよおおおお！！」

そう言って、椅子から立ち上がり腕をブンブン回すが、クーとルイズでは体格差が多きすぎて、頭を抑えられている形で腕が空回っている。

「ランサーよ、マスターも女性なのだ。 その物言いは酷いだろう」

「そう言うお前も今朝酷かっただろ？」

「さて、何のことかな」

なるほど、恍けるか。

まあ良い。

ここは一つ、ルイズに豊胸エクササイズというものを教えてみるか。ルイズはひとしきり暴れたことで疲れたのか、椅子に座り息を切らしている。

「ルイズ…」

「なによ」

「今は食事の時間だ。 静かに食べる…それが終わったら、改善策を教えてやる」

その言葉を言った瞬間、厨房内にいる全女性からの視線が集まった。物凄く怖いんだが…マルトー氏に始まるコックの方々が怯えてしま

ってる。

「ど、どどど」

「口が回ってないぞ。今は食事の時間だ。それは後で教えてやる。メイドの方々にも後で教えるので仕事に戻ってください」

あと、タバサよ。

無言で見つめるのは止めて欲しい。  
地味に怖いから。

それにしても、万国共通、世界共通で女性の悩みは同じなのだな。

ここは広場である。

いつの間にか、目の前には多くの女性がいる。今は授業中ではなかったか？  
というか、学年を超えて女性がいるんだが…。

「うん？ シエスタもか？」

十分だと思っただが…。

「あつて困ることはありませんから」

なんだろうがこの威圧感。

言葉のふちぶちに殺気染みたものを感じる。

「まあ…いい別にいいんだが」

さて…もし下手なことをすれば、死ぬな。

豊胸体操と美肌の為の運動療法や食事療法について出来る限りわかりやすく説明するが、これ等は実際に効果ありと実証されたものだから、世界が変わろうと大した変化は無いだろう。  
というか、あれば俺が死ぬ。

「まず、これをすれば君達のバストサイズは幾らか上がる」

「「「「?!?!?」「」「」

あ、目に嫌な光が走った。

「まずはルイズ…ちょっと来て欲しい」

呼ぶと今までにない位の機敏な反応でこちらに近づいてくる。  
そして、ルイズの姿勢を確かめる。

骨格、筋肉の付き方…なるほど。

「君は少し、骨の位置がずれてるな」

「骨がどう関係するの？」

「骨には筋肉が付いている。そしてその筋肉こそが胸の形、位置を決める」

その言葉一言一句に女性たちはメモをとる。

それは授業では見られないほどに真剣さに満ちているだろう。

「ルイズの場合は…肩が上がってるな、所謂イカリ肩と言う奴だな  
それで、胸が上に吊り上げられていて、胸の脂肪が押さえ付けられている」

「な、なるほど…」

つまりは…。

「ルイズ…少し痛いぞ？」

「え？ ぎゃあああああ！！」

思いつきり、骨がバキバキ言っている。

その音と光景、ルイズの叫び声に一同はかなり引いている。



だが、ここまで酷いとかかなり荒療治が必要だな。  
魔法が使えないことから来る緊張と焦りから筋肉が引き攣っている。  
つまりはこれを緩めれば…。

「よし、終了だ」

「……」

しかし、ルイズは口から煙をだし、伸びている。  
首筋に手刀をし、無理やりたたき起こす。

「ハッ！」

「起きたな？」

「い、いい痛いじゃないの！ 先に言いなさいよ！」

言ったが？

誤差、数秒ではあるがな。

「それで、胸を触ってみろ」

恐る恐るルイズは自分の胸を触る。

それに一同は釘射るような目で見つめる。  
怖いから…。

「む…」

「「「「（む…？）「「「」

「胸があるうううううう!!」

「『何いいいい!!!!』」

「ルイズは肉ずきも余りいいほうでは無いからな、この療法だけでは数センチ上がる程度だが、時間をかけて豊胸マッサージをすれば、また幾らかは上がる」

「ほ、本当に…?」

ルイズの目は既に涙目である。

そこまで感動したのか?

だが、カリーンの遺伝子に打ち勝てる可能性が出てきたのだ。その喜びは俺には解らない。

「先に言っておく…」

俺は一同に向き合って、一つの辛い現実を言葉にする。

「胸をもんでも胸は大きくなるらない」

「『な、なんだってええええ!!』」

「胸をもんでも、上がるのは感度だけだ。むしろ胸の形を維持する筋肉は緩み、脂肪を燃焼する運動になり、小さくなるわ形は崩れるわでマイナスだ」

それを聞いた瞬間。

全員がうちしがれ、涙を流した。

「い、今までの私の努力は…」

「そ、そんな現実知りたくなかった!」

一人一人思うところがあるのだろう。

「だが、まだ間に合う。取り敢えずはこの矯正で各々本来のサイズを取り戻し、胸を大きくしていこう」

「『『『『『』』』』』』」

まるで一種の宗教活動である。

その一部始終を見ていたエミヤとクーは終始、女子の迫力に押され、小さくなり怯えていたという。

「次はシエスタか…」

「はい！ よろしくお願ひします！」

全員が全員覇気がある。

施術を終えた女子たちは皆、自分の胸を確かめながら、涙を流している。

それほどまでに嬉しいか！

「まあいい。 それじゃあ、シエスタは…」

……あれ？

骨格に歪みがない。

筋肉は…問題ない…。

「シエスタ…少し失礼するぞ」

「はい？」

背中と脇下の部分の肉をさする。

その度にシエスタからは色気のある声が漏れる。  
勘弁してくれ。

そして、女子たちはその声に顔を赤くしている。

「シエスタ…君は骨格に歪みがない」

「え？ じゃあ…私の胸は…」

「いや、そういう訳ではない。君は今までの女子とは違って実に女性らしい肉付きをしている…だからこそ…」

思いつきり、シエスタの脇部分にある肉を胸方向に寄せせる。

「ひゃっ！」

「胸は脂肪の塊だ。故に筋肉で形を維持している。だが、胸にあるはずの脂肪は時々移動する」

「い、ひゃ、どう？」

「胸の肉が脇下やそのまま背中に行くんだ。だから、その肉を前に…」

魔術回路を叩き起し、流動させる。

そんな事で神秘を使うな？

わかってない…失敗すれば俺は死ぬ！

「これでどうだ？」

先程までとは明らかに目で見て変化がある。

服が張ってるのだ。

「す、凄いです…」

「本来、これは時間をかけてするものだから…だから、今回は少し魔法を魔術を使った」

「そんな事で魔術」「そんなこと？」「すみませんでした！」

エミヤとクーは突っ込みの途中で土下座した。  
だから、言っただけ？  
死ぬって…。

ついでに解析で前後の胸のサイズを測ったのだが…、  
83 88に  
なっていた。

ルイズは76 79である。  
高々3サントであるが、女子にとっては大きな差だろう。

「あ、ありがとうございます！」

これまでのシエスタから受けた礼の中で、一番良い声だった…。  
何だかなあ…。

「はあ…次の人は」

「……」

無口少女だった。

「タバサか…」

「お願い…」

何だろうか、全く声のテンションは食堂の時と変わらないといつのに…。  
この威圧感…。

ルイズよりデカイぞ…。

「それじゃあいくぞ」

「…(コクツ)」

まずは骨格からだ…歪みゼロ。

つ、次は筋肉…異常なし。

肉のほ、方は…問題ない。

「…………(キラキラ)」

そんな眩い目で俺を見ないでくれ！

不味い…全く問題ないぞ。

エミヤとクーに助けを求めようとするが、視線をそらされた。

「(この裏切り者…!)」

「どうしたの？」

不味い…こちらの雰囲気気づいたか。

だが、あの手は…使いたくはない。

だが…！

元はタバサの肩を掴み真正面から向き合う。

「タバサ…恋をするんだ」

「恋い？」

「そつだ…残念だが俺が出来ることは無い」

「…！（ガーン）」

「胸は女性ホルモンという胸の大きさを左右する一因がある」

「…（ウルウル）」

「そ、それは主に恋愛をしている時に多く出る。キュルケを見るんだ！」

「…！」

そのには施術をせずとも大きく、立派な乳房があった。それを羨望の眼差しで見つめるタバサに怯えるキュルケ。何ともシユールな絵面である。

「君の友人であるキュルケは常に多くの恋をしている…つまりは女性ホルモンが豊富ということだ」

「凄い」

「今君には好きな男はいるか？」

「…（フルフル）」

「なら、俺が言いたことはわかるな？」

俺の問いに目に涙を浮かべながら、静かに頷く。それを見て、心が痛んだ。



「無理して、恋をしるとは言わない…。それに食事からでもそれに似たモノは摂取できる」

「本当？」

そういつた食材は確かに存在する。

安価かつ、高タンパク、畑の肉と呼ばれている…汝の名は。

「大豆だ」

「大豆…」

「いいな？」

「分かった」

今までに無い強い意思を目に宿し、力強く頷く。

去りゆく、彼女の背中は小さかったが、とても大きく感じた…。

「なあ…結局、なんだったんだ？」

「知らん…俺に聞くな」

英霊2人はため息を漏らした。

## 第9話 ゼロじゃないゼロ

「昨日の女性たちの剣幕は凄まじかった。

「俺思ってたんだが…」

「どうした…唐突に？」

「この世界もまた女性の美への追求は存在したことが解る。

「30年前もこの世界に来たのだが、その時はカニバルの存在もあり、心に余裕が無かったのか世界が小さく感じた。

「しかし、今は違う。」

「創造で創った美容用品を売れば、一財産稼げると思っただ」

「魔法使いのセリフとは思えんな」

「違えねえ」

「失礼な。」

「真正正銘の魔法使いですよ？」

「不可能を可能にした6人の内の1人だ。」

「…とまあ冗談は置いて、エミヤは厨房に何しに行ってたんだ？」

「冗談つて…、なに…大したことではないさ。厨房を使えさせてもらえないかと交渉に行ってただけだ」

「それで結果は？」

「二つ返事で了承してくれた」

「つつことはだ…。 テメエが料理を作るってことか？」

「ああ… ルイズの魔法も今日中には形になるだろう…。 故に少しでも祝ってやろうと思ってな」

そうなのだ。

目の前ではルイズがコモン・マジックの念力の練習をしている。

3日前に始めたばかりなのだが、凄まじいスピードで成長している。見学しているコルベール教諭にキュルケ、大豆をポリポリ食べているタバサも驚いているようだ。いや、タバサはよく解らない。

3日前は宙に浮き、2日前は5 سانت程度移動した、そして昨日は半分まで移動した。

そして、現時点で1マイル離れた円まで2/3程度まで移動している。

「天才か…」

「エミヤ？」

「いや何…少し羨ましくてな」

彼の目には自らのマスターの成長を喜ぶモノと、マスターの才能の高さに羨望するものがあつた。

だが、嫉妬染みたものはなかつた。

「俺から見れば、テメエも十分反則だと思うがな」

「ランサー…」

「まあな…、数多の宝具を操り、相手の弱点を的確につける大禁呪…。一生をかけてもたどり着けない魔術師が大半だというのに、貴様がそんなことを言えば、凜辺りがキレルんじゃないか？」

「いや、貴様が一番反則だ」

「違うない」

エミヤの物言いにケラケラと笑うクー…。

失礼な、俺は万華鏡や青子ほど規格外ではない…つもりだ。  
何故なら、俺には月を打ち返すことも出来んし、なのはクラスの収束砲を機関銃の如く撃ち放つこともできん。

「お…」

「ああ…もう少しだ」

ルイズを見ると円まで後、数サントまで近づいた。

それを見て、コルベール教諭もキュルケも驚いているようだ。

「ちょっと、ルイズ！ もう少しよ…」

「わ、わかってるわよ…」

「ミス・ヴァリエール、頑張ってください…」

「は、はい！」

いい返事だ…。

もう少しだ…もう少しでコントロールが完全なモノとなる。  
つまりはイメージが完璧に成るということだ。

「ルイズ…」

「……………」

「想像しろ…」

想像…。

「思い描くは成功した姿のみ」

成功した姿だけ…。

「他には何もいらなし、必要もない」

ただ一つだけ…。

「清水の如きオドを流し込め…」

その先は杖の先…。

「見えた…！」

杖が振るわれると、小石は静かに宙に浮きフワフワとゆっくり円に

向かっていく。

10セント…30セント…60セント…90セント…あの少し。

「（ルイズ頑張ってる！）」

「（ミス・ヴァリエール…踏ん張りどころだ）」

そして、小石は白線の上を越えて、円の中心部に静かに落下した。

「で…」

「で…」

ああ…よくやったルイズ。

「出来たあああああ…！！！！」

ルイズとキュルケはお互いに抱き合い喜び合っている。

キュルケの喜びようはまるで自分のことのようにだ。

少し前までこんな姿は想像出来もしないだろう。

時間は昨日の夕方…同じ場所で魔法の練習をしていた時まで遡る。

『なんで上手くないかないのよ！』

ルイズは焦っていた。

練習を始めてから、まだ2日しか経っていなかった中でこれほどの

成長スピードは喜ぶものであって、決して憤る理由にはならない。

『マスター…焦る必要は無い。間違いない君は成長している』

『そうだぜ？ まだ、2日だ…焦ることあねえよ』

『で、でも…』

『ルイズ…少し休憩しよう。 マルトーさんに頼んで軽食を作ってもらった』

元は素直に頷くルイズを見てどうするべきか悩んでいた。成長スピードは凄まじく、結果も目に見えている。

しかし、見えているからこそその後少しが焦れたいのだ。恐らく、今のルイズには10サントが1リーグに見えているのだろう。

『ルイズ…』

『……』

『ねえ、ルイズったら！』

『何よ！ って言うか何でアンタが此処にいるのよ！』

練習が始まってからずっと一緒にいるキュルケに自らの苛立ちをぶつける。

『な、何よ…上手くないからって、私に当たらないでよ…』

正に険悪なムードである。

しかし、タバサは俺が言った通り素直に大豆をポリポリ食べている。

『じ、じのー』

『…！』

杖を振るおうとするルイズの手を叩き、杖をたたき落とす。それに元を苛立ちを込めた目で睨む。

『な、なにすんのよ！』

『……』

パチンと綺麗な肌を叩く音が広場に鳴り響いた。ルイズは一体何があったのか、一瞬理解できないように惚けていた。キュルケは使い魔という立場の俺が主を殴ったことに、コルベールは平民が貴族を殴ったことに驚いているようだ。

『俺は君に人を傷つける為に魔法を教えている訳じゃない』

『……』

『俺は君が学院に入る前からゼロと呼ばれていることを風の噂で聞いていた。それでも心折れず、勉学に励んできた君だからこそ魔法を教えたのだ』

『……』

『それなのに、君は自分を心配してくれている友人に当り散らし、』



魔法を使おうとした…。確かに俺達の前で使用しているから、その文句はない。だが、君の杖は誰に向けていた？ 君は今まで自らの魔法が小石を粉々に爆発させていたのを見てなかったのか？』

『…！』

『想像しろ…もし、君がキュルケに向かって魔法を使ったときの結果を』

ルイズは考えたくは無かったが、元に言われて無理やりにも思い浮かべてしまった。

褐色の肌の少女の頭が粉々に飛び散り、脳髄だったものが自分の顔に付着し、少女は首元から血の噴水を上げて、倒れ込む。

恐怖と罪悪感で彼女の体はプルプルと震えている。  
理解したようだ。

『ハルキゲニアでは余りに神秘が日常と化している…だから、その危険性を理解してなかった』

『マスター…。私たちはこことは違う場所から呼び出されてのは知っているな？』

『え…』

いきなり、エミヤが言い出したことの意図が読めず、ルイズは聞き返してしまった。

『私たちが生きていた場所では神秘は隠匿されていた…それが何故か解るか？ 危険だからだ…神秘は時として、命を軽くする』

『…………』

『私たちが扱うモノは魔法ではなく魔術というもので、俺が師匠に最初に言われたことは一つだった』

魔術は死を受け入れることから始まる

『え？』

『ミスタ…死を受け入れるとは？』

『魔術というものは、少しでも失敗すれば自らの命を落とす危険性がある』

『それだけではない。身に過ぎた魔術の行使は死に直結する。それは自分たちだけではなく、隣の親しい人間にもその危険が及ぶ…君には理解できるか？ 10年近く死と隣合せになりながら、体中を殴られ、針で刺されるような行為を毎日繰り返してきた人間を』

『『『…………』』』

魔術というものはそういうものなのだ。

才能なき人間が愚直に毎日を突き進んだ。

己の魔術の異常性に誰も気づいてくれず、只毎日それだけを繰り返す。

『今の君には俺達がいる。そして、心配してくれる友がいる…なのに何故焦る必要がある？』

『うっ…』

『家が仇敵同士だから、それを永遠に続けるのか？ 憎しみを抱き疲れるのは疲れるぞ…』

『…！』

『…』

『心が削られ、体が悲鳴を上げ、そしてそんな一生で人生を終える…。 どれだけ、非生産的か…』

前に進め。

親の間違いを子供が背負う必要は無い。

むしろ、正すんだ…それが子供の役割だ。

『ごめんなさい…』

『それは俺に言う言葉じゃないぞ？』

ルイズは目に涙を貯めながら、キュルケに向き合い、静かに頭を下げる。

『ごめんなさい…』

だが、それをキュルケは優しく抱きしめる。

ルイズは目を丸くして、キュルケを見つめる…その時の彼女の顔は慈愛に満ちていて、今まで見た誰よりも優しさに満ちていた。

『私こそゴメンね…』

『うう…う、ううう…』

静かに涙を流す彼女を大人たちは静かに見つめ、タバサは何かを思い悩んでいた。

憎しみを抱き疲れるのは疲れる…そんなことを心の中で反芻しながら…。

そんなこんなで、彼女たちの仲は一気に縮まった。

お互いに抱き合いながら、喜びを分かち合う彼女達の姿は少し前からは考えられない程…仲の良い友人同士に見えた。

ふと視線をずらせば、タバサはそんな彼女たちを見ながら黙々と大豆を食べ続けている。

「美味いか？」

「ユニーク」

それは違う人だと思っぞ？

「それじゃあ、ルイズの魔法成功を祝って祝杯でもあげようか」

「え…いいの？」

何を言っているんだ…といったような表情で元達はルイズを見る。  
当たり前だろ？

嬉しいこと、目出度いことがあれば、祝う。

そういう当たりまでの事が大切なんだと思う。

これも、俺が長い旅の中で見つけた一つの答えだ。

「それでは、私は厨房で料理の用意をしてきましょう」

「なら、俺は森で一つ狩ってくるか…」

「でかいのを頼むぞ？」

「誰に言ってやがる！」

そう言って、ランサーは凄まじい速度で学院から走り去り、エミヤは厨房に向かった。

「ミスタ・コルベールも参加してください。 勿論、キュルケとタバサもな」

「いいんですか？」

「いいの？」

「……」

「勿論だ。 ミスタ・コルベールはルイズの成功を喜んでくれた。 キュルケはルイズを支えてくれた。 タバサは大豆を食べながら見守っていた」

最後はどうかと思うが、祝うなら人数は沢山いたほうが良いだろう。だが、このメンバー以外で純粹に喜んでくれそうな人間を知らない……。  
あつ……まだいた。

「オスマンにも知らせておこう……」

「え!？」

「あいつも君のことを祝ってくれる……きっと喜んでくれるぞ」

「う、うん!」

ルイズも本当に嬉しそうだな。

この顔を見ただけでも、魔法を教えた甲斐があったな。

こんなに心温まった気持ちになったのは、この世界で初めてだろう。

ああ……今日の酒は旨そうだ……。

シエスタ辺りにも伝えておくか……。

急ぎ、学園長室まで走った。

「オスマン」

「ほっ、なんじゃシンドウか。そんなに急いでどうしたんじゃ？」

「一つ大変な事が起きた」

「なんじゃ、もしや…」

「元よ…」

それではオスマンにいらん心配をかけるぞ。  
まあ、分かってやっているのだろうな。

「ルイズが魔法を成功させた」

「はい？」

「ルイズがコモン・マジックを成功させた！」

「な、なんじゃとおおお！！」

そりゃあ、驚くだろうな。

今までどんな教師も匙を投げてきた、正しく導くことが出来なかったルイズが魔法を成功させたのだ。

オスマンの人柄は昔から知っている。

普段は女の尻ばかりを追っているようなエロ爺だが、生徒思いで平民、貴族関係無く手を差し伸べられる器量を持った人間だというこ

とを…。

「そ、そうか…本当に良かった…」

「それで、今夜食堂で祝杯を上げる予定だ…。 お前も参加しないか？」

「勿論じゃ！ 秘蔵のワインを持っていこうぞ！」

「気前が良いな…なら、俺も最高の酒を創ろう」

「日本酒と言ったかの？ あれがまた飲めるのか…」

オスマンは30年前に日本酒を飲んでいる。

その時に、いたく味を気に入った。

「ちょっと、早すぎるわよ！」

そこにようやく追いついたルイズが息を切らしながら、学院長室に入ってきた。

「ほっ、ミス・ヴァリエール。 おめでとっ」

「あ、有難うございます！」

オスマンは本当に嬉しいのだろう…。

その顔はデレ下がつている。

「出来れば、早速魔法をみせてほしいんじゃが」



「あ、はい！」

オスマンはいらなくなった紙くずを小さく丸め、机の上に置いた。ルイズは深呼吸してから、杖を振るい念力を発動させる。紙くずは静かに宙に浮かび、フラフラしながらもちやんとゴミ箱に収まった。

「…確かに、念力が働いておる」

「だから言つたる？　だが、ルイズは天才だ…まさか、俺達の指導が始まつて3日で成功させるとは思いもせなんだ」

「デヘデヘ…」

「流石はシンドウじやの…いや、エミヤ殿とクー殿も手伝つたのかの？」

「コルベール教諭とキュルケ、タバサもだがな」

「キュルケ…ツエルプストー家のじゃつたか？」

オスマンはまさか、ツエルプストーの人間がヴァリエールの人間に手を貸すなど思いもしてなかつたのか、ルイズが魔法を成功させたという事実以上に驚いているようだ。

「キュルケは私の大切な友人です！」

「ほっ…」

それをルイズの声から直接聞いて、顔を驚嘆のソレにしたが、それ

は直ぐに何とも言えない嬉しさに満ちたモノになった。

「そうか…ミス・ヴァリエールは良い友人に恵まれたのじゃな」

「はい！」

今なら胸を張って言える。

いつも馬鹿にするような事を言ってきたけど、キュルケくらいだった。

いつも私にかまってくれたのは…。

魔法が失敗するたびに周りからは人が離れていった。

だけど、キュルケは違った。

魔法の失敗に限らず、彼女はいつも私の周りにいた。

胸の大きさを言ってきたり、ゼロと言ったり、お子ちゃまと言ってきたり…。

あれ？

何だか、馬鹿にされた記憶しかない。

「……………」

だけど、あの時優しく抱きしめてくれた。

もう少しで、キュルケを殺してしまうところだった…なのに、文句一つ言わないで、抱きしめて…。

誤ってくれた…。

「キュルケは私の友達です」

だから、そんな彼女に負けなくらい胸を張ろう。

家の柵を越えた二人の少女…目の前の少女に…。

そんなルイズの姿に元とオスマンは喜びを感じていた。

「それで一体どうやったんじゃ？」

学院長室にはオスマンと元の二人しかいない。  
オスマンは念のため、この部屋にサイレントとロックをかけた。

「ルイズが失敗してきた理由は彼女の系統と魔力の大きさが原因だ」  
「系統じゃと？ 確かにミス・ヴァリエールの精神力：魔力は膨大じゃ。それこそ並のメイジなど比べるのもおかしく感じるほどの。じゃが、系統というのは？」

「彼女は虚無の担い手だ」

「なんじゃと!?!」

恐らくは今日一番の驚きだろう。

サイレントとロックをかけておいて正解だったな。

「間違いない…証拠として、俺とエミヤ、クーの左手にはガンダールヴのルーンが刻まれている。それに爆発も一つの虚無の形だろう」

「ガンダールヴ…。それはわからんでもない…じゃが、爆発が虚無というのは一体?」

「覚えているか? 英霊には大抵の魔術はキャンセルされると…それこそ、アルトリアにはスクウェアクラスの魔法ですら傷一つ付かなかったことを」

「…微かにじゃが」

「だが、ルイズの爆発はクーの対魔力をキャンセルし、ダメージを与えた…。虚無は全てをゼロに化す」

「…成程の。ミス・ヴァリエールは真正銘の“ゼロ”の二つ名の持ち主じゃったのだな」

そして、これが意味することは…。

「王宮には知らせられんな」

「全くだ。マザリーニがいるとしても、質が落ちた王宮などにルイズの存在が知られれば、戦争の正当化に使われることは必然だ」

「間違いなく、ゲルマニアあたりの戦争に道具として投入されるじやろうな」

それはキュルケの祖国である。

やっと、家の柵を乗り越えて友人同士になれた彼女たちを泣かせるような真似など出来ん。

「俺が周りに虚無だと悟らせぬようする。それに例えバレたとしても、王宮に殴り込む…マザリーニやマリアンヌ、古参の貴族ならば俺の言うことも少しは聞くだろう」

「うぬ…迷惑かけるの」

「気にするな…仮りにも俺の主だ。あと、このことはオスマンと俺しか知らん…情報の方だけを気をつけてくれ」

「承知した…いやはや、きな臭くなってきたの。これが調整者の仕事になるのかの？」

その問いに俺は曖昧に応え、苦笑する。

そして、部屋を出ていく際に…。

「だが、今夜は目出度い宴だ…しっかり楽しめよ？」

「もちろんじゃよ」

そうだ…今はまだ、楽しもう…この時を。

みんながお祝いをしてくれた。

と言っても、使い魔の3人とキュルケ、タバサ、ミスタ・コルベール、オールド・オスマン…そして、シエスタっていうメイドの子。

料理はとても美味しかった。

いつも食べている料理も美味しかったけど、この料理からはエミヤの優しさが物凄く感じられた。

そして、クーがバカみたくデカイクマと猪を一頭ずつ背負って来たときは驚いた。

そして、それを見事に一瞬で捌いたハジメにも…。

そして、オールド・オスマンは秘蔵のワインを持ってきてくれた。とても美味しくて沢山飲んじやったけど、オールド・オスマンは嫌な顔一つせず笑っていた。

そして、ハジメもニホンシユっていう故郷のお酒を持ってきてくれた。

ワインとはまた違う味わいで、何だろう…水みたいに喉をスウーと流れていった。

驚いた、こんなお酒があるのかと…。

とても美味しかった…、下手をしたら際限なく飲んでしまいそうだ。そして男性陣は、これまたハジメが用意したスルメっていうお酒の肴を食べながらニホンシユを楽しんでいた。

ミスタ・コルベールはいつも私を見守っていてくれた。

変人って言われている彼は、平民と貴族を余り差別しないし、よく解らない発明品を作ることでも有名だった。

今日もお祝いだと言って、くれた何だか解らない物…。

だけど、ハジメとエミヤ、クーは凄く驚いていた…。

エンジンって何だろう？

シエスタって子は、出来上がった料理を食べたそうに運んでいた。

だから、食べても良いわよって言ったら、凄い頭を下げながらお礼を言われた。

それは普段、平民が貴族に対する恐怖から来るものではなくて、感謝の意を伝えるものだった。

お礼を言われるって、こんなにも嬉しい気持ちになれるんだ…。

あと、タバサだ。

あの子はいつも何を考えているのか解らない。

今日も特に何をするでもなく、大豆をポリポリ食べながら私の魔法の練習を見ているだけだった。

キュルケとタバサは私が初めて見た時から友人同士になった。

こつもベクトルが違うのに、何でこんなに仲がいいんだろう？

今も、タバサはハシバミ草をモシヤモシヤ食べながら、大豆をポリポリ食べている。

本当に不思議な子だ。

そして、キュルケだ。

私の家のヴァリエール家とキュルケのツエルプストーには因縁がある。

お互いの領地が国境を挟んで、隣同士になっている。

だから、戦争が始めればまっさきに殺し合う間柄だ。

勿論、お互いに死んでいく人達がいて、悲しむ人がいる。

そんな簡単なことも少し前までは解らなかった。

そして、ツエルプストーの人間にはヴァリエール家の歴代の領主の恋人が寝取られているのだ。

だけど、それは私が顔を見たこともないくらい昔のことだ。

なら、私たちには関係が無いのだ。

確かに、男に見境なく腰を振る様は見ていて不快だったけど、ハジメに諭されてからは、貞操の危機を感じたのか、そんなことは無くなった。

あれ？

思い出し見れば、全部ハジメ達が来てから変わったんだ。

魔法が使えるようになったのも、キュルケとタバサという友達が出来たのも、全部ハジメとエミヤ、クーが来てからだ。

最初は平民の癖に生意気だと思ったけど…。

本当は優しく、強くて、困ったことが有ったら相談に乗ってくれて、間違っただけをしたら叱ってくれて、優しい笑顔で頭を撫でて



くれた。

魔法が使えるのに、決して威張らない。

いつも堂々としているのは、どんな事にも揺るがない絶対の自分を  
持っているからだろう。

いつか、私もハジメ達に…こんな素晴らしい使い魔達に負けないよ  
うに頑張らなきゃ！

## 第10話 とらぶる？ トラブルです

私は宴が終わった後、直ぐに部屋に戻り家に向けて手紙を書いた。

拝啓

うららかな季節を迎え、春の召喚の儀も無事に終えることができませんでした。

お父様、お母様、お姉様達は如何お過ごしでしょうか。

私は1年時にもまして、勉学励んでいます。

今回は是非お知らせしたい事があり、こうしてお手紙を出す事にいたしました。

使い魔召喚の時に、私は3人の人間を召喚しました。

名前はエミヤ、クー、そしてハジメです。

彼らは魔法の知識も豊富で様々な魔法を使える程のメイジのようです。

そして魔法だけではなく、其々が様々な分野の知識を有しており、私はとても助けられています。

使い魔の一人であるハジメが魔法の失敗際に起こる爆発と何故魔法が使えない、と言うことを耳にした際には、その原因を掴むために魔法を成功させる為の訓練をしてくれました。

そして、原因の一つを掴んでくれました。

そのおかげで訓練から数日した本日、とうとうコモン・マジックを使えるようになりました。

そして、ハジメやエミヤ、クーのおかげで友達もできました。

そのお友達とハジメ達は、私の魔法の成功を自分の事のように喜んでくれました。

自分の事のように喜んでくれて、私の魔法成功の祝杯として友達や先生を誘ってくれて、皆でお祝いしてくれました。

凄く嬉しかったです。

つい嬉しくて、沢山泣いちゃいましたが…。

ハジメやエミヤ、クーは今まで学院や誰もが考え付きもなかった訓練方法と基本魔法知識を持っており、彼らは私には素晴らしい才能があると言ってくれています。

何れは誰もが知るメイジになれる…と励ましてくれています。

私ももっと魔法が使えるよう、正しく魔法が使えるような貴族になるために頑張っていきます。

お父様達もお体には気をつけてくださいね。

敬具      ルイズ

こんな感じでいいかな…。

私は最高に気分がいい状態のまま、着替えを終えてベッドに潜り込んだ。

明日も頑張ろう…。

ルイズがコモン・マジックが使えるようになり、数人だけの宴を向かえ少女達は眠りに入った深夜、大人たちは特製の浴場で月見酒を楽しんでいる。

「ミス・ヴァリエールのあんなに嬉しそうな顔は初めて見ました。本当にミスタ達にはどれだけ感謝してもし足りません」

コルベールは、純粹にそう思っていた。自分たち教師がすべき事が出来ず、匙を投げる事しか出来なかった事をしてくれた。それは魔法を師事するものとしては無能の烙印を押された事と同意義なのだが、それを理解しながらも感謝できるだけの器量を持っている事にもなる。

「マスターの手助けをすることも私達の役目なのでな、貴方がそんなに感謝する必要はない」

「そういう事だ…、あんま気にすんなよ」

エミヤとクーはさもその行為が当たり前の様に言ったため、コルベールはそれ以上言葉を紡ぐ事が出来なかった。

それ以上感謝の言葉を連ねるということは、彼らに要らぬモノをかける事になる事を理解していたため、心の中で感謝の言葉を紡ぎ続けていた。

「それに…、私たちはマスターの手助けしかしていない。本当に感謝すべきなのは彼女の心を救ったキュルケだろう」

俺もそう思う。

家の柵を越えて、ルイズに優しさを注いでくれた…。

現代社会に置ける風潮から見れば、それは容易だろうが、ここハルキゲニアにおいてはとても難しいことである。

現在のハルキゲニアは現代社会から見れば、とても生き辛く感じるだろう。

「本当にお…。最初聞いたときは俺もとうとう耳が可笑しくなつたかと思つたもんじゃ」

「なあ…、ヴァリエールとツエルプストーの家ってのはそんなに仲が悪いのか？」

「クーとエミヤは知らないだろうが、両家はトリスティンとゲルマニアという両国の国境を挟んで隣同士なのさ…。そして…」

帝政ゲルマニアの建国への経緯は、貴族達が利害関係の上で寄り集まって出来たという国である。

そのため、皇帝に対する忠誠心はあまり高くなく、皇家が始祖の血を引いていないため、ハルケギニアの他国の王よりも格下に見られ

ている。

さらに社会風習や政治制度も他国とは一線を画している。魔法が使えない…メイジではない平民でも資金さえあれば、領地を買い取って貴族になることができるのだ。

「これはハルキゲニアの諸国から見れば、野蛮なのだ」

「野蛮とは？」

「貴族とは始祖の血を引いた尊い存在であり、故に魔法を使える存在は使えない…始祖の血を引いていない人間よりも尊重されるといふ考えの下にハルキゲニアの諸国の貴族は盲信している。だから、始祖の血を引いていない人間が国を担う、貴族を語るなど愚か者のすることだと信じきっているのだ」

「…下らない」

「ですが多くの…大半の貴族はそう思っております。だから、平民は物として扱われております」

「…たく…。平民居てこそその貴族だろうが」

「ランサー…君が言うと言説力があるな」

「茶化すな」

だからこそ、そんな家、国、風潮を越えて友を名乗るルイズとキュルケの存在は尊いのだ。

「だが、私もマスターとキュルケが友人関係を結ぶとは思わなかつ

た」

「何故です？」

「そう言った風潮を無視して…、彼女は何というか…好色だろ？  
見る限りマスターはそう言った人間が苦手だと思っただが…」

「残念ながらエミヤ…。それも風潮なんだよ」

ゲルマニアは恋愛に関しては積極的にアプローチするのが当然…と  
いう風潮がある。

憤り深いとされるトリステインの人間にとってはそれが不快に感じ  
るのだ。

「ゲルマニア人は好色で多情…などと言われてる位だしな」

「何つうか、ゲルマニアの方が時代の先を行ってる気がするな」

「それは否定できんのお…。金さえ有れば貴族になれる故、どう  
しようも無い愚か者が政治に絡む可能性も出てくるが、魔法も無く  
それだけの資金を用意できる人間が無能である可能性は殆どないか  
らのお…。あの国は政治に魔法は必要ないと理解出来とる」

「ハイ。それに比べ、ここトリステインでは血こそが最上位に位  
置しています。貴族の家系であれば、余程の悪行をしない限り御  
家潰しにもなりませんから、努力を怠りません」

「だからこそ、王宮でも汚職と賄賂の温床になる。恐ろしいと思  
わないか？ 無能で愚行しか出来ん人間が政治の中心となる…」

実際、本当に怖い。  
善政も出来ず、搾取と悪政の繰り返し、発展も無く、維持も無い。  
あるのは衰退だけ。  
例え、平民たちが立ち上がろうとすれば、量的質的に戦闘能力の勝るメイジ達が勝つのが目に見えている。  
そして、敗者には死。  
死なないとしても、後に待っていることは……。

「「はあ……」」

「トリステインに住む人間としてお恥ずかしい限りじゃ」

「とても、他の貴族の方々には聞かせられない内容でしたね」

「だが……。得るものもあった」

コルベール教諭のように良識をもつ人間がまだいた事。  
そして、30年前よりも更に悪化していること……。

「上がるつ……。これ以上はのぼせてしまう」

「そうですね。ですが、本当にいいお湯でした」

「それは何よりです……。コルベール教諭」



コルベール教諭とオスマンが自分の部屋に戻っていく中、エミヤが話かけてきた。

「それでなんだが、今日は私と交換してくれないか？」

交換とは部屋のことである。

先日はクーがルイズの寝相の悪さに耐えられず、懇願してきた。そして、今夜はエミヤである。

「構わんが……」

確かに、酷かった。

あの部屋にはベッドは一つしかないため、使い魔とは言え男女が一つのベッドで寝るわけにもいかず、俺達は床でなる訳なのだ……。逐一、襲撃される。

ベッドの上から、転げ落ち鳩尾にかかと落とし。

寝ぼけ半分で歩き回り、ジャーマンスーププレックス。

正直有り得ないような技の数々を食らう。

しかも、本人には全く自覚が無く、技のキレも素晴らしく恐ろしいのだ。

エミヤは嬉々として、俺が借り受けた部屋へと向かい。

クーと俺は沈痛な想いを抱きながら、ルイズの寝ているだろう部屋へと向かった。

既に時間は遅く、夜の半分も終わっている。

宿舎は沈黙で包まれており、生徒達は深い眠りについている。

それは、宴に参加していたキュルケとタバサも夢の中だろう…その夢が本人達にとって、ソレが暖かく心地よいモノであろうと祈りながら。

「にゅ…」

部屋に入ると、ルイズが訳の解らない寝言を言いながら、気持ちよさそうに寝ている。

……涎が酷いとだけ言っておこう。

「それじゃ、クー…今日はお疲れさん」

「はいよ。今夜は静かに眠れたら良いがな…」

お互いに横になり、直ぐにクーから静かな寝息が立てられた。

他人の寝息を聞いていると意図せず、睡魔ヒトが襲ってくるものだ。

だが、今の時間は眠るべき時間帯であるため、ソレを大人しく受け入れることにした。

どれだけの時間が経ったのだろうか。  
部屋の中は、静かな寝息だけで包まれていた。  
一つ壁の向こうの空は未だ闇に包まれており、二つの月が地面を優しく照らしている。

「グフウ…！」

だが、そんな静かな眠りの夜を壊すものがいた。  
本日の主役であったルイズである。  
彼女は寝ぼけ半分でベッドから立ち上がり、床で寝ていた元の鳩尾を思いつきり踏みしだいた。

「ル、ルイズウ…！」

「…うにゅ」

無理やり起こされた苛立ちよりも、鳩尾を加減なく踏まれたことによる痛みと酸素が供給されない苦しみが勝った。  
だが、そんな彼の苦しみは彼女にもランサーにも伝わりはしなかった。

何故なら、ソレは余りにも静かに行われたからだ。  
殺気も悪意も何もない…虚無によって行われた。

「……」

「寝惚けているのか…？」

ルイズは何かをブツブツ言いながら、フラフラしている。

一瞬、怖い光景かと元は思ったがどうやら違うようだ。

「な、何を…?」

元はルイズの口元に耳を寄せ、その小さな声を聞き取るつとす。だが、それが惨劇の本当の始まりだった。

「…トイレ」

「はい?」

ルイズはフラフラしながら、自らの寝巻きであるネグリジエの下にある下着に手をかけようとしている。

「…!!」

元は下着に手をかけているルイズの手を叩き落とし、小さな身体を抱え込んで部屋から飛び出した。行き先は隣の部屋である。

「キュ、キュルケ!!」

扉をドンドンと叩き、唯一の望みである彼女を起こそうとする。

その音は恐らく宿舎に響き渡っているのだが、多くの生徒たちはサイレントで静かな安眠の中にいる。

キュルケがサイレントをかけていれば、全ては終わりである。

「なによあ…」

だが、流石は頼りになる女キュルケである。

サイレントはかけていなかったようで、瞼を擦りながらドアを開けてくれた。  
ルイズと同じようにネグリジェを着ている彼女の姿は多くの男を魅了するに相応しいものだろう。

少女から女になったその姿はスタイルの良さと色気も相まって実に魅力的なのだが、彼にはソレに構っている余裕は無かった。

「あら？ ハジメじゃない、どうしたの？」

夜這いをかけてくるような男性では無いことを知っていたキュルケは何故、彼がこの場にいるのか解らなかったようで、疑問符を浮かべていた。

だが、事態は切迫している。

元は自らの後ろでフラフラしているルイズの頭をガシリと掴み、キュルケの顔の前まで持つてくる。

よほど使い魔の所業ではないのだが、彼には関係がなかったし、気にする余裕もなかった。

「トイレ」

「…え？」

元に掴まれている事で宙でプラプラしている彼女は寝ぼけ半分で一言それだけを言う。

だが、少女の手は自らの下着に伸びており、ソレを見たキュルケは一気に顔を青ざめていく。

「な、何なのよお〜！〜！」

「スマン〜！」

ルイズを抱えながら、キュルケと共に共同トイレへと走りだす。  
キュルケは不満を叫びながら、元は謝りながら走っている。

……。

「「はあ……」」

見事、ルイズをトイレに叩き込み、用を終わらせた彼と彼女はため息を漏らしながらルイズの部屋に原因を寝かせる。

「こっちの気も知らずにこの子は……」

「スマン……」

ベッドで気持ちよさそうに涎を垂らし、寝息を漏らす少女に思いっきりため息が漏れる。

そんな少女の姿を見ると、中途半端に起こされた事と疲れが相まって睡魔が猛突撃をしてくる。

だが、無性に腹が立ってきた。

視線をずらすと気持ちよさそうに寝ているランサーの存在に気がついた元は……。

「フン！」

「ぎゃああああ……！」

鳩尾を思いつ切り力の限り、踏みつけた。

その痛みで彼は眠りを覚ますことなく、口から泡を吹き出しながら

気絶した。

「ふああ〜」

気持ちのいい朝だ。

何となく昨夜は騒がしかった気もするけど、気のせいだと思う。

宴のままのテンションを朝まで持ってきたように気持ちのいい朝を迎えた少女はベッドから、体を起こし大きく背筋を伸ばす。

「…え？」

視線をずらすと、ベッドにしなだれかかり気絶するように寝ている自らの使い魔と友人の姿に疑問符を浮かべる。更には床で口から泡を吹き出しながら本当に気絶している使い魔もいる。

「な、なんで？」

お前が原因だよ…。

ベッドの上で状況が飲み込めず、アタフタしている姿を見れば、恐らく夢の中で元とキュルケはツツコミを入れているだろう…。



## 第11話 シエスタの疑問

慌ただしい朝を迎え、元達は朝食を取るために食堂へ向かっている。太陽は今日も元気よく働き風が優しく吹きいく、清々しい空気の中、元とキュルケはため息を漏らしながら、歩いている。

エミヤはルイズの寝相の悪さが隣の部屋まで及んだのかと、正しく理解したのか苦笑しながらそんな2人の後ろ姿を見つめる。

ルイズはルイズでなんで2人がそんなに疲れているのか未だに解らないようで、首を傾げている。

無知とは罪である…。

何故、2人がルイズに事情を説明しないのかというと、説明したところで本人の無自覚が治るなどとは思っていないからである。自覚が無い…と書いて無自覚である。

使い魔として召喚されて今日で丁度一週間となった。

既に日課となった、ルイズの衣服の洗濯も滞りなく終わらし、一同は食堂を越えた所にある厨房で朝食をとる。

そして、この場にはクーがいない。

何故、居ないのかというと…未だに絶賛気絶中である。

余程元の一撃が効いたのか、それとも受肉した身ゆえにご臨終したのかは定かではないが、ルイズの部屋にいるのは確かである。

「昨日は厨房を使わせていただき…」

朝食を終えた一同の視界に入るのは、マルトーに昨晚の礼を言っているエミヤの姿である。

聞くと、どうやら彼はその礼をしたいと言っているようである。

そんな中、ようやく復活したのか、クーが厨房に鳩尾をさすりながら入ってきた。

事情の知らない人間が見れば、余程お腹が空いたと思うだろうが実際は違う。

未だに、痛みを患っているのだ。

だが、事情を理解していない人間から見れば先にも述べたとおり、空腹なのだと見えてしまう。

既に食事の時間は終わっており、テーブルの上は綺麗に片付けられている。

だからだろうか、タバサは自身が食べている（まだ食べているのか）大豆の袋をひと袋を彼に渡し、新しい袋をマントの中から取り出し食べ始める。

そんな光景に元とキュルケは笑い合い、クーは人懐っこい笑みでタバサに礼を言っている。

そんな、平和を感じさせる朝の一幕であった。

午前中のルイズは実に余裕に満ち溢れえいた。

コモン・マジックを成功させたという自信から来るものからか、相も変わらず彼女をゼロと馬鹿にする輩の罵声を優雅に受け流す。

そんな姿に周りの生徒たちは惚けたり、驚いたり様々なリアクションの形を見せている。

午前中の授業も終わり、生徒たちは広場でティータイムを楽しんでいる。

使い魔の獣たちや幻獣たちも日向ごっこをしたり、昼寝をしたりと思い思いに過ごしている。

そんな中、元の視界には二頭の風竜の姉妹が目に入った。

彼女たちも仲良く日向ごっこを楽しんでいるようで、そんな姿に元は頬を緩める。

だが、いつもとは違う光景がそこにはあった。

一つは、一つのテーブルを囲むグループである。

構成として、ルイズ、キュルケ、タバサ、そして元である。

周りの生徒たち（貴族）から見れば、その光景は実に可笑しく感じられるだろう。

何故なら、ルイズとキュルケの家は仲が物凄く悪く、本人同士も仲が悪いと思っっているからだ。

だが、現実として目の前に広がっている光景は…。

「ねえ、ルイズ。少しは豊胸マツサージは効いてるの?」

「ふん! も、もも勿論よ! この前測ったら、2 سانت大きくなっていたもの」

「ふん…、でも見た感じあんまり変わってない様に見えるけど?」

「見てなさい…アンタなんか直ぐに追い越してやるんだか」

「期待しないで待ってるわ」

などと男性には耳が痛い内容ではあるが、その光景は仲の良い友人同士のものに見える。

タバサなんか、胸というワードが出るたびに身体をピクリと震わせながら、大豆をポリポリ食べ、本を呼んでいる。

そして、使い魔は苦笑しながら紅茶の味に舌つつみをうっている。

「流石はエミヤだな…いい香りだ」

「クツ…、お褒めに頂き光栄だ」

「っていつか、何でテメエーは手伝わねえで休んでるんだ」

可笑しな光景二つ目、ルイズの使い魔が貴族に混じって紅茶を飲んでいる。

そして、残り2人の使い魔が給仕をしている。

前者は、ハッキリ言って貴族にとって気に食わないものだった。

平民風情が…なんて、口節に周りから聞こえるが本人は我関せずで

ある。

同席しているキュルケたちにも不満があるようには見られなかったため、周りの貴族（男）は文句の一つも言えなかった。そして後者は、実に似合っていた。

特に褐色の肌と白髪 of 男のいれる紅茶の香りは実に素晴らしかった。そして、青髪の男は女生徒に対しては素晴らしい所作でケーキを運ん行く。

時折、甘い言葉を吐く彼の姿にウツトリする女生徒を見て、生徒（男）の多くは地面に唾をはきかけた。

「俺は厨房の方々には別の形でお礼をしたからな」

「別の形だあ？」

「日本酒」

「魔法使いの言葉とは思えねえ」

「クツ…」

「そう言えば、ハジメ？」

キュルケは自らが座っていた椅子を隣に座っている元の近くまで近づけ、密着させるようにして、言葉を紡ぐ。

だが、元は全く気にならないようで平然としており、その姿が余計に周りの生徒（男）を苛立たせた。

「どうした？」

「あのお酒はどこで買ってきたの？ 凄く美味しかったわ」

「そうね…ニホンシユって言ったっけ？」

「それは何よりだ」

ルイズも自らの使い魔に色目を使うキュルケに不快に感じながらもその意見には同意した。

ワインのような香りも後味も無い…だけど、水のような喉越しと綺麗な味わいを持った…何というかスマートって言葉が一番合いそうなお酒だった。

「あれは俺とエミヤの故郷の酒でな…ここハルキゲニアでは売っていない」

「なら、どうやって手に入れたの？」

「秘密だ…と言っても、また飲みたいなら言ってくれ。 晩の謝罪と礼を込めて贈らせて貰うよ」

「あら、ありがとう。 …でも、女性に手酌させるつもり？」

「その時は付き合っさ、最も俺では物足りんかも知れんがな」

「そんな事ないわよ？」

「ちよつと！ 私も入れなさいよ！」

何というか、実に微笑ましい光景である。

放置されたことに凄むルイズを優しく宥めるキュルケとルイズの頭

をポンポンと優しくなげる元…一瞬、長年連れ添った夫婦と娘の様に見えてしまった。

そして、何故かキュルケの胸を凝視しながら大豆を食べるタバサ。その姿も大きい胸をうらやむ娘にも見える…。

その場にいた生徒（男）達の限界もそろそろだった…。

「昨日は御馳走までしていただいたのに、お手伝いまでしていただいて…」

銀のトレイに並べられたケーキをシエスタと一緒にテーブルに配っていく。

「いや、これは私のケジメなのだ」

シエスタは畏っているが、エミヤにとっては当たり前のことなのだ。そもそも、厨房を貸してもらえなくては昨晚の料理を作ることは出来なかったのだ。

更に言うと、仕込みの作業をマルトーと一部のコックに手伝って貰っていた。

コックの面々は見たこともない料理と調理方法に唸っていたりもしていた。

「だから、これは君が気にするようなことではない」

シエスタは訳がわからなくなっていた。

この人や元さん、クーさんは一体なんなのだろうか。

魔法が使えるのに威張りもせず、私たち平民と対等な目線で向き合ってくれる。

困ったことがあれば、持ちつ持たれつと言って満足に礼の一つもさせてくれない。

…とは言っても、平民の自分に出来る礼など高々知れてるけれど。

テーブルにケーキを運んで行く中、気づいたことが三つある。

一つ目は、クーさんの所作が平民とはかけ離れていること。

二つ目は、エミヤさんの給仕能力が半端じゃなく高いこと。

三つ目は、元さんとミス・ツェルプストーの仲の良さに貴族（男）の方々が憤りを感じていること。

クーさんは本当は貴族出身の方では無いのだろうか？

エミヤさんも過去は貴族の方に仕える執事などでは無かったのだろうか？



そして、ハジメさんはミス・ツエルプストーと恋仲なのではないだろうか？

(三つ目を除いて、最初の二つは大体正解です)

何て、考えながらケーキを運んでいると、少し前の方で貴族の方々が集まって中心にいる貴族様を、周りにいる方々たちが冷やかすといった様子が視界に入った。  
大変盛り上がっているようみたいだ。

「なあ、ギーシュ…お前今誰とつきあってるんだよ」

「そつだよ。誰が恋人なんだ？」

「付き合う？ 僕にはそんな特定の女性なんていないさ。 薔薇と  
いうものは多くの人を楽しませるためにその花を開く…。 知って  
いるだろうか？」

耳が腐りそうになりました。

確かにあの方は顔はいいですが、女性の私から見れば…女を馬鹿にしているのかと叫びたくなる言葉の数々でした。

どうやらあの集団の中心にいるのは、ミス・グラモンのようです。  
納得です…。

貴方が薔薇でしたら、エミヤさん達は花を超える何かになりますね。

近づきたくは無かったが、ケーキを運ぶために私はそのテーブル向  
かいました。すると、ポトッと…ミス・グラモンのポケットから  
なにかが落ちたのを見ました。

それを拾おうと思ったところに、エミヤさんがミス・グラモンに  
話かけていました。

「おい。瓶の落とし物だ」

無視してもよかったのだが、私以外に気づいたものはいないようだ。先程のセリフを聞いて、正直近づきたくは無かったのだが、仕方なく教えてやった。

しかし、少年は振り向く素振りも見せずコチラの言葉に無視を決め込んでいる。

この距離で話しかけている：大体1メートルも無いくらいの距離なのだから、聞こえていないわけがない。

近くにいたシエスタに紅茶の乗ったトレイを持ってもらい、小瓶を拾う。

「盛り上がっているところ済まないが、落し物だ」

今度は更に近づいてから直接渡す。

少年はその小瓶を顔を顰めながら見て、瓶を渡しに押し返してきた。

「何だい、これは？ 僕のじゃないよ」

そんな訳が無い。

もし、これが彼ので無いとしたらソレは私の目が可笑しくなったという事だ。

だが、仮りにも鷹の目などと言われているアーチャーの目が可笑しくなるはずがない。

すると、瓶に気づいた周りの少年たちは騒ぎ始めた。

「おや？ その香水は…もしかやモンモランシーの香水じゃないか？」

「そうだ。その鮮やかな紫色は、モンモランシーが自分のためだけに調合する香水じゃないか！」

「それがギーシュのポケットから落ちてきたってことは…、ギーシュはモンモランシーと付き合ってる！」

「そうだ！ そうなんだろう？ お前、今モンモランシーと付き合ってるんだろ」

「何を言っているんだ！ 彼女の名誉のために言っておくが、僕は彼女とは…」

はやし立てる少年たちに向かってギーシュが慌てながらも、何か言

いかけた時に後ろのテーブルに座っていた茶色のマントを着た女の子立ち上がり、静かに近づいてきた。

「やっぱり、モンモランシー先輩と…」

「お、落ち着くんだケティ。僕に君以外の女性なんているわけだろう？ 僕の心の中にいるのは君だけに決まっ！？」

乾いた音が広場に響き渡った。

少女が少年にビンタしたのである。

その音に楽しげに会話していた生徒たちも、元に嫉妬と憎しみを向けていた者も一斉に静まり返り、何事かと音の発生源に目を向ける。しかし、元は未だに我関せずで紅茶に舌づつみをつっている。

「その香水が出てきても、まだそんなことを言うんですね？ その香水が出てきたという事が何よりの証拠…。さようなら…」

少女は目に涙を浮かべながら去っていく…。

少年はというと呆然し、頬をさすりながら、その後姿を見送るしかできていなかった。

そうしていると、今度は別の席から見事な金髪ロールの少女が立ち上がり、何とも厳めしい表情で少年の前まで歩いていく。

「モ、モンモランシー…違うよ、これは誤解さ。彼女とは一緒にラ・ロシエールの森まで散歩したただけだよ？ で、でも、それは只の友人としてであって、僕の恋人は君だけさ」

ギーシュは首を振りながら言った。

冷静を装っているが、口調は噛み噛み、顔には冷や汗が伝っており、

かなり焦っているのがモロ分かりである。

エミヤは内心感心していた。

明らかに少女に二股がバレている状況でここまで、嘘がツラツラと噛みながらも出てくるものかと…。

「やっぱり、あの1年にも手を出していたのね？」

「お願いだ、“香水のモンモランシー”…咲き誇る薔薇のように美しいその顔を、怒りで歪ませないでおくれ。僕まで悲しくなってしまうじゃないか…」

モンモランシーと呼ばれている少女は、なおもギーシュを睨んでいる。

目は完全に冷え切っており、嘘など通じそうになかった。

というか、全部バレているのだから素直に謝ればいいのだから…。

モモランシーはテーブルに置かれていた小瓶を掴むと、蓋を開け、中身を少年の頭に向け流した。

「うそつき…！」

と怒鳴り、少年の頬にキツイビンタを食らわし去っていった。

すでに沈黙が場を支配している…。

だが、元はやはり我関せずであり、タバサから大豆を御裾分けしてもらいながらポリポリと食べていた。

「美味しいか？（ポリポリ）」

「ユニーク（ポリポリ）」

だから、それは違う！

少年はハンカチを取り出し、ゆっくりと顔を拭いた。そして芝居がかったように言う。

「はあ。彼女たちは薔薇の意味を理解していないようだ」

糞くらえだ。

だが、同時に関心もした。

今の強がりもそうだが、先ほどの状況でよくもまあ……。ここまで来ると、少しは褒めてやろうじゃないか。

「そろそろ仕事に戻ろう、シエスタ」

「あ、はい。そうですね」

シエスタは今までの光景に啞然としながらも素直に頷き、一緒にケーキを配るために動き出そうとしたが……。エミヤは見てしまった。シエスタの目は少年をゴミでも見るようなものに変わっていたことを……。

「待ちたまえ！」

少年が怒りを込めながら言う。

恐らくは私に向かっての言葉なのだろうな……。

「何かね？」

精一杯の鬱陶しさを込めて、少年に向き合い言い放つ。

だが、怒りゆえに気付かなかったのか、元々鈍感野郎なのか……。少年

は気がつかなかった。

「謝りたまえ。君の無神経な行動が、あの美しい少女たちの心を傷つけてしまった」

「スマナカッタ。行くぞ、シエスタ」

適当に返事をする。

もう仕事を始めなければならない。

下らない事で、呼び止めない欲しいものだ。

「待てと言っているだろう！ お前、貴族をなめてるのか？」

舐めているが？

「そんな投げやりな謝り方で僕が許すわけないだろ！」

はあ…。

エミヤは知らず知らず、ため息を漏らしてしまった。

ランサーはというと、ニタニタ笑いながらコチラの様子を見ている。絶対、楽しんでるだろう…

「やれやれ…君は何を言っているだ？ 今回咎められるべきは二股をしていた君だろう。それを、仕事をしてる私を呼び止め、擦り付け…。いやはや、流石は貴族様だ…自らの非を認めることさえできないとは」

「うるさいぞ！ それに僕が瓶のことを知らない振りをしていた時に、お前が上手く話を合わせれば良かったんだ！」

「どちらにしても、いずれ問題になるだろう？ その時は一体どうするのだ？ 君はどちらかを選ぶことができるのか？ それとも、今のように彼女たちに見切られる覚悟があるのか？ どちらも持ち合わせてないのなら、止めておけ…」

ここで二人とも選ぶという選択肢も存在しているのだが、目の前の少年にはそれだけの器量は無いだろう。

勿論、私にも無い…。

いるとすれば、今大豆を食べながら我関せずの態度でいる…あの男くらいだろう。

少年は顔を真っ赤にしながら、震えている。

自らの愚かさを冷静に説かれていてはそうもなろう…。

「本当に彼女たちを悲しませたくないと思っているのなら、私に怒鳴り散らすより彼女たちを追う事を推める」

そして、エミヤはいい機会だと日頃、貴族貴族と五月蠅い輩にも向けて言葉を放つ。

「君は貴族貴族うるさいが、私は君なんぞより平民のほうがよっぽど好感が持てる。彼等は働いているのにも関わらず、威張り散らさない。なのに、勉強に励むべき君がソレでは…自分で金も稼いで無いくせに権力だけを見せびらかすなど、愚か者のすることだぞ？」

「だ、黙れ！」

その言葉には周りの生徒も思うところがあるようだ。

私の言葉を真摯に受け止めている者も少ないがいるし、平民の癖にと苛立ちを覚えているものもいる。



前者は将来、いい貴族になれるだろう。

「ああ、そうか」

すると、少年は態とらしく何かに気がついたように口を開く。

「そういえばお前はルイズの使い魔だったな？　前は随分と失礼なことを言っていたし、他の使い魔と一緒に好き勝手に勝手してるみたいじゃないか。　主とよく似て非常識なやつだな」

その言葉にマスターはムツとした顔で何かを言いたそうにしているが、元が頭をポンポンと撫でてやる事で何とか大人しくしている。正直、助かるぞ…ここでマスターが出てくるような事があれば、サーヴァント失格だ。

我が身に非がないとは言え、私が引き起こしてしまった事にマスターが出てきてもらうわけにはいかないからな。

「はあ…、とうとうルイズを引き合いに出すか。　高が知れる…流石は“貴族様”だ」

芝居染みた様に、わざとらしく少年の神経を逆撫でするような言葉を選んで口を開く。

「いいだろう…君には貴族に対する礼儀というものを教えてあげよう。　丁度いい腹ごなしになる」

そう言って、小瓶の中身を拭いたハンカチを投げる。

…手袋ではないが、これは。

「決闘をしたいという意味表示かね？」

「ああそうさ。ルイズは躰ができていないようだからな。代わりに僕がしてあげようというわけだ」

「クツ…構わん。その挑戦を受けてやる。マスターを侮辱したこと…後悔させてやるう」

私のことで何か言われるのはいい…。

だが、謂われなき事でルイズのことを悪く言われるのは許せない。

それに…ここ最近ランサーとの一戦を除いて、体を動かしていない。

いい運動の機会だ。

「…それで、どこでやるのだ？ よもや今ここでやるなどとは言わないだろう？」

「当たり前さ。貴族の食卓をお前みたいな平民の血で汚せるものか…。ヴェストリの広場で待っている。ケーキを配り終わったらすぐに来るんだ。わかったな？」

ギーシュと友人たちは椅子から立ち上がり、去っていく。

だが、うち一人がまだテーブルに残っている…、逃げないように見張っているのだろう。

それにしても、ケーキを配ってから来い…か。

全く、分別があるのか無いのか分からんな。

そこでふと思い出した。

ああ、あの少年は慎二に似ているのだ。

少し、懐かしくなり小さく笑ってしまったが、仕事に戻らなくてはいけない。

「すまない。待たせたな…」

振り返り、シエスタに話しかけるが全く反応はなく、見ると震えていた。

それは明らかに恐怖からくるものだった。

「殺されちゃう…」

「ん？」

「貴族を本気で怒らしたら…」

シエスタは身を翻し、その場から逃げるように走り去ろうとしたが、瞬間誰かにぶつかってしまったようだ。

「す、すいま…クーさん？」

「どうしたんだ？ 嬢ちゃん」

その姿は今までの給仕の者ではなく、デニムのパンツと薄い水色のシャツに着替えたランサーだった。

手には、なにやら大きなひらべつたい箱が握られており、その中には大豆やら飲み物やらが入っていた。

「ランサーよ、その姿は何だ？」

「イベント事だろ？ どうせ、あのガキには決闘の本当の意味も解つてねえみたいだし、テメエも“その気”はねえんだろ？ だったら、小遣い稼ぎ程度にはなるだろうさ」

どつちら、売り子としてこの一件を小遣い稼ぎに利用するようだ。

「エミヤ、紅茶のお替りをくれ」

「元…聞いていただろう？ 私は早くケーキを配り終わりたいのだが」

「とはいえ、今の貴様は給仕だろう？ なら、客の言うことは聞かねばな…バトラー？」

「…了解した。 地獄に堕ちろ」

3人はこれから、決闘だとは思えないほど普段のソレと変わりなく、それがシエスタには疑問を乗り越して、不気味にすら感じた。

「そうだ、嬢ちゃん。 売り子やらねえか？」

しかも、勧誘されてしまった。

## 第12話 使い魔の実力

「なっ…これは！」

彼は驚いていた。

昨晚、彼らと湯船に浸かった時に視界に入ったものは3人共左手の甲にルーンが刻まれていた。

最初は大きくも気にもならなかったが、ハジメ殿の左腕が金属製の義手だった事で目を奪われた。

そして、気づいた。

あのルーンは見たことがない。

よく見ると、3人とも同じものだった。

だから、一晩開けた今日興味半分に資料室で調べてみた。

受けたのは衝撃。

生まれたのは疑惑。

ありえないものだった。

始祖の使い魔と同じ契印…最強の使い魔の証。

始祖の伝説において欠かせないその傍らにあった存在。

それが彼らに刻まれていた。

彼は急ぎその場所を後にし、とある場所に向かった。

コルベールが向かった先は本塔の最上階にある学院長室。

そこには今現在二人の人物がいる。

この学院の最高指導者であると同時に最強の魔法使いでもある“オールド・オスマン”とその秘書を務める“ミス・ロングビル”である。

だが、このロングビルという女性には謎が多い。

この学院に来る前の経歴は一切不明。

本人に聞いても曖昧に答えるだけで、決して語るうとしないからだ。彼女はオスマンが連れてきたのである。

そんな二人の関係は今…。

「やはりミス・ロングビルの下穿きの色は黒が良いと思うんじやが」

「…オールド・オスマン。私の下着についてマジマジと感想を述べるのは止めてください」

「じゃがのう…。その身体つきで白色はギャップがあるんじやよ。やっぱり、黒じゃと思うんじや。まさか、狙ってかの？」

「…何故そんなことしなければならぬんですか！…というよりなんで私の下着の色を知っているんですか!？」

エロ爺とセクハラされる美人秘書にしか見えなかった。

そんなオスマンにとっては至福の時を壊し、ロングビルには地獄の時に割って入った闖入者がいる。

「オールド・オスマン!！」

ジャン・コルベールである。

老の返事を待たず、勢い良く開かれる扉。

「何じゃね？ 騒々しい」

先ほどまでの痴態はどこにいったのだろうか？

そこには威厳あふれる大魔法使いとその有能な秘書がいた…。

流石はプロだと言っておこう。

「し、至急報告したい事があり、参りました」

「…くだらん事ではないじやろっな？」

オスマンとしては至福の時を壊されたのだ、威厳というよりは憤りに近いのかもしれない。

「まずはこれを…！」

コルベールは資料室から持ち出した、古文書を差し出した。そして一言だけ言う。

「…伝説が再臨しました」

「…！ ミス・ロングビル。以降の発言は第三者による見聞きは許されん。退室を…」

オスマン老はその手に渡された古文書と彼の発言から言わんとする事を察した。

気づいてしまったと思った。

そして、鋭い光を宿した目で自らの秘書に退室を命じた。

その老人の目に逆らえることなど、彼女には出来ず大人しく退室をする。

そして、部屋には二人の魔法使いが残された。

「ここからの会話は他言無用じゃ…ミスタ・コルベール」

そこには、最強の魔法使いがいた。

「って、アンタ何してんのよ！」

「ん…どうしたんだ？ そんなに怒って…ああ、安心したまえ。  
マスターを侮辱したあの輩に少し灸を据えるだけだ」

「うううう…！ そうじゃないわよ！ 何勝手にギーシュと決闘  
の約束なんかしてるのよ！！」

自分の為に怒って、決闘を受けたと言うエミヤの真っ直ぐな目を見て、嬉し恥ずかしで頬を赤くして、ついお礼を言いそうになったが踏ん張る事ができた。



「あんたが魔法が使える事は知ってるけど、平民が貴族に勝てるはずないでしょ!？」

平民が貴族に勝てない。

それはハルキゲニアの人間の常識だった。

稀にメイジ殺しと呼ばれている平民もいるが、それはかなり稀である。

「ふむ…どうやら、我がマスターに私の力を見せるいい機会にもなるだろう。見ていたくれ、見事君に勝利を見せてやろう」

だが、目の前の使い魔はこれ以上ない程に自信に満ち溢れている。

ルイズは忘れていたかもしれないが、彼は英雄である。

救えない十を救い、世界に招聘された者なのだ。  
受肉したとはいえ、ソレは生前の姿に戻っただけで英霊としての能力が落ちている訳ではない。

「なんで、そんなに自信満々のよ」

「実際にあの少年の魔法を見たわけではないが、大体の力は見ただけでわかる。負ける要因が見当たらんよ」

周りでは、生徒たちが広場に決闘を見に行こうと移動を始めている。  
ランサーはシエスタに新たに大豆と飲み物の入った箱を渡している。  
本気で稼ぐつもりのようなのだ。

元は紅茶を飲み終え、タバコに火を付けている。

どちらもアーチャーが負けるなど露にも思っていない。

「よく見ておけ…。君が召喚した存在が如何なる者であるか、今

一度君の前に示そう。 それから、シエスタ」

貴族に対して恐怖を抱いている彼女に向かって、自信に満ちた声で話しかける。

「メイジであろうが貴族であろうが…敵わない者には敵わない。その事実を君に教えよう」

シエスタはその言葉が忘れられなかった。

私達は少年が広場に向かった。

ヴェストリノ広場は学院の敷地内にある二つの塔“風”と“火”の間にある中庭である。

普段は使い魔たちが思い思いに戯れていたり、ルイズが魔法の訓練をしている場所である。

西日の当たる場所ゆえに、寒い日は寒く、温かい日は暑いという立地条件の悪い場所である。

この場には多くの生徒達が集まっていた。

享楽がよほど少ないのだろうか？

私がいた世界でも、近代社会へと移りかかるまでは享楽が少なかった。

それ故に、罪人の処刑すら享楽へと化していた。

少しでも長く苦しみ、生き長らえ、死なないように様々な処刑法が生み出された。

決闘も娯楽の一つであった。

古代ローマでは罪人と人喰いライオンの決闘までさせていた位である。

「諸君！ 決闘だ！！」

ギーシュが造花の薔薇を掲げて、宣誓するかの如くの大声をあげた。恐らくはアレが彼の魔術具…杖なのだろう。

周りからは大きな歓声上がり、今か今かと始まりを待っている。

本当の決闘ならば、既にこの時点で少年を幾度も殺せているのだが…。

心の中でため息を漏らす。

「良く逃げ出さずに来れたものだな…褒めてやるっ」

「やれやれ、見張りを残していった癖によく言う。それに逃げる必要性も見られんしな」

「ギーシュ、勝てよ！ 貴族の力を見せつけてやれ！」

「ゼロの使い魔なんかぶっ潰せ！！」

特に男子の白熱具合が半端ない。

先程の元に対する嫉妬心が爆発したのか、熱気に拍車がかかる。

…知らぬが仏とは良く出来た諺だな。

エミヤはどうするか考えていた。

目の前の少年に力の差を理解させた上で、尚且つ周囲に説得力のある終局を導かねばならない。

でなければ、これからも力の差を理解せず向かってくる輩が出てくるからだ。

「一分だ。一分で決着が付かなければ、私の負けで構わん」

「僕を馬鹿にしているのか…？ いや、メイジそのものに対する侮辱だっ…！」

「…はあ、良いか？ これは正当な評価と分析の上のハンデだ。これでも大幅に譲歩してやっているんだがな？」

ギーシュの顔色が朱に染まる。

存外に激昂し易い性格のようだ…本当に慎二に似ている。

この世界の貴族にはこの傾向が強い…元は良く30年前にハルキゲ

ニアを滅ぼさなかつたな。

よく我慢したものだ。

最近は大シになってきたとは言え、ルイズにもこの兆候は見られる。

「…その傲慢を悔やんでも知らないからな。その身にメイジたる、この僕…ギーシュ・ド・グラモン“青銅”の名を刻み込んでやる！」

ギーシュがその手にした造花の薔薇を振り下ろした。

その魔術具と思しき薔薇は一枚の花弁を剥離させ、地に落ちた花弁は徐々に人型へと形成されていく。

解析開始…。

錬金魔法による物質構成…青銅製の人形か。

「それが限界か？ いやはや、貴族様の魔法は大したことが無いのだな…それなら、5秒で終わる」

「ツク！！ 良いだろう、その減らず口…叩けないようにしてやる！！」

「まさか…ミス・ヴァリエールが虚無の担い手とは」

ガンダールヴに気づいたコルベールにオスマンは全てを話すしか道はなかった。

でなければ、独自に調べ元たちに何かしらの迷惑がかかる可能性があつたからだ。

「…火のエキスパートたる君ならば、分かるじやろうが…爆発という現象は火が発生し物体に影響して、結果として爆発が起きるものじゃ」

「ですが、ミス・ヴァリエールの“失敗”には火が発生しない…」

「そう…。儂ですらあれは出来んだよ…シンドウでもな」

「火の粒に干渉しない熱量の伴わない光を生じる爆発…それが虚無」

コルベールは息を呑む。

ことの重大さに汗を流す。

オスマン老は小さく嘆息し、沈黙が部屋を支配しようとしていた矢先であつた。

部屋の扉をノックする音が響く。

話に夢中になっていてここまでの気配に気がつかなかった…失態じゃの。

「…誰かね？」

「私です。オールド・オスマン」

「ミス・ロングビルか…」

彼女なら大丈夫じゃろ。

もし、彼女以外の教師に話を聞かれていたとしたら、シンドウ殿やヴアリエル家の少女に要らぬ被害が出てしまうかもしれない。

無論、他の教師たちのことを信頼していないわけではないのだが、それとこれとは話が別である。

秘書である、彼女なら何とかなる。

「ヴェストリの広場で生徒達が決闘をしているようです。教員達

が止めようとしています、生徒達に阻まれ止められない模様です」

こっちはそれどころでは無いのだが…。

オスマンは嘆息しながら、口を開く。

「暇な貴族ほどタチの悪い生き物もおらんのか…それで、事の発端は誰じゃ？」

シンドウ達が見たら、ため息を漏らしながら呆れ果てるだろう。

「一人はギーシュ・ド・グラモンです」

「…グラモンのバカ息子か。　　という事は事の発端は女性関係かの

お……」

要らん所の血が濃くて困ってしまっ。

そんなに色恋沙汰が好きならば、ゲルマニアに移住すればいいんじゃない。

「それで、もう一人は？」

ミス・ロングビルは、一瞬躊躇うかのような仕草を見せた後、口を開いた。

その口から発せられた事実は室内の二人を驚愕させるに足るものだった。

「それがメイジではなく……。ミス・ヴァリエールの召喚した使い魔だそうです」

「な……なんですとおおお!!!??」

「なんじゃとおおお!!!??」

噂をすればで合った。

「教師たちにいたっては、“眠りの鐘”の使用許可を求めています」

一瞬、彼女の言葉に同意をしそうになったが、寸での所で押しとどまる。

「そ、それで、3人の内の誰なのかの？」

「褐色の肌の……エミヤという使い魔です」



ぬう…エミヤ殿か。

シンドウで無かったただけ有り難いが、言っているそばから迷惑をかけてしまったようだ。

恐らくはグラモンの馬鹿息子が彼の主であるミス・ヴァリエールを侮辱し、更には決闘を持ちかけたのだろう。

全く、本当に暇を持て余した貴族は面倒ばかり起こす。

「たかがケンカじゃ…。放っておいてもよろしい」

「解りました…」

そして、静かに退出するロングビルの姿を見送り、コルベールはオスマンに詰めよる。

「宜しいのですか？」

「エミヤ殿の力量なら、グラモンの馬鹿息子に怪我一つ付けることなく、決着が着くだろう…」

彼もまた、セイバーと同じ英霊なのだ。

故に信頼も信用も出来るとオスマンは思っていた。

オスマンは壁にかかった鏡から広場の様子を覗き見る。

さて…どうなることやら。

「1分：エミヤめ、随分と時間をかけるものだ」

彼奴なら、一撃で数秒で終わらせることも出来るだろうに……。

恐らくは圧倒的な力を見せつける為に、一瞬で終わらすことはせず、感応無きまでに叩きのめすのだろう。

視線をずらせば、クーに連れられたシエスタが売り子をしている姿が目に入る。

かなり拳動不審である。

彼女は平均的な平民である。

故に貴族は畏怖の対象にしかならず、エミヤの命を心配しているのだろう。

すると、決闘が始まる前に完売したらしく、クーが疲れきったシエスタを連れて近づいてきた。

「いやあ売れた売れた…完売だ」

「そうか…それにしても、何故大豆なのだ？」

「あん？ 知らねえのか？」

曰く、あの豊胸施術を施したあの日から、大豆は胸に良いとして多くの女生徒（胸に悩める）の間で流行っているのだそうだ。

見ると、確かに大豆をポリポリと食べているのは女生徒のみである。

「それにしても、エミヤは本当に大丈夫なの？」

キルケはルイズ程ではないが、心配そうにこちらに聞いてくる。

確かに、俺達は彼女たちに簡単な魔術位しか見せてないが、それは無用の心配だ。

「問題ない…あいつに勝てるとしたら…。 エルフ位だろう…」

「嘘…そんなに？」

最も、それでもエルフ複数人必要ではあるだろうが…。

視線をエミヤに向けると、エミヤはさらなる挑発を少年に投げかけているようで、少年の顔は真っ赤に染まっている。

「でも、ギーシュって実践魔法だけは成績いいのよ？」

「高々、ドットやライン程度のメイジだろう？ 戦場を経験してい

るなら兎も角…話にならんよ」

そうなのである。

彼は幾たびの戦場を越えて不敗なのだ。

貴族の意味を履違えている馬鹿になど負けるはずがない。

私の言葉に、さらに顔色を赤く染めていく少年…。

あからさまな挑発は事実無根であれば、相手を冷静にさせるが…事実を含んだ時は最高の効果を発揮する。

向こうがこちらを軽く見ていることは既にして明白。

余力を残し余裕を持って勝利しようと思っていたのだろう…こんな所にも貴族の無駄に高いプライドが出るか…。

だが、それでは意味が無かった。

相手が自らの敗北を心のそこから受け入れる為には圧倒的な実力差

で自らの全力を破られる必要がある。  
だから、余力を残しての敗北など意味が無いのだ。

「ルイズには悪いが…折角の使い魔も2人になるな!!」

ギーシュは憤怒の形相で再度、造花の薔薇を振るう。

新たに六枚の花弁が舞い散り、それらもまた青銅製の人形となった

「いい趣味だな…全て女性型か…」

少年の心がそのまま形に出ている。

「…僕自慢のゴーレム“ワルクューレ”だ。お前が悪いんだぞ？」

僕をここまで怒らせたんだからな!」

戦乙女か…ネーミングセンスは安直ではあるが悪くは無い。

「だが…ワルクューレとは、戦場で敗れた英雄の魂をヴァルハラまで運ぶ乙女だ…それでは物足りんよ。小僧」

エミヤの言葉に完全にキレたのか、七体のゴーレムが周囲に展開する。

円形陣によって中央の敵性対象を殲滅する…常套手段だが、悪くない。

七体の指揮を担うギーシュが自らに絶対の自信を持ってその執行を宣言する。

その姿は芝居がかっており、まるで自らは戦場を操る指揮者としても言いたげであった。

再び掲げられ振り下ろされた薔薇に従うが如く、七体のゴーレムが

動きを見せる。

### 投影開始

手にするは干将・獬耶。

彼が接近戦において最も得意とする得物である。

周りの生徒たちは一体どこから、あの双剣を取り出したのかという疑問の聲が上がる。

だが、一部の生徒たちはそんな事よりも、その双剣に内包されている魔力の多さに愕然としていた。

「何あれ…」

ルイズは驚きを通り越して、愕然としていた。

幼い頃から、様々なマジック・アイテムを目にしてきたが、あれ程までに魔力が内包されている剣など聞いたことも目にしたこともない。

そして、ソレを手にする自らの使い魔の動きも驚嘆に値するものだった。

七体のゴーレムによる同時、時間差、連続など様々な手法を織り交ぜたギーシュの攻撃はわずかに身を逸らす程度の動きでほとんどが回避されているのだ。

「あのゴーレム、案外いい動きしてんじゃねえか」

「ああ…、ワルキューレの名を冠す程ではないが悪くない。だが、

「まだまだ戦術に穴があるな」

私の残りの使い魔2人は偉そうに言いながら、状況を見て楽しんでいる。

彼らにとっては、何ら驚くような事でもなければ、不審に思うことでも無いらしい。

呼び出してから、この1週間で少しは彼らのことを解った気になっていたみたいだけど、本当はまだまだのようだ。

これが、終わったらエミヤにあの剣が何なのか問いただしてやる！

エミヤには磨き抜かれた心眼がある。

それは、自らに攻撃しやすい隙を解りやすく見せて、そこに攻撃させる。

戦闘行動においては、深い戦術眼を持たない人間でなくては、そう易易はいかない。

元でさえ、これはエミヤ程まで上手くは出来ない。

エミヤは戦術に深みを、元は戦術に幅を求めたのだ。

分野は同じであろうと、毛色は全く違う。

それ故に、エミヤは自らが回避しやすい状況を自ら生み出しているに過ぎなく、つまりは避けることも、反撃することも彼のさじ加減一つなのだ。

戦場を操っているのはギーシュ・ド・グラモンではなくエミヤシロウなのだ。

「（私の対魔力でもこの程度ならば通用するか…つまりはこの少年はドットクラス）」

エミヤは純粹に驚いていた。

高々、貴族の名を語るだけの有象無象の一人だと思っていた少年が思ったよりも見事だったのだ。

態とスキを作っているとは言え、ゴーレム達はいい動きをしている。もし、彼に戦闘経験と指揮知識があれば、手こずる事になっていたかもしれない。

だが、それも元クラスでなくてはダメだ。

それをまだ10代半ばの少年に求めるのは酷だろう。

避けきれず、当たるコースの攻撃は彼の体から湧き出るような紅い魔力によって防がれる。

殆どの攻撃は避けられ、たまに当たったとしても紅い魔力に防がれる。

ギーシュは自らが信じてきた魔法が真つ向から否定されたような気分になった。

「な、なな何をしたんだよ!？」

「ただ避けて、受け止めているだけだが？」

残り10秒…そろそろ良いか。

ガキッ

ギンッ

ザンッ

ズサッ

「なっ…!!！」



彼を囲み、攻撃を仕掛けていた戦乙女の名を冠するゴーレムが一瞬で切り裂かれ、地面に崩れ落ちた。

「く、クソ!!」

だが、ギーシュは薔薇の杖を振りかざし戦乙女を指揮する。しかし、杖を振りながらも彼は理解してしまった。

勝てない…。

自らが声高々に勝利を宣言する姿が見なかったのだ。

ガキッ

ゴッ

ズサッ

そして、残りのゴーレムも切り裂かれ地面に伏した。

残り5秒…エミヤは静かに歩み、杖を握ったまま立ち竦んでいる少年の首筋に獏耶を向ける。

「チェックメイトだ」

「ぼ、僕の負けだ…」

だから、自然と敗北の言葉が口から出た。

ああ…、僕は負けを認めてしまったのか…。

杖に薔薇の花弁はまだ残っている、だが目の前の少年は素直に自らの敗北を認め口にした。

時間はジャスト1分。

圧倒的な力量さで平民に貴族が敗北した。

その事実からか、それともエミヤの武技の高さに驚いたのか…広場

には沈黙が流れていた。

「圧倒的ですな…」

「圧倒的じゃな…」

コルベールは驚いていたが、オスマンは何処か予想通りになったと思っ

彼はセイバーの力量をまざまざと見せつけられた事があった、だから同じ英霊である彼も同じくらい強いのだと思っていた。

実際は、その通り強かったのだが、毛色が違った。

セイバーは天賦の才能と圧倒的な技量、力量を持って敵を粉碎した

のに対し…エミヤは才能の欠片も感じさせなかった。

「一体、どれだけの戦場を渡り歩いたらあれ程の動きが出来るようになるんじゃないか…」

「分かりません…」

勝ち目のない戦い、命のかかった戦い、敗北しか見えない戦いを戦い抜いた故に出来る戦い方だと思った。

どんな状況でも冷静に正しい選択を瞬時にとり、時間差無く行動を取れる。

「ルーンが光ってましたな」

「間違いなく、ガンダールヴ…という事なのじゃろう」

ギーシュはドットメイジであり、未熟でありながらも魔法戦闘においては実に優秀であった。

対して、エミヤは平民であり、さしたる魔法も使うことなく、剣とその身一つでその魔法に打ち勝った。

「学院長！ もはや、彼がガンダールヴ、ミス・ヴァリエールが虚無…始祖ブリミルの再来であることは明確です！ この事を王宮に…」  
「ならん！ 何故です！？」

「シンドウがこの事を知りながらも何故、黙っているように儂に言ったのか解らんのか！？ この事が王宮の馬鹿どもに知れば、戦争に駆り出される理由にされるに決まっておろう！」

「…」

「それに、ミス・ヴァリエールとミス・ツエルプストーは家と国の柵を越えて漸く友となったのじゃ…王宮に知られれば、間違いなくゲルマニアに最初に仕掛けるに決まっておろう」

オスマンは暗に彼女たちに殺し合いをさせる気かと言ってるのだ。

「申し訳ありません…考えが足りなく」

「この事はくれぐれも内密にの…じゃが、もし仮に王宮に知られるようなことが有ったとしてもシンドウが何とかしてくれよう」

「それはどういう…」

コルベールは何故そこで彼の名が出てくるのかと、疑問を口にした。平民でありながら、見たこともない強大な魔法を操りながらも、ソレを決して鼻にかけない。

彼こそがコルベールの思い描いた理想の貴族であり、メイジである。だが、彼は平民だ。

「今は亡きフィリップ三世と懇意にし、宰相マザリーニ、太后マリアンヌ、ヴァリエール公爵家に太いパイプを持つておる。例え、馬鹿どもが暴走しそうになろうと抑止力位にはなるじゃろ…本人もそのつもりのようにじゃな」

その言葉にコルベールは開いた口が塞がらなかった。ハジメ・シンドウという男は何者なのだろうか…。その問いだけが、彼の脳内で反芻されていた。



### 第13話 変革の手

「それにしても、貴方は強いんですね…」

決闘の決着はついた。

ギーシュ・ド・グラモンは心の底から素直にそう思っていた。

何故だろうか…。

相手は平民である。

ゼロのルイズの使い魔である。

なのに、何故少年は彼に畏まっているのだろうか…。

「私は強くは無いさ…」

「そんな謙遜を…」

周りは未だに呆気に取られたように沈黙が支配している。

「私などより、あの2人の方が強いさ…」

「なっ…」

彼の視線の先には不敵な笑みを浮かべる青の使い魔と無表情にこちらを見つめる黒の使い魔がいる。

彼より彼らの方が強い？

それが、彼には信じられなかった。

おおよそ彼の強さはメイジ殺しの名に相応しいモノであり、大抵のメイジなどでは比べ物にならない強さを持つ彼よりも強いという人。

想像もつかなかった。

「ルイズはとんでもない使い魔を召喚したんですね」

「クッ…。そうかもしれないが、今君がすることはその様な感想を口にする事では無いと思うが？」

「はい…。 2人に謝ってきます」

「私のマスターにもな」

エミヤの言葉に素直に頷く。

その顔は負けたというのに何とも清々しいものだった。

全力をもって当たり、敗北した。

だから、何の悔やみも彼には無かった…。

だが、それは少年の性根が素直で真つ直ぐだからだった。

「ウインド・ブレイク！」

「「!!」」

彼を一つの魔法が襲った。

それは風魔法。

その衝撃でギーシュは弾き飛ばされ、数メートル離れた場所に体を叩きつけられた。

彼のいた場所は砂煙で覆われ、恐らく直撃を受けたと思われる。

「エミヤ!!」

「ちょっと！ ヴィリエ・ド・ロレーヌ！ 私の使い魔に何すんの

よー」

その魔法を放ったのは一人の少年であった。  
ヴイリエ・ド・ロレーヌ。

ルイズの同級であり、風のラインメイジである。

「ふん！ 貴族に平民ごときが敵うはずないと教えてやったんだ！」

「ああ…エミヤさん」

シエスタは顔を真っ青にして、今にも倒れそうになっていた。  
決闘の前に言っていた彼の言葉…敵わないものには敵わない。  
確かに、決闘には勝ったが。

「や、止めるんだロレーヌ！ この決闘は僕の負けだ。 これ以上  
僕に恥をかけないでくれ！」

「ふん！ 何を言ってるんだ？ ギーシュ…貴族が平民如きに負け  
るはずないだろ？」

ギーシュは彼の言葉を聞いて、周りを見渡すと何人かの見覚えのある人間が厭らしい笑みでヘラヘラしているのが見えた。  
愕然とした。

これが果たして本当の貴族なのだろうか。  
決闘の結末が気に入らなかつたからといって茶々を入れ、ソレがさも当然だと言わんばかりに杖を掲げている。

「エ、エミヤさん！」

あれ程の人だ…死ぬことはまずありえない。

だけど、ドットではないラインク拉斯の魔法の直撃を受けて無事で



済むのか。

「ちよ、ちよつとハジメ！　って、あれ？」

ルイズは自らの使い魔の姿をさがすが、どこにもいなかった。  
クーもハジメもどこにもいなかった。

逃げたのか？

いや、彼らの性格から考えたらソレはありえないだろう。

ルイズ達は咄嗟に砂埃で姿が見えない使い魔のいる場所に目をやった。

風に吹かれて、少しずつ視界が晴れる中には…。

「やれやれ…助かったぞ元」

「気を抜きすぎだ馬鹿たれ」

「決闘か…名ばかりのお遊びとは言え、ソレを汚すか」

その中には外套を盾のようにして、彼を守る使い魔と凄まじい怒りを顔に浮かべる使い魔がいた。

「え…！」

キユルケは先程まで元がいた隣の場所と10マイル程離れたその場所を見比べた。

いつの間にあの場所まで移動したのだろうか。

だが、彼等はそこにいる。

「テメエ等…そいつを向けるって事の意味…解ってるんだろうな」

「……?!?!?」「……」

クーから言い表せぬ殺気が広場を伝う。

それは彼が召喚かれた時などとは比べ物にならない程である。

指向性を持った殺気…それだけの殺気を放てるまでに一体どれだけの戦場を渡り歩く必要があるのだろうか。

「お、おい！」

ロレーヌ以外の杖を掲げていた人間の全てが気を失った。

メイジとは言え、ただの子供である。

貴族？ メイジ？ そんなものは戦場では意味がなさない。

「ウ、ウィンド・ブレイク！」

ロレーヌはもはや苦し紛れに杖を振るい魔法を放つ。

それは自らの恐怖の権化をぬぐい去るように杖を振っているようにも見える。

だが、そんな魔法もランサーの体から沸き立つような蒼の魔力によって防がれる。

彼には最低でもトライアングル魔法で無くては魔力による魔法は通用しない。

「く、くそ…！」

杖を振るう。

だが、全ては無意味。

ランサーは静かに彼へと歩み寄り、その距離を縮める。

死の恐怖が静かに愚かな少年へと近づいてくる。

「なな、なんで…！」

少年はこのハルキゲニアの貴族を象徴したような性格である。

始祖から受け継いだ魔法こそが、貴族の血こそが、この世の全てである。

…と、盲信している。

そんな幻想は目の前の現実によって打ち壊された。

「歯食いしばれ」

「な…！」



「吐かせ」

元もエミヤもそんなクーに茶々を入れている。  
だが、周りはそんな彼らの空気とは違い、冷えきっている。

「あ、あなた…」

「どうしたんだ嬢ちゃん？」

ルイズは顔を真っ青にしながら、自分の使い魔に口を開く。  
その言葉は恐らく、貴族に手を上げた平民がどんな事になるのかと

「どう不安なのだろう。」

「安心しろ、ルイズ。俺達にさしたる問題は起きない」

「どづいつこと?」

「忘れてるのか? 俺達は平民ではあるが、ルイズの使い魔だ」

「だから何?」

「ヴァリエール家」

「タバサは短く答えだけを口にする。」

「俺達は確かに魔法を使えるが、ここハルキゲニアではただ平民である。」

「平民が貴族に手を上げたとなれば、普通なら処刑ものだが、彼らはヴァリエール公爵家末子ルイズの使い魔である。」

「そもそも、決闘という形の最中に先に手を出したのはローヌの馬鹿ガキだ。非は向こうにある」

「そういうことね」

「ど、どづいつこと?」

「キュルケは理解したようだが、ルイズは未だに理解してないようだ。」

「あのねルイズ。公爵家に手を出そうとする馬鹿な貴族がいると思っ?」

「あ、そうか」

「それ以前に、この光景はオスマンに見られている」

そう言つて、元は空の何も無い場所を見上げる。

それに吊られ、その場にいた一同は同じ場所を見ている。

「覗き見はあまり、褒められた事ではないが…解っているな？」

「「「「??」「」」」

一同は何もない空を会話している元に疑問符を顔に浮かべるが、恐らくは何かあるのだろう。

得体のしれない男。

それが、ルイズとキュルケ、タバサの共通した元に対する評価の一つであったため、オスマンが何かしらの手段で此方の状況を見ているのだろうと思つた。

オールド・オスマンという老人も得体のしれないメイジであるからだ。

元は顔を空から下げ、ルイズの顔を見る。

「あの状況でヴァリエール公爵家に手を出したんだ…。下手をしなくてもあのガキが処罰されるだろうな。だから、こちらにはオスマンから注意を受ける程度でさしたる問題は起きん」

「…だそうだぞシエスタ。だから、そんな不安そうな顔をするな」

未だに血の気の引いた顔をしているシエスタに、安心するようにエミヤは言葉をかける。

だが、未だにシエスタは顔面蒼白である。

それを見て、エミヤは困ったような顔をするが元とクーは苦笑する。

「それで、どうだったルイズ」

「な、なにが？」

「君の使い魔の実力の一端を見ての感想は」

こんな空気の中、こいつは一体何を言い出すのだろうかという顔をルイズはしている。

だが、本人はいたって真面目である。

ルイズは自分の使い魔の事を未だに少し侮っている口があるため、この機会は案外良いタイミングであった。

「…悪くないわ」

だが、素直に褒めることが出来ない性格のルイズはそんなことしか言えなかった。

顔には凄かったと言いたげなモノが浮かんでいたが、顔を顰め頬を朱に染めてツンとしている少女に一同は苦笑するしかなかった。

そんなルイズの姿を見て、漸くシエスタにも笑みが浮かんだ。



「ミスタ・ロレーヌの行動で一時はどうなるかと思いましたが」

「何とかなったの」

鏡の向こうではルイズの姿に苦笑している元達の姿が見える。  
先程、元がこちらに気づいたようで話しかけてくるという思いもしない事態が起きた。

「じゃが、元にも困ったのお」

「どういう意味です？」

元がとつた行動は暴走した生徒の魔法からエミヤを守った位である。  
その何が困ったことなのだろうか。

「そうでは無い。 シンドウが此方に言った“解っているな？”の  
言葉の意味はヴァリエール家の使い魔にロレーヌの家の人間が無闇  
に魔法を加えた…その趣旨を伝えろと言っておるのじゃ」

「シンドウ殿はミスタ・ロレーヌを潰すおつもりだと？」

「と、というより、これを皮切りに愚鈍な貴族共を潰すつもりじゃろう……。逆境すら順境にする……恐ろしいのお」

30年前に出来なかつた事を今する。

それがカニバルがいない事から来る心の余裕故か、どうかは解らないが、彼は本気なのだろう。

「そのような事が可能なのですか!？」

「不可能を可能にする……それがハジメ・シンドウという男じゃ」

王宮にも顔が効き、ハルキゲニア随一の貴族ヴァリエール公爵家にも強い影響を持つ彼だ。

ハルキゲニア全土は兎も角、トリスティンには間違いなく変化をもたらすだろう……始祖ブリミルが魔法をもたらして6000年。

6000年を経て、彼は変革をもたらす。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4108y/>

---

ゼロの使い魔advance

2011年11月28日04時48分発行